



靖國神社みたままつり  
7月13日から16日まで、恒例の靖國神社「みたままつり」が盛大に斎行され、参詣者は相変わらず延べ三十万人に及んだという。

今年の「みたままつり」の特長といふか、従前と違ったところは、神社境内外苑での露店の出店がなく、酒宴は一切禁止され、飲食は遊就館前の特定場所以外は許されなくなったことである。その理由は、靖國神社の社報

「靖國」平成27年7月1日発行第720号「靖壽」欄その他に掲記されているように、「ツイッター・フェイスブック等のソーシャルネットワークの普及により、近年のみたままつりは危険を感じる程の異常な人出となり

報 特 攻  
平成27年8月

第106号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594  
FAX 03 (5213) 4596

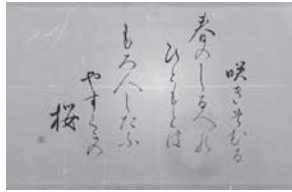
http://www.tokkotsai.or.jp  
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能  
発行人 羽淵徹也  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

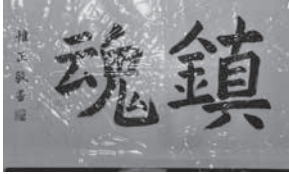
「捨て足軽」………1514  
第44回萬世特攻碑慰霊祭に参列して………9  
戦艦武蔵海上慰霊祭他フイリピン慰霊巡拝の旅………8  
昇殿参拝に参列して………8  
第2艦隊戦没者慰霊靖國神社祭・招魂観桜祭に参列して………7  
第56回出水市特攻碑慰霊祭に参列して………7  
靖國神社みたままつり………1

目次

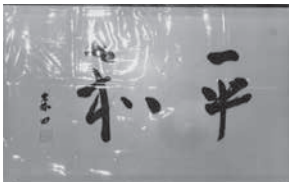
平成27年4月7日徳之島「戦艦大和を旗艦とする第二艦隊戦没将士慰霊祭」における「艦隊戦没将士慰霊祭」に参列して………16  
第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して………17  
第49回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して………20  
千葉縣護國神社  
平成27年度「千葉県特攻勇士之像慰霊祭」に参列して………22  
山口縣護國神社  
「特攻勇士之像」奉納除幕式(15体目)に参列して………23  
山口縣護國神社  
「特攻勇士之像」奉納除幕式に参列して………24  
京都靈山護國神社慰霊祭に参列して………26  
第45回指宿海軍航空基地「哀惜の碑」慰霊追悼式に参列して………27  
第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して………30  
日本海海戦百周年記念式典に参列して………31  
殉國沖繩學徒顯彰七拾年祭………38  
第58回旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式に参列して………41  
能代八幡神社「特攻勇士之像」旧陸軍東雲飛行場慰霊祭に参列して………43  
第24回秋田県特別攻撃隊招魂祭に参列して………44  
《読者の声①》  
全体と部分―正しく国家観を理解する―………44  
《読者の声②》  
「学徒出陣に思う」の所感………45  
世田谷山観音寺  
特攻平和観音月例法要報告………45  
特攻隊に関する新聞記事の紹介………47  
終戦七十周年記念公演  
「帰って来た蛋、未来への伝言」………49  
《特攻顕彰会・研修会》  
埼玉縣護國神社・特攻勇士之像慰霊祭と桶川飛行学校跡見学………51  
事務局からの報告等………52



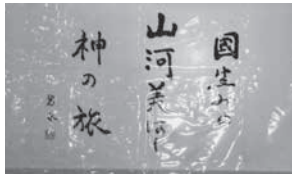
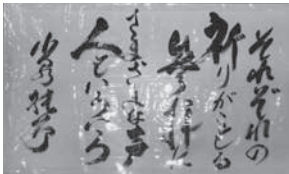
左 扇千景会長・右 島津肇子様献燈



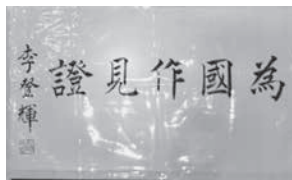
左 阿南惟正様・右 坂田藤十郎様献燈



左 森田次夫様・右 所功様献燈



左 小泉純一郎元首相・右 湯澤貞様献燈



左 一龍齋貞花様・右 李登輝元台湾總統献燈

○献燈（懸け雪洞）

- ・元皇族・崇敬者総代 島津 肇子様  
「咲きそむる 春のしるべの ひとつも とは、もろ人したふ やすくにの桜」  
靖國神社崇敬奉賛会会長 扇 千景様  
「人生は美であり愛である」  
重要無形文化財保持者（人間国宝）  
歌舞伎俳優 坂田藤十郎様
- 「藝」
- ・崇敬者総代 阿南 惟正様  
「鎮魂」
- ・崇敬者総代 所 功様  
「至誠通天」
- ・崇敬者総代 森田 次夫様  
「平和」
- ・元宮司 湯澤 貞様  
「国生みの 山河美はし 神の旅」  
元内閣総理大臣 小泉純一郎様  
「それぞれの 祈りがこもる 参拝に さまざまな声 人もいろいろ」
- ・元台湾總統 李 登輝様  
「為國作見證」  
講談師 五代目 一龍齋貞花様  
「吉祥 靖國の夏」  
外交安全保障研究家 鈴木 邦子様  
「天高く あまたの御霊 仰ぎつ、 千年の平和 祈る夏なり」  
相撲協会理事長 北の湖 敏満様  
「和」
- ・横綱 白 鵬様  
「心」
- ・横綱 日馬富士様  
「道」
- ・カートプロモーション代表 柿崎裕治様  
「義」
- ・女優「帰って来た蜚」の鳥濱トメ役 伊藤つかさ様  
「身のほどに 思ひあまれるけしき にて、いつくともなくゆく蜚かな」  
（平 忠度）

（原田曜平氏論説参照・社報「靖國」平成26年12月号）、一部若者たちのマナーの悪さは、神社近隣での迷惑行為にまで及んでいる。神社では警備員を増強するなど、様々な対策を講じてきたが、かかる状況の改善にはつながらなかった」ということで、「残念だが、神社では当分の間、外苑での露店の出店を見合わせ、酒宴を禁止することとした」ということである。神社としては、余程のことと思われる。というのは、同欄にも書かれているように、このような禁止措置が執られたのは、戦時中の「昭和14年4月、神域の森厳を

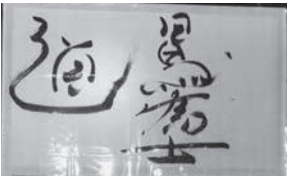
図るため今次大祭より外苑の見世物興業ならびに露店の営業を許可しないこととし、催し物は奉納武道・能・相撲などに主力を置き・・・とあるように、戦時の国民精神の作興にならつて以来のことで、戦後はむしろ、同じ欄に記載されているように、昭和26年春季例大祭における筑波宮司の挨拶にも「私達が幼き日に親しんだあの懐かしい九段の招魂社のお祭りにぎはひを御社頭に一日も早く繰りひろげ御祭神をお慰め申し上げると共に御社頭にぬかずきかはらぬ平和への祈りをささげたいものと思ひます」とある。九段の招魂社以来靖國神社のお祭りは、特別な庶民感覚の賑わいを見せていたようである。それは、靖國神社の御祭神が一般庶民出の勇士や婦女（大和男子や撫子）を主とした身近な方々の御霊ということにもよるのではないかと思われる。それ故、この「みたままつり」の最大の特徴は、老いも若きも世代を超えて、ここ靖國の宮居に集い、今は護国の神となられた祖父や父、兄弟、戦友たちを偲び、尊い命を捧げて国を守った英霊の御霊を迎えて共に一夜を楽しみ、遺徳を讃え、感謝の誠を捧げるところにある。そして、これは我が国古来の習俗である一大盂蘭盆（うらぼん）の行事でもある。境内一面を照らす大小3万

暑中お見舞い  
申し上げます

<p>公益財団法人 水交会 会長 藤田幸生 理事長 齊藤隆 副理事長 田内浩 専務理事 赤星慶治 事務局長 本多宏隆</p>	<p>公益財団法人 偕行社 理事長 志摩篤 副理事長 塩田章 副理事長 深山明敏 副理事長 富澤暉 副理事長 白石一郎 兼専務理事 若木利博</p>	<p>公益財団法人 海原会 理事長 堺周 副理事長 酒井省三 専務理事 助村隆典</p>	<p>公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会 会長 島村宜伸 理事長 柚木文夫 専務理事 圓藤春喜 事務局長 岩田司朗</p>	<p>航空自衛隊退職者団体 つばさ会 会長 藤川壽夫 副会長 山本修三 副会長 外蘭健一朗 副会長 片山隆仁 副会長 鹿股龍一 専務理事 長島修照</p>	<p>公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会 理事長 杉山蕃 副理事長 藤田幸生 専務理事 衣笠陽雄 事務局長 羽瀨徹也</p>
--	--	--	---	---	---



左 北の湖敏満様・右 鈴木邦子様献燈



左 日馬富士様・右 白鵬様献燈



左 伊藤つかさ様・右 柿崎裕治様献燈

余の献灯や懸け雪洞は、精霊の迎え火と送り火になぞらえたものであろうか。「我が国古来の習俗」がそこに表されているのである。

この「みたままつり」の由来や意義については、当顕彰会会報「特攻」第92号に掲載の東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖國神社と日本人』（平成10年8月・PHP新書）や靖國神社社報「やすくに」第624号（平成19年7月1日）掲載の京都産業大学所功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、今年、遊就館内に掲げられている「光の祭典『みたままつり』

の由来」には、その概要が次のように記載されている。

「『みたままつり』の先駆けとなりましたのが、昭和21年7月14・15両日の2夜にわたり、境内の相撲場で催された、長野県遺族連合会主催による奉納地方民謡・盆踊り大会です。

当神社の資料によれば、この催しには3万人を超える参加者で盛況を極め、中には連合軍総司令部バーンズ少佐（14日）、ネルソン少佐（15日）も観覧し、その大会の様子は全国に録音放送された、と記録されています。

当時、この企画に関わった靖國神社の坂本定夫

の坂本定夫 欄宜(故人) は「亡き人々のみたま(神霊)を祀る日本の古俗を、お盆の季節である7月に新生靖國に復活しては」という構想を描き、大東亜戦争末期に『先祖の話』

を書いた民族学者の柳田國男氏を訪ねて相談しました。柳田氏は「みたまの慰霊は極めて大事なこと、世の平和のためにも大切だ。祭りは『華やかで風流』であるべきだ」と賛意を示された。昭和22年7月13日から4日間にわたり第1回の『みたままつり』が催され、以後恒例となりました。

現在は各界名士による揮毫の懸雪洞約300灯をはじめ、ご遺族、戦友、崇敬者等により奉納された大型・小型の提灯約3万灯や全国の有名灯籠が掲げられ、青森ねぶた、地元趣町靖國講・芝濱陸会等による神輿振り、吹奏楽団



大村益次郎銅像下での盆踊り



青森ねぶた (東京ねぶた連合会)



ねぶたの前で踊る跳ね子達

によるパレードが行われます。外苑の大村益次郎像周辺では連日、盆踊りが、内苑の能楽堂では、日本歌手協会有志や、つのだ・ひろ氏をはじめ有名歌手による奉納公演や日本舞踊、バレエ、奇術等の芸能も催され、その賑々しさは『華やかで風流』な日本一の光の祭典であります」とある。

今年第69回目を迎えた「みたままつり」は、今や、都心で催される新暦の一大盆祭りとして定着しているのである。13日は、靖國神社「みたままつり」の前夜祭の日である。

この時期、東京では例年、梅雨の終わりに襲われることも多いの雷雨であるが、今年、台風10号、11号の影響で西日本は暴風豪雨に襲われたものの、東京は、逆に晴天続き

で、34〜35度の猛暑日が続いた。この日も朝から晴天で、うだるような暑さであったが、夕刻にはやや涼しくなった。やがて宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小約3万個の懸け提灯や懸け雪洞が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。昭和22年7月13日〜16日に神社の正式行事として斎行されてから今年で満68年、69回目を迎えた。

更に靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕

刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂齋庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し戦域に殉じ非命に斃れた人々

で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸

霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合

祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等(空襲・原爆

等)により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することとなった。

一方、政府主催の「全国戦没者追悼式」は、日本遺族会などの早くからの

強い要望により、ようやく昭和38年5月の閣議決定を受けて、同年8月15日

(停戦公表の日、月遅れの盆)に初め

て実施されたが、これは前記靖國神社の「諸霊祭」を含めた「みたま祭」の延長戦上にあるものと言えよう。

右の閣議決定文には「今次の大戦における全戦没者(軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む)に対し、国をあげて追悼の誠を捧げる・・・」とあり、しかも、「宗教的儀式を伴わない」と断りながらも、御臨席の天皇・皇后両陛下に合わせて

「全国民が一齐に黙祷するよう勧奨」している。また、昭和39年の第2回追悼式は、靖國神社の境内で行われてい

る。更に、「終戦二十周年」の第3回追悼式からは、規模を拡げて国立の日

本武道館で実施されることになったが、その際、正面中央の標柱に「全国

戦没者之霊」と明記され、それへの拝礼・献花が今日まで続いている。神道

の立場から見れば、この標柱は、全戦没者の神霊が宿る神籬(ひもろぎ)の一種(榊や御柱の類)にほかならない、と所教授は

指摘しておられる。更にまた、同教授は、ともあれ、7月の賑やかな「みたま祭」と8月の厳かな「全国戦没者追悼式」が、これからも共に永く続け

られるよう念じてやまない、と述べておられる。全く同感である。このこと

は、靖國神社に寄せる日本人の誠の心

の表れである。

期間中遊就館内は夜9時まで開館されており、折柄特別展「大東亜戦争七十年展 最終章—今を生きるすべての人へ—」や、過去の、「みたままつりに寄せられた「揮毫ぼんぼり展」なども開催され、熱心に鑑賞する参詣者で遅くまで満員の盛況であった。

明くる14日(日)は、夕刻6時から

第一夜祭が斎行されたが、その日も、

東京は朝から雲一つない晴天の猛暑日となった。拝殿から拝する御本殿の偉容は、ライトアップされて、いよいよ神々しく、御紋章は金色に輝いていた。時折吹き抜ける風は涼しさを運んで心地良かった。徳川康久宮司以下大勢の神官が御奉仕する諸神儀を終え、参列者一同御本殿に昇殿して拝礼し、第一

夜祭は滞りなく終了した。

今年は境内外苑での露店の出店もなく、広々とした参道では、恒例の千代田区と千代田区体育協会主催の「納涼民踊のつどい」が大村益次郎銅像下で連夜開催され、勤め帰りのサラリーマンを含めてなかなかの盛況であった。筆者も、昔取った杵柄ならぬ懐かしの盆踊りの音頭に、つい連れ込まれそうになった。また、東京ねぶた連合会による青森ねぶたも、やや小振りながら、跳ね子も思い切り踊り跳ねて、本場の祭り気分が溢れていた。参詣者もそれらの祭りを楽しみながら、通行もスムーズに流れていた。

また、境内での飲酒は全面的に禁止されたが、遊就館前には、休憩所のテントが設けられ、冷たい飲み物なども販売されていて、一息つくことができ

た。ただ、そのため、例年の全国有名

灯籠等の展示場所が、遊就館旧玄関前テラスに移され、やや狭い感じとなった。しかし、全体的には、御霊をお慰めし、御霊と共に盆を楽しむ雰囲気は整ったように感じられた。

次いで、今年のみたままつり奉納芸能祭の最終日、16日のトリを務めたのは、例年、7月14日の第一夜祭に行われていた、一般財団法人日本歌手協会の「奉納歌謡ショー」であった。今年

は、7月13日から15日まで、東京の空

は、殆ど一点の雲もない快晴で水銀柱はうなぎ上り、連日34〜35度の猛暑日であった。ところが、台風11号の影響で、16日は朝から雨が降ったり、止んだりの空模様で、夕方からは、風雨が強まるとの予報であった。筆者も雨を覚悟で、携帯用雨合羽を用意して出掛けた。ところが、逆に夕刻頃から雨も止み、18時の開演間近には、曇り空ながら時折涼しい風が吹き抜ける絶好の夏の夕涼み日和となった。これも英霊の御加護と拝された。恐らく、英霊も懐かしい歌声に和しておられたのではなかろうか。会場の能楽堂前は、昨年よりは少ないものの、開演前から七、

八百名の観客で溢れていた。日本歌手協会は、今年設立53周年を迎えたが、設立以来長年にわたり靖國神社みたままつりの奉納歌謡ショーを有志により奉仕してきた。現会長は、昭和20年生まれ歌手田辺靖雄で、懐かしい裕次郎の「俺は待ってるぜ」と自身のヒット曲「夢であいましょう」を歌った。第1景のオーブニングは、

音楽家・合田道人の名司会により、全員が戦後のヒット曲「リンゴの歌」を歌い、第2景として英霊たちが運んできた平和と題して、初参加の冠二郎が「憧れのハワイ航路」を、ボニージャッ



扇ひろ子



原田直之



名誉会長 ベギー葉山



会長 田辺靖雄



ボニージャックス



アントニオ古賀



内田あかり



フィナーレ (青い山脈)



あべ静江



司会・構成 合田道人

クスが「浅草の歌」を、あべ静江が「森の水車」をそれぞれ歌った後、第3景は、戦後の三大スターを歌うと題して、美空ひばりの「悲しき口笛」を、カー・トプロモーションの特攻劇「帰って来た蜚々未来への伝言」の主題歌「蒼き空」を歌った内田あかりが、「おんな船頭唄」を民謡の大御所原田直之が、先に挙げた「俺は待ってるぜ」を田辺靖雄が、それぞれ歌い、第4景は、戦後70年、英霊たちに捧ぐと題して、戦前・戦中に、既に歌われていた「南国土佐を後にして」(この歌は支那戦線に派遣された四国出身兵士を主体とする鯨部隊―第40師団・善通寺編成・兵団文字符「鯨」―でよく歌われていた土佐の「よさこい節」を原曲とするという)と「空の神兵」を、歌手生活62年の超ベテランで、日本歌手協会名誉会長でもあるベギー葉山が、「もずが枯れ木で」をボニージャックスが、「誰か故郷を想わざる」を、父親がビルマで戦死したというアントニオ古賀が、「アルミの弁当箱」をたてようこが、「南十字星の下で」を静太郎が、「知覧の桜」を自ら作詞した日野美歌が、先に挙げた「蒼き空」を内田あかりが、「原爆の子の像」を扇ひろ子が、「僕は唱歌が下手でした」と「九段の母」を司会者でもある合田道人が、それぞれ歌い

上げたが、新人・ベテラン入り交じって非常に想いの籠もった歌唱力のある奉納歌であった。次は第5景のこの人の一曲と題して、田辺靖雄が「夢でありましょう」を、あべ静江が「みずいろの手紙」を、日野美歌が「氷雨」を、冠二郎が「炎」を、扇ひろ子が「新宿ブルース」を、原田直之が「花は咲く」を、ベギー葉山が「学生時代」を、それぞれ持ち歌のヒット曲を歌い上げ、最新の第6景フィナーレは全員で、聴衆も交えて「青い山脈」を斉唱して21時過ぎ、感動のうちに幕を閉じた。英霊もさぞ満足されたことであろう。

## ◇

○鎮霊社例祭(諸霊祭) 靖國神社の拝殿から本殿へ向かう左側の回廊の中心に出入り口の扉があつてその外側の旧招魂斎庭に二つの小社がある。向かつて右の小社を「元宮」といい、左の小社は「鎮霊社」という。この二社とも大樹の下にひっそりと建っており、よく似た造りの小社であるが、「元宮」は瓦葺きで、「鎮霊社」は銅板葺きである。この旧招魂斎庭に入るには、通常、拝殿の左、回廊に連なる玉垣の奥の門からであるが、門扉が開けられているのは午前9時から午後4時までである。「元宮」は文久2(1862)年、津和野藩士出身で、平田篤胤派の国学

者として尊攘志士と共に王政復古に活躍した福羽美静(1831年〜1907年、維新後、藩主亀井茲監が神祇官副知事に就任すると、福羽も神祇関係の要職を歴任、1869年明治天皇の侍講となる)が中心となり、初めて徳川の齊昭卿ら維新の志士46人の霊を慰めるため、京都の邸内に密かに祠堂を建てて祀った。奠都に伴い東京に移されたが、招魂社の先駆けとも言うべき由緒ある祠堂で、昭和6年、福羽家より神社に奉納され、「元宮」と称して今日に至っているが、例祭日は4月1日である。

や空襲による死没者を始め、前記のように明治維新以来の戦争・事変により死没し、靖國神社に合祀されない犠牲者、更には我が国民のみならず、万国の戦争犠牲者の霊を弔い、世界の平和を祈願するため、建立されたのが、この「鎮霊社」であり、靖國神社では「元宮」と共に毎日、神官による祭祀が行われており、その例祭が、趣旨を同じくする「みたままつり」の前夜祭の後宵祭りとして毎年7月13日の午後8時過ぎに行われている。

一方、左の小社「鎮霊社」は、「明治維新以来の戦争・事変に起因して死没し、靖國神社に合祀されぬ人々の霊を慰める為、昭和四十年七月に建立し萬邦諸国の戦没者も共に鎮霊」されており、例祭日は7月13日である。この「鎮霊社」は、靖國神社の第5代宮司を務められた(昭和21年1月から昭和53年3月死去までの32年間)筑波藤磨氏が、前年の宗教者国際会議に出席し、ヨーロッパ諸国を訪問して帰国された後、各国とも先の大戦で、国際条約無視の無差別爆撃や人種的迫害等により数百万にも上る非戦闘員の犠牲者の霊を弔う祭祀が行われている現状に鑑み、我が国でもそのような祭祀を行う必要性を痛感され、先の大戦での原爆

(飯田 正能記)

**平成27年度  
豫科練雄飛会慰霊祭・招  
魂観桜祭に参列して**

会員 原島 淳子

平成27年4月6日(月)、靖國神社で斎行された「平成27年度豫科練雄飛会慰霊祭並びに招魂観桜祭」に当頭彰会代表として参列させて頂きました。

当日は10時半の受付開始時間前の早い時間からご参列の方々が見受けられ、年に一度の雄飛会の慰霊祭を心待ちにしていらつしやるのかと、お仲間の方々にお会いした時の皆様の笑顔を見出し、胸が熱くなりました。ただ

当日の桜は盛りを過ぎており、満開の花の下で開催できたらと思つたのは、私だけではないと思います。

受けを済ませて参集殿に集合し、主催者である豫科練雄飛会の小林和夫会長(乙飛19期)のご挨拶の後、手水を終えて拝殿へ参進し、保坂俊雄副会長(乙飛23期)率いる楽団スカイマスターズの生演奏に迎えられながら拝殿に着席して、慰霊祭典となりました。

慰霊祭典は、国歌奉唱で始まり、式祓・献饌・神官による祝詞奏上と、式次第に則り肅々と進められました。

小林会長は、祭文奏上の中で、「昭和33年3月に発足した豫科練雄飛会であるが、潔く散華した仲間の慰霊はも

とより、豫科練の史実と功績、純粹崇高なる精神を後世に伝え続けたい」と述べられたが、その言葉には大いに頷かされるものがありました。続いて献歌「海ゆかば」を全員起立して奉唱の後、本殿へ昇殿しました。本殿では、

御遺族・来賓等による玉串奉奠、拝礼の後、「国の鎮め」の奉奏を背後に聞きながら黙祷をし、撤饌の後、慰霊式典は滞りなく終了致しました。

本殿退下の後、一同靖國會館前で記念撮影をしましたが、その時、渡辺勲会員(乙飛23期)の持つ大きな豫科練雄飛会の旗が翻る中、一陣の風と共に沢山の桜の花びらが舞い落ちてきました。これはきっと在天の御仲間の方々が御一緒に写真に写るため舞い降りて来られたのだ、と思えてなりません。

林会長のお礼の言葉を最後に、閉会となりました。

今年は終戦から70年という一つの節目の年でもあり、各所での慰霊祭も例年とは異なる雰囲気で行われることでしょう。当日、通りすがりの突然の参加でも良いと思います。今まで知らなかった方達にも一緒に手を合わせて頂きたい。国や家族を守るために身を捧げて逝かれた方々の御冥福を改めてお祈りしてほしいと願って止みません。

今回は福島からお出でになったという方々もいらつしやいました。お仲間達と話しておられる姿は、皆様当時に戻ったかのようでした。来年もまた、皆様がお元気な姿で在天のお仲間会えますよう、心から願っております。

豫科練というと、次の遺詠がどうしても私の頭の中を過ぎります。

「希くばさいはての地まで 昭和の御代に 童顔の豫科練という「さきがけ」ありと 後世に伝えられんことを」  
この想いを現代の中学生・高校生に伝えていけたら、否、伝えていかなければならない、と思っております。

この遺詠を残して征った豫科練生の想いに応えるためにも。

最後に、次の句を捧げます。  
「さきがけと 征きし昭和の若桜 散る花びらに 君をみる」



慰霊祭受付風景



招魂観桜祭・スカイマスターズ演奏

## 第56回出水市特攻碑慰霊祭に参列して

評議員 及川 昌彦

平成27年4月16日(木)、第56回出水市特攻碑慰霊祭が出水市特攻碑公園内広場において、出水市特攻顕彰会(会長洪谷俊彦出水市長)主催により執り行われ、当顕彰会を代表して参列しましたので、次のとおり報告いたします。

### 前夜祭

4月15日(水)羽田空港で、当会会員でもある空挺同志会の上野安則氏及び高沢孝氏と合流して鹿児島空港へ。同空港からは、当顕彰会の会員である、さくらツアーの吉満正広氏の運転で第二国分特攻基地(十三塚原)慰霊碑に直行。毎年8月15日に、霧島市が同慰霊碑前で慰霊祭を執り行っているとのことである。その後、陸上自衛隊国分駐屯地を表敬訪問。第122普通科連隊広報班平田香織氏の案内により薩摩隼人記念館を見学。歩兵第45聯隊の貴重な資料が展示されていた。事前に連絡すれば、一般にも公開しているの

より多くの方に観ていただきたい内容であった。駐屯地の正面には、特攻機

発進之地碑があり、毎年4月22日に最も近い日曜日に、慰霊祭が執り行われている。

18時から、出水市長主催の交流会に参加。4年連続の参加で、顔馴染みも多く、1年振りの再会を喜ぶとともに御遺族の方々から聴き取りをしつつ、趣向に富んだアトラクションを楽しんだ。

最後は恒例の、壇上での同期の桜を斉唱し、明日の慰霊祭の成功を期し、万歳三唱で解散となった。

### 慰霊祭

開式10分前に、海上自衛隊鹿屋航空基地からの慰霊飛行を、参列者全員で帽振れを行い、11時、国分駐屯地の儀仗隊・音楽隊と地元消防団員による国旗及び軍艦旗の掲揚、国歌斉唱、当時の通信兵による突入の打電(ト連送)の後、黙祷、特攻碑への献花を、当顕彰会代表として行った。

洪谷俊彦市長の慰霊のことばの後、濱田謙一(甲飛13期)元隊員代表のことばがあり、当顕彰会の会員で、宮崎県高鍋から参列された安田郁子氏による次の献歌があった。

特攻兵の望も花の枝持ちて  
駆けつけ来れば機は飛び立ちぬ

特攻の少年は藪かげ流れに  
落とせる涙の波紋

海に向こう滑走路上の赤き月

特攻隊の出で征し夜も

次いで、自衛隊儀仗隊による捧銃、

自衛隊音楽隊による「海ゆかば」の献奏、千羽鶴奉納、西内和田宮流5段による献武、居合道の後、全員献花した。音楽隊による演奏は「異国の丘」「燃ゆる大空」「建設の歌」「加藤藤戦闘隊」「紀元2600年」「ラバウル海軍航空隊」「勇敢なる水兵」「轟沈」「軍艦行進曲」で、その後全員で「同期の桜」を熱唱し、軍艦旗降下で閉式となった。

慰霊祭終了後、出水市特攻碑顕彰会

元副会長の竹添二雄氏邸での直会に参加し、参列者と旧交を温めつつ、1年後の再会を約して解散となった。

### 所見

4年連続の参列となり、関係者ともすっかり懇意になった。洪谷俊彦市長は大変熱心で、基地跡の掩体壕や資料館の整備のための予算を確保し、青少年の教育のため、戦争遺産を活用しようとしておられる。

参列された御遺族には、遠くフランスや栃木県、香川県から駆け付けた方もおられた。慰霊祭は毎年4月15、16日と決まっているので、当顕彰会からも多くの会員の参列を希望します。

## 第二艦隊戦没者慰霊靖國神社昇殿参拝に参列して

評議員 及川 昌彦

平成27年4月12日(日)10時30分から靖國神社で斎行された、第二艦隊戦没者慰霊祭に原島淳子会員と共に参列した。10時15分、靖國神社参集殿1階に集合となっていたが、当日は、山手線が全線停止しており、到着不可能な方々もおられた。

昇殿参拝は、一般の昇殿参拝者と一緒にだったため、15分程度で終わるといふあっさりした内容であった。参列者は、戦艦大和乗組みの生存者都竹卓郎大尉(海兵72期)、阿部一孝少尉(海兵74期)を始め、雪風、朝霜、矢矧乗組みの生存者と御遺族の計26名であった。有賀幸作大和艦長や吉村真武矢矧艦長の御息女もお見受けした。

昇殿参拝後の懇親会は、グラウンドヒル市ケ谷で開催された。座席はこれまで、大和、磯風、雪風、浜風、初霜、朝霜、冬月等乗組艦船ごとのテーブルであったが、参加者が年々減少してきたため、今後の運営についても話し合いが持たれた。大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会への加入も検討されたが、結論は出ず、来年への持ち越しとなった。



## 戦艦武蔵洋上慰霊祭他 フィリピン慰霊巡拝の旅

評議員 飯田 正能

4月24日～28日の間、4泊5日の日程で、フィリピン慰霊巡拝の旅に私費参加した。4泊のうち前後の3泊はホテル泊であったが、中1泊は船便待ちの3時間の仮眠と船中泊である。フィリピンは熱帯ながら丁度乾季の後半、夏真っ盛りで、連日35～36度の猛暑であった。移動手段は車と飛行機と船であるが、予定時間通り進行したことはなく、待ち時間が多く、予想以上に苦難の旅であった。

今年3月2日、マイクロソフトの共同創業者で米国の資産家ポール・アレックス氏が、フィリピン中部シブヤン海の海底約800mに沈む戦艦武蔵を発見し、その映像も公開した。しかし、戦艦武蔵に関しては、既に平成17年に、深海探査会社経営の米国人マーク・ゲリエン氏により同海底に沈む戦艦武蔵と確信できる艦影を発見しており、深海での撮影に必要な無人探査機等の機材がなかったため、細部の公表はできなかった。同氏は、日本の精神・文化を尊重する数少ない米国人であり、し

ばしば来日して戦艦「武蔵」の命名の由来となる埼玉県さいたま市大宮区の「水川神社」(武蔵國一宮、武蔵の艦内には「武蔵神社」が祀られており、御神体は武蔵國水川神社から分霊したものである)にも参拝し、慰霊や撮影に関し趣旨を理解し、協力してくれる日本人を探していたが、昨平成26年末に同業者で適任者が見つかり、「戦艦武蔵発見プロジェクト実行委員会」が充足し、今年2月から諸準備に取り掛かり、4月以降実地調査を開始する予定であった。

一方、昨平成26年、戦艦武蔵乗組員の遺族(戦没者1049柱)や関係者で構成される「武蔵会」を中心とした「戦艦武蔵顕彰碑建立実行委員会」が発足し、戦艦武蔵の命日である本年10月24日に慰霊祭を執り行うべく準備中であった。そのような中において、武蔵と共にある御神体や英霊の御霊に対する少しの配慮もないまま、その姿が撮影され、全世界に公開されたため、この時を失せず、可及的速やかに現地での慰霊祭を斎行し、武蔵並びに英霊の御霊に心えるべく4月26日のフィリピン・シブヤン海洋上慰霊祭の斎行となつたものである。

海上自衛隊OBを中心とする洋上慰霊祭実行委員会の下、御遺族5名、武

蔵元乗組員3名を含む慰霊顕彰関係者40名は24日朝成田を発つてマニラ着1泊、25日朝マニラを発つてカリボ空港着、夜中の12時にバスでホテルを發ち同島北部のカティ克蘭港着、深夜1時50分、チャーター船(カヌー)の小型漁船改造の観光船)で出港し、現海域に向かう。満天の星空の下、約5時間、向かい風の強い漆黒の荒海を乗り越えて行つたが、皆かなりの船酔いであった。

洋上慰霊祭は、波に揺れる小型船の屋根に10名程が上がり、脇から支えながら朝の潮風に吹かれつつ斎行された。水交会が保管していた武蔵の旧軍艦旗がはためく中、トランペットの「国の鎮め」や「海ゆかば」が波しぶきにこだまして響きわたり、皆の感動を呼んだ。英霊もさぞかし喜ばれたことと思う。帰路ふと皆が振り返ると、洋上遥か大空に戦艦の艦影に似た雲が棚引いていた。「戦艦武蔵だ!英霊の御霊が別れを告げている」誰言うとはなしに、皆そう思われた。12時頃帰港し、浜辺で再度、神事に基つき、陸上慰霊祭が斎行された。

翌27日は3班に分かれて、朝からソン島内の慰霊碑巡拝旅行に出発した。公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会の我々4名を中心とする10名は、

マニラの北約70kmにある旧クラークフィールド空軍基地跡のクラーク特別区にあるマバラカット市観光局に旧知のヒルベロ局長を表敬訪問し、長年にわたる特攻隊慰霊碑等の建立、維持管理、慰霊祭の執行等に対する支援、協力に感謝の意を伝えるとともに、会食の席での友好親善を図つた後、各慰霊碑の巡拝等を行った。

クラーク基地リリーヒルにある平和観音像前では、昭和19年10月25日、関行男海軍大尉の指揮する神風特別攻撃隊敷島隊の出撃日時に合わせて毎年10月25日7時よりマバラカット市主催による平和祈念慰霊祭が執行されている。また、敷島隊が実際に出撃した西飛行場跡には、地元の家で篤志家のダニエル・ディソン氏によって建立された神風特攻隊出撃の碑が、更に東飛行場跡には、マバラカット市及び有志によって神風神社が創建され、特攻勇士の像が建立されており、いずれも地元市や有志によって良好に管理されている。最後に、アンヘレンス市のデイソン氏宅を訪問し、同所のカミカゼ博物館を参観したが、同氏は、神風特攻隊に関する著書、遺品、資料等を通じてフィリピンの若者達に武士道精神や大和魂を教え、民族の独立、愛国心の高揚を図っている。我々日本人こそ見

習うべきである。同氏との旧交を温め、氏の篤志に感謝してフィリピン慰霊巡拝の旅を終えた。誠に有意義な5日間であった。

### 【追記】

なお、本慰霊巡拝旅行に参加された当顕彰会の藤田幸生副理事長は、公益財団法人水交会会長を兼ねておられ、元海上自衛隊幕僚長でもあるので、「戦艦武蔵洋上慰霊祭」に当たっては、中心的な役割を果たされた。洋上慰霊祭においては、波に揺れる船上で、次のような挨拶をされ、参列者一同に大きな感銘を与えられた。

### ◇ 〈戦艦「武蔵」洋上慰霊祭「挨拶」〉

本日ここに、戦艦「武蔵」の洋上慰霊祭が執り行われるに当たり、一言御挨拶を申し上げます。

今年、戦後70年目に、この海の中に眠る戦艦「武蔵」が発見されたという映像が届きました。私達関係者は、居ても立ってもおられない気持ちで、何をさておき、ここ現地洋上に飛んで参りました。

今、慰霊祭が行われているこの洋上は平和平穏であります。これは御英霊の皆様の御加護の賜物であると感謝申し上げます。

昭和19年10月、皆様方は、我が国、

我が民族の危急存亡に際し、戦艦「愛宕」を旗艦とする艦隊を組み、レイテ沖に向け出撃されました。その途上、10月24日、この海上において散華されました。以来、70年の歳月が経ちました。戦後70年を期に、天皇、皇后両陛下は、この4月9日、パラオ・ペリリュー島に慰霊のため行幸啓され、南冥に散華された各国全ての御霊に対し、慰霊の大御心を捧げられました。沖縄、硫黄島、サイパンに続く慰霊の旅であります。

先の大戦に、国は敗れました。しかし私達は、戦後の廢墟から困難な時代を経て、昭和、平成と、今まで国の再興、発展のために努力してまいりました。そして、戦争の惨禍を忘れず、二度と戦争はすまいとの決意の下、世界の平和国家として歩んでまいりました。その結果、日本では、戦のない70年が続き、物質的にも、経済的にも、日本史上に例のない程の繁栄期を迎えることができたのであります。また、ここフィリピンを始めとする東南アジアにおいても、各国が次々と植民地から独立を果たし、発展を続けてこられました。

東西南北をめぐり、大国の浸出や中東諸国の混乱等、秩序が大きく揺らいでおります。テロ集団や核の拡散、海賊問題等に対する明確な解決の手段を見出し得ていないのが実情であります。この目の前に広がるシブヤン海に続く南シナ海や、その周辺海域においても例外ではありません。大国の軍備拡充、領土問題等、困難な環境下に置かれているのが現実であります。

人の世は、過去、未曾有の困難を幾度となく経験してきたにも拘わらず、今も極めて混沌とした事態に陥っているように思えてなりません。このような世界情勢の中で、日本が70年もの間、戦のない時を過ごし得たことは、まるで奇跡のようなもので、決してたやすいことではありませんでした。「平和と平穏な世」を富士山の頂上に例えるならば、そこに至る道は沢山あるように、国民が多様な立場から、それぞれに道を選び、競うように努力をしてまいりました。その結果でありましょう。

しかし、その最も大きな理由は何かと考えてみました。海上自衛隊に奉職してきた私から観えてくることは、皆様方の存在があったからだということであり、世界の海軍は、海上自衛

隊を通して、日本という国を畏敬の念を持って見詰めてくれております。その理由は、皆様方の先の大戦での、日本古来の武士道を貫いた戦い振りにありと申しております。正に、昔、弁慶が仁王立ちで主君義経を護ったように、70年後の今日でも、英霊の皆様が日本を守り続けていて下さるということとであります。今ここで、このことを申し上げ、感謝の言葉を捧げたいと思っております。

皆様、どうも有り難うございます。皆様のごことは決して忘れません。そして私達も、引き続き世界の平和と平穏を護るため、皆様と恥じない努力を重ねていくことをお誓い申し上げます。これからも私達をお見守り下さい。海に鎮まります御英霊の皆様、どうか安らかに眠り下さい。

平成27年4月26日

(公財) 特攻隊戦没者慰霊

顕彰会副理事長

(公財) 水交会会長

藤田 幸生

◇ なお、その後、「戦艦武蔵プロジェクト洋上慰霊祭実行委員会」から、大変立派な実施報告書が送られてきましたので、ご参考までに、縮小して後ろに掲載させていただきました。



マバラカット市ヒルベロ観光局長を  
表敬訪問



12時頃カティックラン港に帰港した  
チャーター船



マニラ空港からカリボ空港へ出発、挨拶をする祭  
典長と元武蔵乗組員3名 中央 祭典長 牧原秀樹衆  
議院議員、その右 大場貢氏 90歳、種村二良氏 90  
歳、その左 早川孝二氏 87歳



ヒルベロ観光局長事務所にて



海岸での陸上慰霊祭・神事



深夜1時50分カティックラン港出港、  
チャーター船内の藤田幸生・白田智子両氏



アンヘレンス市のダニエル・ディソン  
氏邸宅にて



クラーク地区リリーヒルの平和観音像  
(環境が様変わりしている)



6時50分頃現場海域到着時の船長



ディソン氏の描いた特攻勇士の画像  
(ディソン氏邸附属のカミカゼミュージア  
ムに展示)



関行男大尉の神風特攻・敷島隊が  
飛び立った西飛行場跡の碑



船上(屋根)で洋上慰霊祭開始、  
柱につかまって見上げる御遺族



カミカゼミュージ  
アムの神風神社



神風神社の特攻  
勇士の像



東飛行場跡の神風神社



海中に向かって祈りを捧げる御遺族

- ② 委員会の残り10名がバグサンハンの比島寺(跡)を慰霊  
 ③ 顕彰会の方々20名は急遽バグサンハンの比島寺(跡)への慰霊を取り止め、コレヒドール島における一日観光へ予定を変更  
 4月28日(大) 11:30~20:30: ホテル発、マニラ空港からフィリピン航空342便にて成田空港到着後、自由解散  
 4月29日(水) 15:30~15:50 委員会代表3名が氷川神社にて『戦艦武蔵軍艦旗』帰国報告

#### 【洋上慰霊祭概要】

現場海域まで船で向かう際に、約5時間の航海を要する為、ホテルにて3時間間の仮眠をとり、午前零時にホテルを出発して、バスでカティクラン港に向かいました。天候は快晴、満天の星空の下、深夜01:50の出港となりました。海路は弱い向かい風であり視界もよかったです。夜明け頃には大半の人が酔い船酔い状態となり、これを見た祭典長の牧原秀樹氏が06:10時に船を止めて現場手前で祭典を実施するよう指示しました。しかし、船長は「あと30分ほど現場に着くのでこのまま進める。」という事になり、ついに念願の現場に到着しました。その後、06:50時から現場海上での慰霊祭を行う事となりました。



現場では、神官の遠藤麻也様補宜が大変な船酔いにも拘わらず、略式にて神事を執り行いました。まず、戦後米軍から返還され、水交会が大切に保管していた「戦艦武蔵の軍艦旗」が掲げられ、敬礼を捧げた後、その戦艦武蔵の軍艦旗に見守られながら、元海上自衛隊東京音楽隊の堀田和夫氏によるトランペット伴奏での国家斉唱から始まり、肅々と慰霊祭が進められました。

#### 戦艦武蔵洋上慰霊祭実施報告

##### ご支援者各位

若拙の遅る候、皆様方に於かれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、標記につきましては、準備期間その他の少なからぬ制約の中、皆様方からの一方ならぬご支援により、ほぼ計画通りの日程で『戦艦武蔵洋上慰霊祭』及び関連業務を無事に完了出来ましたことを此に報告させていただきます。

この洋上慰霊祭は『戦艦武蔵洋上慰霊祭実施趣意書』にある通り、我々「戦艦武蔵プロジェクト、洋上慰霊祭実行委員会(以下「委員会」とします)」「(参列者20名)、遺族会を中心とした「軍艦武蔵会」と氷川神社関係者等の「戦艦武蔵顕彰会」(以下「顕彰会」とします)(参列者20名)の実施する洋上慰霊祭の実施を支援し、参列して英霊の御霊に衷心からの尊崇の念を示して慰霊させて頂く事にあります。(参列者名簿は別添)

##### 【行程概要】

- 4月23日(木) 10:00~11:00: 氷川神社にて委員会と顕彰会の合同社行会  
 4月24日(金) 07:30~15:30: 成田空港第2ターミナル集合  
 09:30 成田空港発、フィリピン航空341便でマニラ空港へ  
 15:30 マニラ市のヘリテージホテル到着  
 4月25日(土) 13:30~20:30: マニラ空港からカリボ空港へ移動  
 20:30 カリボのフェスティバルホテル到着、  
 夕食(弁当)後に仮眠  
 4月26日(日) 00:00 ホテル出発(バス)  
 01:30 カティクラン港到着  
 01:50 チャーター船で同港出港、現場海域へ向かう  
 06:50~07:20 洋上慰霊祭を実施  
 12:00~12:20: カティクラン港海岸にて陸上慰霊祭を実施  
 19:30~20:30: カリボ空港からマニラ空港へ移動  
 21:30 マニラ市のヘリテージホテル到着  
 4月27日(月) 08:30~18:30: 3班に分かれて行動  
 ① 委員会の内、10名がマバラカットの神風特攻顕彰碑等を慰霊

早川氏によれば、「戦後幾度となくこのようなセレモニーに参列してきましたが、今回のように泣き崩れたのは初めてです。しかし今回、本当にこの洋上慰霊祭ができて良かった。大変満足しています。皆様のご支援のおかげです。」と感慨深そうに感想を述べられ、全員が心を打たれた瞬間でした。

また、この間、不思議なことに、「武蔵」の大きな軍艦旗は洋上の旗風に翻ると翻り祭典に荘厳な存在感を示していましたが、海面はそのような旗風など吹いていないような静けさを保ち、無事に洋上での式典を終了することが出来ました。そして帰路に着いた私たちの船は、往路と違い、強い風に吹かれて揺れることなく、晴れ渡る紺碧の空の下、海の上を滑るように入りました。その復路30分ほど経った頃、船上から先ほどの慰霊祭を行った洋上を振り返った時、なんとその上空に、まさに戦艦武蔵の形をした雲が表れており、しばらくの間その形を保っていました。その後10分間ぐらいでその雲は消えてしまいましたが、あまりの不思議さに我を忘れて入ってしまいました。幸い近くにいた委員会の一人が写真を撮っていたので、此処にご紹介させて頂きます。



【写真を拡大して武蔵の写真を合成してみました】



安倍晋三総理大臣からの「追悼の辞」が牧原氏により代読され、牧原祭典長の慰霊の詞に続き、(公益財団法人)特攻隊戦没者慰霊顕彰会副理事長 兼 水文会会長 藤田孝生 元海上幕僚長の「あいさつ」がありました。その後、元武蔵乗組員である種村二良氏(90歳)による「国の鎮め」の喇叭演奏に続き、再び堀田氏のトランペット伴奏でマイクを握った当委員会の室田大史氏の声に合わせて全員で「海ゆかば」を2度合唱し、引き続き「巡検」の演奏が行われました。この「海ゆかば」の2度目の合唱の時、ニュース映像等でご覧になった方も多いと思いますが、「武蔵」生存者の早川孝二氏(87歳)が感極まって突然泣き崩れ、居合わせた私たちも思わずもらい泣きをしてしまいました。



委員会の10名が予定通りバグサンハンに向かい、委員会のその他の10名も予定通りマバラカットの特攻隊記念碑での慰霊に向かいました。

バグサンハンの一行10名は委員会スタッフのみで、比島寺(跡)の近くで、持参した白菊や、たばこ、日の丸扇及び藤田閣下が準備して下さいました白石(ペリリュー島の戦没者慰霊碑の基壇に使われたものと同じ石)等の供物を整えて黙祷を捧げ、「国歌」と「海ゆかば」を斉唱して英霊に捧げ、午後9時にマニラのホテルに帰りました。



マバラカットの一行は、藤田閣下はじめ帝国陸軍特攻隊第23振武隊伍井芳夫隊長のご令嬢白田智子様(71歳)、陸士61期の飯田正能氏(87歳)等特攻関係者、海上自衛隊OB及び委員会スタッフの合計10名で2台の車に分乗し、クラーク地区に向かいました。当日も好天に恵まれ、35度Cを超える猛暑の中でしたが、東飛行場跡、西飛行場跡の顕彰碑及び特攻隊員の慰霊像の3カ所を廻り、英霊に対し、黙祷を捧げたほか、堀田氏のトランペットによる伴奏で「国歌」及び「海行かば」の斉唱を行いました。



その後、顕彰碑近くのアンヘレス市にお住いのダニエル・H・ディソン氏のご自宅を表敬訪問しました。彼は、幼少時、神風特攻隊員との忘れえぬ温かい

私たちの乗った船は正午頃、カティクラン港近くの船着場に到着しました。ここで、神宮の遠藤風也権禰宣は、洋上で出来なかった神事をこの砂浜で改めて行う事としました。

砂浜は35度Cを超える猛暑の中でしたが、みなさん大変お元気で、祭壇の前に整列し、改めて慰霊祭の神事が滞りなく執り行われました。

その後カリボ空港へ向かい、午後9時30分にマニラのホテルに到着しました。



翌27日は3班に分かれての行動となりました。

それは、当初バグサンハンの「比島寺」にある「戦艦武蔵」の慰霊碑に行く予定であった「顕彰会」の20名の方々が現在の「比島寺」の現状(韓国施設の駐車場になっている)を知り、急遽予定をコレドール島観光に切り替えた為、

翌、4月29日は「昭和の日」でした。

私たち委員会の主要メンバー3名は、水交会からお借りした「戦艦武蔵の軍艦旗」をお返しする前に、この軍艦旗に依拠した武蔵神社の御堂を永川神社にお送りする事にし、永川神社の行事が空いた午後にも本殿に参内し、合わせて「無事帰国」の報告をさせて頂きました。



思えば、去る3月3日、米国人富豪による「戦艦武蔵発見」の報がインターネットで配信されてから約1カ月半の準備期間で、現地での洋上慰霊祭がこのように成功裏に実施できたことは、関係者の皆様のご努力はもちろんですが、一重に皆様方の強力なご支援の賜物であり、ここに改めて、篤く御礼申し上げます。また、

皆様方の益々のご健康をお祈りして、報告とさせていただきます。

平成27年4月30日

戦艦武蔵プロジェクト洋上慰霊祭実行委員会  
委員長 石濱 哲信

触れ合いを通して特攻隊員の祖国愛と慈愛溢れる人間性に感動し、成長した後彼らの肖像画を描き、また「フィリピン少年が見たカミカゼ」という著書を発行する等、生涯彼らの顕彰に努めることを決意されました。そして最初の神風攻撃隊が飛び立った西飛行場跡に私財で顕彰碑を建立されたのです。

ディソンさん(以後、親しみを込めて「ディソンさん」と表記します。)は、ご高齢で体調を崩しておられましたが、自らのアトリエで椅子に腰を下ろしたまま、温かく迎えて下さいました。



ここには、ディソンさんが描いた多くの肖像画が飾っており、その生き生きとした肖像画に深く感動しました。

また、驚いた事に、多くの遺品の中に、白田さんのご尊父(伍井隊長)について書かれた日本の本もありました。目ざとくこの本を発見した白田さんは、そのご尊父に抱かれた自らの写真を見出し、ディソンさんに示すと、彼は驚きと深い感慨に浸っておられるようでした。

堀田氏が何かリクエストがございましたかと彼に尋ねましたが、特にご希望がなかったため「軍艦マーチ」を演奏しました。すると彼は流ちょうな日本語で一緒に歌いだし、私達を驚かせ、また、感動させたのでした。続けて3曲ほど当時唄われたと思われる軍歌を演奏した後、ディソンさんの体調を慮って別れを告げ、この日の慰霊行事を終えました。

翌日、この数日間の充実した日々を思い出し、改めて慰霊の重要性を覚えつつ、全員元気で帰国の途に就きました。

# 第44回萬世特攻碑慰靈祭 に参列して

事務局 金子 敬志

平成27年4月26日(日)、鹿児島県南さつま市加世田の特攻慰靈碑「よろずよに」の前において、萬世特攻慰靈碑奉賛会主催により執り行われた表記の慰靈祭に、当顕彰会を代表して参列しましたので、以下のとおり、その概要と所見を報告いたします。

## 一 概要

例年この慰靈祭は、4月の第2日曜日に執り行われてきたが、今年は、第2日曜日が統一地方選挙前半の投票日に当たったため、4月の第4日曜日に執行されることとなったものである。参列者は、例年とほぼ同様約300人とのことであった。

慰靈祭は、万世特攻平和祈念館前にある特攻慰靈碑「よろずよに」の前



萬世特攻慰靈碑「よろずよに」

において、定刻10時40分から執り行われたが、慰靈祭に先立ち、戦後70年の記念行事として女優のたぬき(田上美佐子)さんによる、ひとり芝居「翼」が演じられた。

慰靈祭の式次第は、次のとおりである。

- |    |            |              |    |
|----|------------|--------------|----|
| 1  | 開式のことば     | 奉賛会副会長       |    |
| 2  | 国旗掲揚       | 旧隊員・陸上自衛隊音楽隊 |    |
| 3  | 黙とう        |              |    |
| 4  | 追悼のことば     | 奉賛会会長        |    |
| 5  | 慰靈のことば     | 遺族代表・旧隊員     |    |
| 6  | 祭電披露       |              | 代表 |
| 7  | 献詠         | 錦城会加世田道場     |    |
| 8  | 献花         | 参列者全員        |    |
| 9  | 献奏         | 陸上自衛隊音楽隊     |    |
| 10 | 感謝状贈呈      |              |    |
| 11 | 南さつま市長あいさつ |              |    |
| 12 | 若者の誓い      | 学生代表         |    |
| 13 | 合唱         | 陸上自衛隊音楽隊     |    |
| 14 | 国旗降納       | 旧隊員・陸上自衛隊音楽隊 |    |
| 15 | 閉式のことば     | 奉賛会副会長       |    |
- 慰靈飛行の飛行機は、珍しい水上着水用フロート装備のロビンソン・ヘリコプターであったが、会場上空通過後、会場前を流れる小川の対岸に着陸した



営門跡と灯籠 (万世平和祈念館入口道路)



献花

のにはいささか驚いた。

例年、慰靈飛行は、海上自衛隊鹿屋航空基地所属のP-3C哨戒機が実施していたが、今年は、鹿屋基地の一大イベントである「エアームモリアルinかはや」と同日になったため、派遣ができなかったとのことである。

御遺族紹介では、複数人で参加された方が多く見受けられたのが印象的であった。旧隊員は、20数名の方が参列されていた。慰靈のことばは、遺族代表として、第73振武隊隊員加覧幸男伍長(戦死後少尉、少飛15期、鹿児島出身)の御遺族が、旧隊員代表として飛行第66戦隊に所属された上野辰熊様がそれぞれ述べられた。

慰靈祭は、式次第に従って肅々と進められ、学生代表による若者の誓いの後、最後は参列者全員で「加藤隼戦闘隊」の歌を力強く斉唱し、12時15分、滞りなく終了した。

## 二 所見

特攻基地万世飛行場が存在したということは、当顕彰会入会以前から知っていたが、入会后、苗村七郎氏の著書を読んでその概要を知ることがになり、是非訪ねてみたいと思っていた。

御遺族の中には、「子犬を抱く少年飛行兵」の写真で有名な荒木幸雄伍長や故苗村七郎氏の学友・込茶章少尉の

御遺族も参列しておられた。荒木伍長や込茶少尉の名前は、苗村氏の著書で知っていたので、参列者名簿を目にした時、何となく親しみを感じた。

知覧の慰靈祭に比べて規模は小さいが、当地の特攻慰靈碑奉賛会や当慰靈祭参列者の、特攻隊に対する慰靈顕彰のお気持ちは勝るとも決して劣らないものであり、当慰靈祭は今後も永く継続されるものと感じた。

参考として「万世飛行場」「よろずよに」「苗村七郎氏の著書」について若干記しておくことにする。

1 万世飛行場

万世飛行場が使用されたのは、昭和20年3月から7月（特攻出撃は6月下旬まで）の短期間であり、特攻基地でもあったため、秘密保持が厳しかったためか、実態に不明な点が多い。

場所は、薩摩半島西岸に位置する吹上浜の南端にあり、目の前は東シナ海である。

吹上浜は、鳥取砂丘、遠州灘砂丘と並んで日本三大砂丘の一つとされており、長さは南北47kmに及ぶ長大なものである。

当初は、陸軍飛行学校の飛行場を誘致しようとして陸軍に要望したものであるが、戦局の推移により特攻基地として使用されたもので、誘致運動には

小泉純一郎元総理大臣の父親小泉純也氏も関わっていた。

戦後は農地として開墾され、また、吹上浜海浜公園として整備される際、飛行場の施設等は取り壊されたためか、現在、ここに飛行場があったことを知るのには困難である。また、滑走路もコンクリート舗装ではなく、当時の多くの飛行場と同じく露地であったようで、その痕跡が残っていない。僅かに、飛行場跡地に建設された万世平和祈念館への入口道路にある宮門跡に当時の面影を偲ぶことができる。

滑走路が強固なものでなかったため、使用された航空機は、脚の強度が高い固定脚機が殆どで、主に99式襲撃機が使用された。

2 「よろずよに」万世陸軍特攻振武隊・飛行戦隊戦没者慰靈碑

苗村七郎氏は戦後、戦友の冥福を祈り、小さな碑でも建てたいと思っていたが、昭和35年加世田を訪れた時、特攻隊員が起居した旅館の夫婦から「お国のために尽忠の誠を捧げて戦死された特攻隊の方々への慰靈碑を、何とかして建てたいものだ」というお話を聞いて一念発起された。

慰靈碑建立の過程で、万世から出撃して戦死された多くの方々を知覧から出撃したと記録され、また合祀されて

いることを知って驚いたそうである。

苗村氏は、「特攻隊員は、陸上の戦闘とは違い、戦死した場所の確認が不可能に近い。最後に飛び立った所、最後に爆装した飛行場が、本当の意味で戦死した場所になる。」という思いを持っておられた。しかるに、万世には何も残されていないため、御遺族も知覧から出撃したものと思い込んでお参りされている。

このような思いもあつて慰靈碑建立に尽力され、思い立ってから12年後の昭和47年5月29日に、除幕式に合わせ第1回目の慰靈祭が行われた。

慰靈碑の後方の副碑には、当初、特攻振武隊109名、第66戦隊43名、所属不明1名のお名前と戦死年月日が刻まれていたが、その後の調査により、現在201名のお名前が刻まれている。

3 苗村七郎氏の著書

① 『よろずよに』（1947年・自費出版）

② 『万世特攻隊員の遺書』（1949年・現代評論社）

③ 『陸軍最後の特攻基地 万世特攻隊員の遺書・遺影』（1993年・東方出版）

④ 『至純の心を後世に 陸軍最後の特攻基地・万世』（2011年・ザメディアジョン）

「捨て足軽」

副理事長 藤田 幸生

先日、同期生の荻野正憲氏から興味深いメールをもらった。それは彼が、磯田道史著『天災から日本史を読みなおす・先人に学ぶ防災』（中公新書）を読んだ所見に関するものであった。幕末に長崎警備を担当していた佐賀藩と福岡藩が、西欧列強の侵攻が懸念されるようになり、戦力の大差に愕然とした結果、「捨て足軽」という名の「神風攻撃部隊」を編成していた、というものである。

荻野氏は、これを読んで、次のように述べておられる。

「捨て身攻撃の『特攻作戦』は、先の大戦で突然出現したのではない。「日本民族の三つ子の魂」の中に刷り込まれた本領の発露に違いない、と気付かされた。そして同時に、今の若者はグータラのように見えるけれども、将来万一、「いざ鎌倉」が起きたならば、日本人の本性が呼び起こされて、『護国の鬼』になってくれると期待してもよさそうだ、と感じた。

この本は、朝日新聞に連載されていた磯田氏のコラム記事をまとめたもので、知っている人は以前から知っている

たようだ。

かねてより、今の日本人は、日教組の『反戦平和教育』や、マスコミの影響を受けて、『将来、有事になり切羽詰まったら日本人は再び特攻をやるだろうか?』と疑問に思っていた。組織的作戦として実行された先の大戦の特攻を、『無理やり強制してやらせた、やらされた』と教えられ、知らされていたからであった。

しかし、そんな中で、鍋島藩や黒田藩の『捨て足軽』の組織的編成の話を読んだので、『捨て身攻撃は、時代を超えて冷静な軍事作戦として、我が国には存在した』ということを確認できたのだ。パニックになって咄嗟にやったり、強いられてやらされたりしたものではないということである。

江戸時代は、人々の『人の道』という意識も強く、とても自殺攻撃部隊など、上意や強制だけで編成できるような社会ではなかったと思う。他方、岡山池田藩の関わった神戸事件では、下級武士の滝善三郎が、全責任を一身に背負うことを自ら願ひ出て切腹している。このような例は、混乱期の当時、全国各藩において、枚挙に暇がない。

私は、『日本人は、公のために犠牲になる精神を個人として心中に宿している』と信じていたが、『その熱意が

軍事組織の編成に至る』とまでは、考へが及んでいなかった。そんな中で、『捨て足軽部隊80名』を読んだので、やはりそうか、と膝を打って納得した次第である。」

### 平成27年4月7日徳之島「戦艦大和を旗艦とする第二艦隊戦没将士慰霊祭」における「あいさつ」

副理事長 藤田 幸生

本日ここに、徳之島犬田布岬における慰霊祭の日を迎えました。

今年、戦後70年目であり、平和の内にこの慰霊祭が執り行われますことは、御英霊の皆様の御加護の賜物であると感謝申し上げます。

皆様方は、我が国、我が民族の危急存亡の時に際し、戦艦「大和」を旗艦とする艦隊を組み、沖繩に向けて出撃され、散華されました。

私達は、戦後の廢墟の中から、困難な時代を経て今日まで、国の再興、発展のために努力して参りました。そして、二度と戦争はすまいとの決意のもと、平和国家として歩んでまいりました。

その結果、日本では、戦争のない70年が続き、物質的、経済的にも、日本史上に例のない程の繁栄期を迎えるこ

とができたのであります。

しかしながら、今も、世界では、秩序が大きく揺らいできております。テロ集団や核の拡散、海賊の問題など、混乱の度を加え、諸問題に対する明確な解決の手段をも、見出し得ていないのが実情であります。

我が国周辺、目の前に広がる東シナ海においても、例外ではありません。大陸の軍備拡充、半島の核やミサイルの保有、領土問題等、日本は、困難な環境下に置かれているのが現実であります。

過去、未曾有の困難を幾度となく経験してきたにも関わらず、今も人の世は、国の内外を問わず、極めて混乱した事態に陥っているように思えてなりません。

このような世界情勢の中で、我が国が、70年もの間、戦のない時を過ごし得たことは、まるで奇跡のようなもので、決してたやすいことではありません。山の上に例えるならば、そこに至る道は沢山あるように、国民が多様な立場から、それぞれに道を選び、競うように努力をしてきました。その結果であります。幸運に恵まれた一面もあります。

しかし、その最も大きな理由は、何

かと考えてみました。海上自衛隊に奉職してきた私から観えてくることは、皆様方の存在があったからだということです。世界の海軍は、海上自衛隊を通して、日本という国を、畏敬の念を持って見ておられます。その理由は、皆様方の先の戦での戦い振りにあると申しておりました。正に、昔、弁慶が仁王立ちで義経を守ったように、70年後の今でも、日本を守り続けているという事です。今ここで、このことを申し上げ、感謝の言葉を捧げたいと思います。

皆様、どうも有り難うございます。心から感謝申し上げます。これからも、私達を、どうかお見守り下さい。私達も、平和と平穏を守るために努力することを誓い申し上げます。

どうか安らかにお眠り下さい。

平成27年4月7日

公益財団法人 水交会会長

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊

顕彰会副理事長

藤田 幸生



## 第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

理事 水町 博勝

平成27年5月3日(日)、知覧特攻慰霊顕彰会(会長・南九州市市長霜出勘平氏)主催の「第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭」が、知覧特攻平和観音堂前において執り行われ、当顕彰会を代表して、河島慶明会員と共に参列しましたので、その概要、所見等を報告します。

### 一 慰霊祭の概要

前日までの好天が、当日は雨天となり、時折風雨の強まる中、慰霊飛行(有視界飛行)は無理と思われたが、式典開始1時間前に、海上自衛隊鹿屋基地からP3C1機が4回にわたり航過した。

式場の大天幕下には、約千人分の椅子席が設けられていたが、既に溢れんばかりの参列者が集まっていた。

式典は、知覧名産の献茶式から始まり、参列者全員の拝礼・黙祷、僧侶による読経、会長・多数の御遺族・鳥濱トメさんの御遺族・各界関係者代表による焼香、会長の追悼のことは、市議

会議長、地元県議、特攻隊員御遺族・少飛会・特操会・借行会の各代表による慰霊のことはと続いた。

会長の霜出勘平南九州市市長は、追悼のことはの中で、「戦後70年の節目の年を迎え、1038柱の御霊に対し、哀悼の誠を捧げるとともに、戦争を知らない国民に、知覧特攻平和会館を通して、史実を正しく伝えることが、市の務めであり、御霊の御遺志に込めることである」と述べられた。

御遺族を代表して、第54振武特攻隊中西伸一少尉(戦死後大尉、特操1期、昭和20年5月28日知覧から出撃、沖縄周辺洋上において戦死)の御遺族で和歌山県日高町から来られた弟の小松氏は、「兄は明野で飛行訓練の後、明野から知覧に向かう途中、和歌山の実家や出身小学校の上空を低空で旋回し、翼を振って南へ向かって行った。親に宛てた一句(後の献詠でも詠じられた)と母校の後輩に宛てた二句の辞世の歌を遺して行った。その後母は気丈に振る舞っていたが、兄の三十三回忌墓前で母は、伸一、伸一と叫び、泣き崩れていた。その時母は77歳であった」と、秘めていた親の想いを述べられたが、遺族にしか語れない想いを打たれた。

戦友からは、一期一会の飛行訓練から歩んだ道を語られ、大空の白虎隊となつて日本の危急に臨んだ仲間の戦死を悼み、戦後は友の分もと努力し、日本の平和と繁栄をもたらした、と語られ、また、今日日本が抱える諸問題に対し将来を憂える言葉も述べられた。

献詠では、第108振武隊渡邊次雄少尉の「空征かば 雲染む屍と 我は今 敵艦目がけて ひた進みゆく」、第54振武隊中西伸一大尉の「捨てる身と思えばかるき わが胸も つとめは重し 己が征く道」、第44振武隊甲斐玉樹大尉の「錦きて 帰るこの身は 散るさくら 今日見る父母の 心嬉しき」の各辞世の句が詠じられた。

次いで、慰霊電報の披露、参列者全員による献花、第12普通科連隊(国分駐屯地)音楽隊による「海行かば」の献奏があり、南九州市市長が挨拶の中で、「特攻隊の史実、特攻隊員の遺した辞世の詩歌を世界文化遺産として、2017年に登録を申請する」との決意を述べられた。

続いて、参列者全員による「加藤隼戦闘隊」、「同期の桜」の斉唱、拝礼があり、雨天の中、2時間にわたる厳粛にして、関係者の心の籠もった慰霊祭は滞りなく終わった。

なお、御遺族の白田理事を始め、当顕彰会の有志の方も参列されていた。

また、終戦70年の節目の年でもあつて、テレビ、新聞等マスコミの取材関係者も、地元や関西方面から従前の約倍程詰め掛け、式典後も戦友の方等から取材が続けられていた。

### 二 知覧特攻平和観音堂

前日に知覧を訪れ、鹿児島県は初めてという河島会員と共に、最初に慰霊祭の式場ともなる特攻平和観音堂にお参りをした。

世田谷山観音寺での特攻平和観音遷座供養は、昭和28年7月に執り行われ、同寺での特攻平和観音年次法要は今年第64回目を迎える。

陸軍の関係者は、遅れて出来上がった特攻平和観音像の陸軍用一体は、沖縄特攻作戦の陸軍主要基地であった知覧飛行場跡にお祀りするのが望ましいと、元第六航空軍司令官菅原道大中将が鳥濱トメさんに地元の意向を打診されたのであるう、トメさんが世田谷山観音寺に來られて奉賛会の意向を確認し、知覧に戻つて町役場以下関係方面に根回しをして、町を挙げて観音像を引き受けることになり、この陸軍の観音像は、世田谷山観音寺で開眼供養が執り行われた後、知覧町において昭和30年9月28日、初めて慰霊法要が営まれた。今年はその61回目に当たり、歴

史の重みを感じられる。戦時中、特攻隊員の母親代わりとなって面倒を見て出撃を見送り、戦後は、特攻隊員の慰霊に努められた鳥濱トメさんと南九州市知覧町の関係者、そして戦後の世田谷山観音寺との強い絆を、観音像の前で改めて感じ取ることができた。

知覧特攻平和観音堂、知覧特攻平和会館へ続く道の両脇の石灯籠は、昭和62年から寄進が始まり、既に1290基にもなり、今も続いているそうである。バスを降りた入口には、全国少飛会が寄贈した庭園、道を挟んで石造りの夢違い観音像が祀られている。2年前に訪れた時より周辺の歩道はバリアフリー化が進んで良く整備され、色々と改善されている。

### 三 知覧特攻平和会館

入場券の表に特攻平和観音像が、裏面に特攻銅像「とこしえに」と、その意味と説明が印刷されている。

館内には特攻隊の史実を正しく伝えるため、その当時の装備・隊員・基地や知覧町の様子を克明に表した、膨大な展示資料を見ることが出来る。

今年4月7日の新聞の「特攻隊員の遺書収集」板津忠正氏90歳逝去の記事に「1945年5月特攻隊員として沖縄戦に出撃したが、エンジントラブル

で鹿児島県・徳之島に不時着し、生き残った。戦後、特攻隊員の遺族を訪ね歩き、遺影や遺書を集め、1986年から88年まで、特攻隊員の遺品や関係資料を展示する知覧特攻平和会館の初代館長を務めた」とあった。

板津氏は名古屋出身、昭和18年、民間パイロット養成の米子養成所から大213振武隊で出撃、その後2回の出撃も雨で中止、終戦を迎えた。名古屋市役所に務める傍ら、仲間の遺族を訪ね、昭和49年に復員局の特攻戦没者芳名簿を入手し、本格的に慰霊・資料収集に努め、前身の知覧特攻遺品館の事務局長、昭和61年特攻平和会館新設とともに館長を務められた。平成7年、陸軍特攻戦没者1036名（知覧からは439名のほか、万世、都城、熊本、鹿屋、大刀洗、台湾を含む）全員の遺影を集めた。

知覧では、板津さんという一人の元特攻隊員が特攻の史実を後世に伝え残したい思いで、遺品等の収集に当たったが、同じく万世では、大阪の元特攻隊員苗村七郎氏が遺品等の収集に当たり、莫大な私費を投じて万世特攻平和祈念館を建設した。いずれも地元市町村と一体となって資料館の建設・管理に当たったことは、訪れた誰もが知る

ことができる。

特攻隊員個人の遺影、振武隊ごとの集合写真、遺書等は良く整理されており、名前のタッチパネルで検索もし易い。

特攻機の四式戦「疾風」は、知覧では30機が特攻機の直掩・誘導・邀撃に当たり、特攻は都城から出撃したが、展示の本機はフィリピンで米軍が接収した実物である。三式戦「飛燕」は、知覧から50機が出撃したが、展示の本機は日本航空協会唯一の実物である。一式戦「隼」は、海軍の零戦に次ぐ生産量を誇った陸軍の主力戦闘機であるが、展示の本機は、映画「俺は、君のためにこそ死ににいく」のため実寸で製作されたものである。これらは当地でしか見ることができない貴重なものである。「飛燕」の前で語り部の松元氏の講話は理解しやすく、熱意を持った話に聴取者から感謝の拍手が送られていた。

特攻平和会館への修学旅行は、年間500校以上あり、生徒は初め物見遊山で入ってくるが、出る時には「先生、もっと時間が欲しい」「もう一度また来ます」と、真剣になるとか。生徒が折った千羽鶴が館内に飾ってあった。十死零生の戦いに立ち向かった隊員、国破れ、平和の尊さ、それらは誰も教

えてくれなくとも、展示資料がその事実を物語ってくれる、正に証拠に基づいた史実の教育現場であり、慰霊の思いを深くさせる。

一方、海軍では、戦後占領下での旧軍人の活動が制限される中、寺岡謹平元海軍中将（終戦時第三航空艦隊司令長官）の友人、近江一郎氏（貿易商）が、特攻部隊の先任参謀であった猪口力平元大佐の資料を基に、特攻隊員遺族を訪問して回り、資料を収集した。その資料は現在、江田島の海上自衛隊資料室に保管されている、という報道番組を思い出した。

館内には、海から引き上げた零戦の展示室もあったが、沖縄戦では、第五航空艦隊司令長官の下で、唯一の陸海軍共同作戦であった特攻作戦、海軍で集められた遺書等も当館のように、一般の目に触れることができれば、より一層、御霊安らかにと、祈ることができようと思った。

以上、慰霊祭のみならず、平和会館を訪ねることによって、より深く、広く特攻作戦の史実を学ぶことができた機会を与えられたことに感謝する。



知覧特攻平和観音堂



道路両側の奉納燈籠



慰霊祭会場



会場入口の庭園



特攻平和会館内展示の一式戦「隼」



夢たがい観音像



庭園前の少飛の碑



知覧特攻平和会館入場券



会場入口に建つ特攻銅像「とこしえに」

## 第49回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して

事務局 金子 敬志

平成27年5月10日(日)、長崎県東彼杵郡川棚町の「特攻殉国の碑」前において、川棚町新谷郷主催により執り行われた表記の慰霊祭に、当頭彰会を代表して参列しましたので、以下のとおり、その概要と所見を報告いたします。

### 一 概要

この慰霊祭は、毎年5月の第2日曜日14時からとされており、今年も5月の第2日曜日の10日に執り行われた。

参列者は、例年とほぼ同じく、約300名とのことであった。

慰霊祭は、小串湾の奥まった海岸に面した所にある川棚町新谷郷の「特攻殉国の碑」の前で執り行われた。

当日の天候は快晴、暑く感じる程の陽気であった。

式場に着いてまず感じたのは、地元の方々のご協力であった。畏まった服装ではなく、普段着に近い服装で、受付や駐車場の整理等に汗を流しておられた。この慰霊祭は、一度存続の危機に見舞われたと伺った。経緯について

は、会報「特攻」96号に詳しく掲記されているが、地元新谷郷の方々のご意志とご努力によって継続されることになったとのことであるが、その思いを深く感じた次第である。

式次第は次のとおりである。

- ① 開式の辞
- ② 軍艦旗に敬礼
- ③ 国歌斉唱
- ④ 黙祷
- ⑤ 慰霊の辞
- ⑥ 慰霊電報・書翰奉呈
- ⑦ 拝礼
- ⑧ 同期の桜合唱
- ⑨ 閉式の辞とお礼
- ⑩ 事務局連絡

慰霊祭には近傍自衛隊からの参列があったが、日本海軍の後裔であり、また、碑建立時の関係から、旧海軍佐世保鎮守府司令長官に相当する海上自衛隊佐世保地方総監の池田海将、及び旧霞ヶ浦海軍航空隊に相当する西日本の教育航空隊であった旧海軍大村航空隊跡に展開する海上自衛隊第22航空群司令の西海将補参列が目立った。

式典はまず、地区を代表して新谷郷総代の廣川英雄様が開式の辞を述べられ、その後、式次第に従って進行したが、拝礼では、地元の方々が多数献花されたのを見て、地元と密着した慰霊祭であることを実感した。

「同期の桜」を斉唱した後、廣川総代が閉会の辞とお礼を述べられたが、その中で「来年は50回目の節目の年となるので、その記念行事的な慰霊祭に

したいと考えている」と述べられた。最後の事務局連絡は、碑の建立以来その保存管理、慰霊祭の執行等一切を取り仕切ってこられ、平成24年に逝去された西村金蔵様のご子息西村慎吾様が行われた。その中に、現存する震洋艇の实物は、オーストラリア・キャンベル市の戦争博物館にあるものが唯一のもので、現状を知るため、昨平成26年に、オーストラリア駐在武官の中村1等海佐に写真を送ってもらい、資料館に展示しているとの説明があった。

### 二 所見

冒頭にも記したように、村祭りを地元の人が行うように、地元の人々が仕事を分担して慰霊祭を執り行っているのが印象的であった。会報「特攻」96号にも記載されているとおり、地元に密着した慰霊祭で、末永く継承されていくものと考えられる。

参考として、写真集『人間兵器・震洋特別攻撃隊』から抜粋した「川棚魚雷艇訓練所」と「特攻殉国の碑」について、以下に記載する。

#### 1 川棚魚雷艇訓練所

当初は「川棚臨時魚雷艇訓練所」として、横須賀に在った海軍水雷学校における魚雷艇訓練を担当する分校として開隊されたが、後に魚雷艇だけでな

く、震洋、回天、伏龍などの特攻兵器の訓練所に当てられるようになり、川棚警備隊となった。

開所は昭和19年5月で、初めは魚雷艇の訓練だけで、数百人規模であったが、震洋、回天、伏龍の訓練を行うようになり、一時は、1万人を超える規模になった。

開設が決まって土地買収を開始した当初、買収予定地には墓地が沢山あり、この地方は当時すべて土葬であったため、移転に難色を示し、反対する人が多かったそうである。

そのような時に、自ら率先して先祖の墓を掘り返して範を示し、移転反対の人達の説得に当たったのが、地元の有力者で大地主でもあった八木原氏であった。当時の海軍現地責任者は、基地建設がすんなりと予定以上に早く完成したのは、八木原氏の尽力によるものでありと述懐している。

基地開設当時、最寄りの駅は川棚駅であったが、約4kmの峠越えの山道であったので、基地内に駅を作ろうとしたが、門司鉄道管理局に要望したが、予算がないとのこと断られた。そこで、駅を作れば列車を止める」という言葉を以て、自力で駅を建設することになったのだが、この際にも地元の人々が協力したそうである。



式次第



特攻殉国の碑と祭壇

「小串郷駅」と命名された。現在の小串郷駅は、昭和23年に移設されたもの

で、旧小串郷駅は、現在の駅から約400m佐世保寄りにあった。

このような事情から、地元と基地との結び付きが強くなり、それが現在まで続いているのではないかと考える。

## 2 特攻殉国の碑

昭和41年8月、東京在住の益田義雄氏（第103震洋隊長）の発議があり、1ヵ月後の同年9月、碑建立委員会が発足した。

先に記した西村金造氏と当時の海上自衛隊佐世保警備隊司令の相田英雄氏（第6震洋隊長・海兵66期）が建立予定地の折衝、土地の買収に奔走し、郷有地194坪、私有地104坪、計298坪を取得した。



来賓席

資金としての募金は、昭和42年4月未までにほぼ目標を達成した。

礎石は、長崎県特産の銘石蛇紋岩を選び、更に、震洋特別攻撃が行われたフィリピン・コレヒドール島と沖縄の石が碑の上部に撒かれている。

碑には、当初2950名の戦死者のお名前が刻まれていたが、昭和44年5月、建立後に判明した戦死者が454名に及んだので副碑を建てたが、その後も判明者が増えて刻名する場所が不足するようになったため、関係者で協議した結果、碑の増改築計画が策定され、昭和60年4月、旧碑の上部を解体して同年5月、増改築建立碑が竣工し、5月19日に除幕式並びに慰霊大祭が執



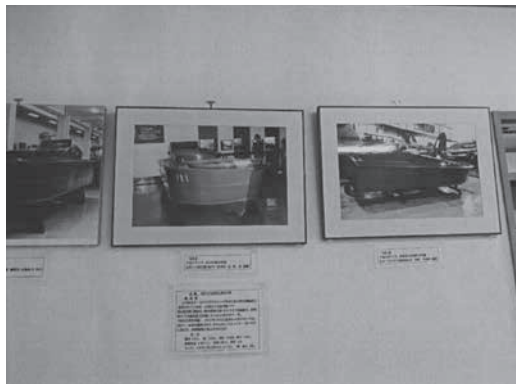
拝礼（献花）

り行われた。その時の刻名者数は3450名であった。

その後の増刻により、平成元年5月14日現在、刻名者数3498名、内訳は、震洋隊2505名、魚雷艇隊785名、その他の突撃隊183名、回天隊20名、その他の水中特攻4名と なっている。



「川棚魚雷艇訓練所跡」の碑



現存する唯一の震洋艇の写真（資料館展示）

### 千葉縣護國神社

## 平成27年度「千葉県特攻勇士之像慰靈祭」に参列して

事務局 金子 敬志

平成27年5月26日(火) 11時より、千葉縣護國神社において、「千葉県特攻勇士之像慰靈祭」が肅行された。

本慰靈祭は「千葉県特攻勇士之像」が建立奉納された平成23年5月26日に合わせて毎年5月26日に、千葉縣護國神社境内の「千葉県特攻勇士之像」前で執り行われているものである。

当日は、千葉県隊友会、千葉県偕行会、千葉県東葛偕行会等からの出席者と当顕彰会からの小倉理事以下3名を合わせて計12名が参列した。

暑さを感じるような好天の下、慰靈祭は、式次第に従って厳かに整斉と進行し、滞りなく終了した。



式次第は次のとおりである。

- ① 修祓
- ② 降神之儀
- ③ 献饌
- ④ 祝詞奏上
- ⑤ 玉串奉奠
- ⑥ 撤饌
- ⑦ 昇神之儀

#### 【慰靈祭参列について】

本慰靈祭は、前記のとおり、毎年同じ日の5月26日に肅行されますが、千葉縣護國神社が主催するものであり、参列者がなくとも肅行すること、特に案内状は差し出されません。どなたでも参列できますので、是非大勢の方々に御参列いただきたいと思っております。

慰靈祭は、護國神社境内の「千葉県特攻勇士之像」前で執り行われます。場所は、正面階段を上がつてすぐの右手になります。

千葉縣護國神社へはJR千葉駅、又

は京成千葉駅から徒歩10〜13分、千葉市中央公園の北隣にあります。また、車利用の場合は、駐車場があります。  
(千葉縣護國神社)  
電話 043-251-0486

#### 【慰靈祭における祝詞文】

千葉縣護國神社の宮澤宮司様から、当日の慰靈祭における祝詞文を拝受しましたので、次に御紹介いたします。

「此の千葉県特攻勇士之像の御前を巖の磐境と祓清め 神籬仕奉り 暫か間招奉り坐奉る 掛けまくも畏き 千葉縣護國神社に合祀られ給う 神靈の中に 特別攻撃隊として 身退り坐し、神靈等の 御前に恐み恐みも 白さく あはれ 汝命等 はや桜の蕾も正に紅顔可憐の身を以て 皇国の守國民

の将来又世界の人々の榮行かむ世を造り成さんとす 天皇命の天命の髓に最も尊き御心を以て数多くの志願者より 特攻隊員として選ばれ出征ち 海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍と万に一つも生きて還らむ望みは無き事なるを 汝命等

は御国の為 四方の國々の幸福の為 聊かの躊躇も無く自ら進みて 夫々の戰場に参加はり給ひ 敵の軍艦と或は飛行機と刺し違へ 敷島の大和桜の花と散り給ひぬ 嗚呼其の心の猛く尊き極にこそ 嗚呼其の行動の雄々しき限りにこそ 正に生き乍ら神に坐すとこそ称え申さめ 斯く気高き御精神と大き御功績は 靖國の宮居に 又千葉縣護國神社に永久に神鎮り坐して 御國の護り 人々の幸福 世界平和守神として 人々に仰ぎ尊ばれぬ 今日もしも東葛偕行会相談役中江仁を始めて関係する人々が今し御前に集ひ 礼代の幣帛献奉り 神靈を慰め奉り 和み奉らくを 愛ぐしと見備はし給ひて 天皇命の大御代を 手長の御代の巖御代と成幸へ給ひ 汝命等の親族家族は白すも 更なり参来集へる人々の身健かに 負持つ職業に勤み励みて 家門高く広く 子孫の八十続き 五十檀八桑枝の如く 立榮えしめ給ひ 夜の守日の守に 守護の恵み幸へ給へと恐み恐みも白す」

山口縣護國神社

「特攻勇士之像」奉納除幕式  
(15休日)に参列して

専務理事 衣笠 陽雄

一 奉納除幕式の状況

平成27年4月29日(水・昭和の日)山口縣護國神社において、当顕彰会が奉納した「特攻勇士之像」の奉納除幕式が斎行され、当顕彰会の代表として私と倉形桃代評議員が参列したので、以下のとおり報告します。

山口縣護國神社では当日、山口県全戦没者大慰靈祭、防長英靈塔春季慰靈祭が斎行され、1300席の椅子が準備されていたが、朝から多くの御遺族方で埋め尽くされるという盛況であった。「特攻勇士之像」は、正面の鳥居をくぐり、右手の陸海空自衛隊合祀碑・殉職自衛官奉斎記念「至誠」碑と満蒙開拓青少年義勇軍「拓魂」碑の間、国旗掲揚塔近くに建立されていた。

除幕式は、山口県全戦没者大慰靈祭に先立って執り行われた。山口縣護國神社小方基次宮司と除幕式についての細部調整を行った後、斎殿から正装した祭主・神官7名と共に参列者が列を組んで除幕式場に前進した。除幕式は、修祓の後、私と倉形評議員、地元の小

学校2年生の森本君と高校2年生の吉村さんの4名で引き綱を引いて除幕した。白布が取り除かれると見慣れた赤銅色の凛々しい特攻勇士之像が現れ、拍手が起こった。ゆっくり拝顔する間もなく、引き続き祭主による修祓、降神の儀、祭主祝詞奏上、祭主玉串拝礼、山口縣護國神社宮司玉串拝礼、参列者

の玉串拝礼と続いた。参列者では私と倉形評議員、森本君、吉村さんの綱を引いた4名を先頭に、山口県遺族連盟会長市来建之助様、同副会長山村信忠様、山口県借行会長土肥俊峰様、山口縣護國神社総代等の皆さんであった。

次いで、特攻顕彰会として挨拶を要望されたので、私が以下のような挨拶を申し上げた。「本日、山口縣護國神社では、山口県全戦没者大慰靈祭、防長英靈塔春季慰靈祭という大変ご多忙

な中にも拘わりませず、特攻顕彰会の特攻勇士之像建立除幕式を小方宮司様以下皆様へ斎行して頂きまして誠に有り難うございました。この特攻勇士之像の建立奉納事業は、特攻顕彰会の基

めております。我が特攻顕彰会は、国の危急に際し、20歳前後の若者たちが、十死零生という苛酷な特攻作戦に莞爾として出撃した、その特攻精神を末代にまで伝えなければならぬという決意で慰靈・顕彰活動を実施しておりますが、その活動の一つの形がこの特攻勇士之像の建立ということでありま

す。皆様におかれましては、お参りの機会あるごとに、特攻隊戦没者の慰靈・顕彰についてもよろしくお願い申し上げます。除幕式は、大慰靈祭直前という限られた時間ではあったが、小方宮司の周到な準備と整齊かつ厳肅な祭事進行により、誠に感銘深い式典であった。終

了時には、山口第17普通科連隊長、宮木山口地方協力本部長始め、多くの人たちが特攻勇士之像に参拝しておられ、関心の高さが感じられた。引き続き斎行された大慰靈祭の挨拶の中で、小方宮司は、「今年終戦70周年を迎えて、色々な行事をやっているが、先

ほど特攻顕彰会が建立奉納された特攻勇士之像の建立も終戦70周年記念事業の一つに加えたい」と発言された。予期せぬことであったが、これは当護國神社で特攻勇士之像が特別の存在となつたことを意味し、今後の特攻隊戦没者の慰靈・顕彰に大きく貢献するものと思

われ、また、特攻顕彰会の今後の像奉納事業にとつても励みとなり、有り難いことであった。小方宮司のご配慮に心より感謝申し上げる次第であります。

二 所見

○今回の奉納がスムーズに行えた背景には人脈がある。当山口縣護國神社の小方基次宮司は、靖國神社の小方孝次権宮司の兄上である。一方、特攻顕彰会は、特攻勇士之像の護國神社への奉納について、靖國神社の山口権宮司から大々的なご協力を頂いている関係もあり、今回の特攻勇士之像の奉納につ

いて同権宮司から特別のご配慮を頂いたのではないかと推察しており、靖國神社・山口縣護國神社・特攻顕彰会の三者の間関係が建立に大きく貢献したのではないかと考えている。

○前日に陸上自衛隊山口駐屯地の史料館「防長尚武館」を見学する機会があった。内部は綺麗に整頓され、特攻関係資料も良く整理されており、担当者への想いが伝わってきた。山口県は、伊藤博文から現安倍晋三総理まで、8名という最多の総理大臣を輩出した県であり、関連資料も多く展示されていた。それは明治維新の貢献度からという理由も尤もだが、当時の長州藩の人材育成の成果もあるのではないかと思う。特に現在マスコミで騒がれている吉田



特攻勇士之像奉納除幕式・神事



除幕の網を引く左から高校生吉村さん・衣笠専務理事・小学生森本君・倉形評議員



特攻勇士之像

松陰先生（この地域では先生を付けなければいけない）の松下村塾を代表とする人材育成、特に国を思う心、国に殉じた人達を思う心などを持つ日本精神についての教育を行った結果でもあると思う。今回の慰霊祭で、遺族方のために1300という椅子席を準備し、それを上回る参列者があつたほど、この地は以前から慰霊祭が盛んであるのも納得できる。

○また、今回の除幕式では、私と倉形評議員、それに地元の小学生の男児と女子高生生の4名が除幕の綱を引いたが、何故この場に小学生が？と小方宮司に尋ねると、この地方では神社など

の毎月の祭事に、各地区の持ち回りで子供を選定し、花を供える等神事のお手伝いをさせているそうである。当日はそれで、その子供さんたちが綱を引いたとのことであった。私は、この地方では「通常の事」なのかも知れないが、それこそ精神の伝承であり、効果的な実地教育ではないかと感心した。

○この二つの体験から私は教育というもの、その重要性を再認識するとともに、教育大国土山口県ということも知つたのであつた。我々も大慰霊祭に参列させて頂いたが、整斉と祭事が進行し、また、内容的にも高い志操が感じられ、「みたま慰めの舞」や献吟のレベルの

高さからも流石に松陰先生の遺徳が引き継がれている土地なのだ、と感動すると同時に、大変意義深い経験をさせて頂いたと思う。

### 山口縣護國神社 「特攻勇士之像」奉納除幕式に参列して

評議員 倉形 桃代

満開の桜が散り、新緑輝く爽やかな空の下、山口縣護國神社境内で斎行された「特攻勇士之像」奉納除幕式及び平成27年度山口県全戦没者大慰霊祭に、当顕彰会代表衣笠専務理事の随伴

として参列した。当顕彰会の主要な事業の一つである特攻勇士之像の奉納は、今回で15休日となる。

除幕式は4月29日午前9時から行われるため、前日移動で1泊2日の旅程となった。東京から陸路で約5時間、久しぶりの新幹線での移動であったが、本州の真ん中から最西端への旅路は、飛行機での短時間長距離移動に慣れた私にとって、とても長く感じた。車窓の変わりゆく景色を眺めることを楽しみ

にしていたが、曇り空の下、黄砂が飛んでいたこともあり、遠くの景色がぼんやりと霞んでいたことが残念だった。新山口駅から在来線に乗り換え、昼過ぎに上山口駅に到着した。沿線には色とりどりのツツジの花が咲き、長閑な景色に初夏の訪れを実感した。

その日の午後は、護國神社の近くにある陸上自衛隊山口駐屯地内の史料館「防長尚武館」を見学させていただいた。山口駐屯地には、主力部隊として、第13旅団の基幹部隊である第17普通科連隊（連隊長・山口真司1佐）が所在し、中国地方5県の守りを担っている。正門で出迎えてくださった北村善海広報室長が、史料館とその周辺施設の案内をしてくださった。

「防長尚武館」は、昭和4年、陸軍歩兵第42聯隊に毛利公から寄贈された総



檜造りの建物で、当時は「武徳館」（武道場）として使用されていた。昭和40年11月、旧軍の偉業を讃える目的で整備された史料館として開館した。館名は隊員から募集して命名されたそうである。

内部の展示は、吉田松陰先生（地元では必ず「先生」を付けてお呼びするそうである。）を始め郷土の偉人の紹介、郷土部隊である歩兵第42聯隊関係の史料、皇族以外では唯一、親子で元帥になった寺内正毅・寿一の両大将

の元帥刀を始め数々の遺品や旧軍関係の史料、そして駐屯地所在部隊の活躍や、地域との交流の様子を紹介するコーナーがある。展示物は、手入れが行き届き、整然と展示されていた。特に、二振り揃った寺内正毅・寿一親子の元帥刀は見事であった。

山口県出身特攻隊戦没者は、当顕彰会のデータによると、陸軍53柱、海軍106柱である。史料館の展示室に、昭和19年12月7日レイテ島オルモック湾で特攻戦死された陸軍特別攻撃隊八絃隊第八勲皇隊隊員・片野茂伍長（戦死後少尉・少飛13期・山口県出身）の御遺品が展示されていた。この勲皇隊の隊長は、当顕彰会の前会長・故山本卓真氏の兄上・山本卓美中尉（戦死後少佐・陸士56期）である。一緒に展示されていた感状に、「南方軍総司令官寺

内寿一」とあったことにも、不思議なご縁を感じた。翌日の慰霊祭には、片野伍長の御遺族も参列されるそうである。史料館にも来館されることであつた。史料館のあるエリアには、幾つかの記念碑があつた。中でも「歩兵第四十二聯隊之碑」の副碑に刻まれた次の言葉が印象的であつた。

「つわものよ友よ この歴史 かの青春を 過去とは言うまい ここにこめられた 一つの未来」

4月29日10時30分から斎行される慰霊祭に先立って10時より「特攻勇士之像」の除幕式が執り行われた。前日に打合せに行った時、広い境内に幾つもの大きなテントが建てられ、並べられた座席の数の多さに驚いた。今回は、御遺族を中心に1600名余の方々が参列された。前日の強風も止み、暑くもなく寒くもない陽気で、参道には地の元の物産を売る店が沢山並んでいた。

除幕式は、齋館からの行進に始まり、厳かな雰囲気の中で行われた。思いがけず、私も除幕の綱を引くこととなり、初めての体験だったので、いささか緊張してしまつた。白い幕を掛けられた勇士之像の左右に、衣笠専務理事と高校生の吉村さん、私と小学生の森本君とに分かれ、合図と共に紅白の綱を引くと、青々とした新緑を背景に勇士之

像が姿を現した。周囲の人々から、温かい拍手を頂いた。神事の後、衣笠専務理事よりお礼の言葉と勇士之建立奉納の趣意、今後とも機会ある毎に、特攻隊の慰霊顕彰をお願いしたいとの挨拶が述べられ、除幕式は滞りなく終了した。

花火を合図に始まつた大慰霊祭も盛大に執り行われ、小方基次官司のご挨拶の中でも、特攻勇士之像についてご紹介を頂いた。建立場所は、鳥居をくぐったすぐ右側の目立つ場所にある。今後、護國神社に参拝される方々が、特攻勇士之像の前にふと立ち止まつて、郷土からも特攻隊員として散華された方々が身近におられることを知り、その勇氣と大いなる愛を頂いて、私達が生きていく「今」があることに感謝し、御霊の安らかなることをお祈りする、一つのきっかけにして頂ければと願っている。前日、護國神社に打合せにお伺した際、小方宮司様から大変印象的なお話を承った。

山口縣護國神社は、昭和16年の創建であるが、御祭神として、明治維新以後、国難に殉じられた山口県出身の全御英霊をお祀りしている。小高く見晴らしの良い境内からは、陸軍の桜島練兵場（現・陸上自衛隊訓練場）が一望できる。今では道路が整備されたり、建物が増えて様相も変わっているが、

当時は視界が開けていたのだろう。宮司様から「護國神社を建てる場所を選ぶ時、英霊が後輩の方々の訓練風景を、いつも見られるようにと、この場所を選んだと聞いております。」とのお話があつた。そのお言葉に、護國の英霊は今もなお、後輩の方々を見守つておられるのだと感じ、心が温かくなつた。

宮司様の御息・小方礼次様が、自家用車で宿まで送つて下さることとなり、その途中、神社の隣の高台にある寺内一族の墓所と、すぐ上にある陸軍墓地にお参りした。寺内両元帥は、亡くなられてからもずっとこの墓所から郷土の練兵場を見下ろしながら、国の安寧を祈願しておられるものと思われた。途中、山口県庁の敷地内にある優美な佇まいの山口県政資料館（旧県庁舎）と旧山口藩庁（政事堂）正門を車窓から見学させて頂いた。

山口県には、十数年前に航空自衛隊隊府基地の取材で伺い、回天の訓練基地があつた大津島にも渡つた。今回は移動時間が掛かるため、式典への参列のみの慌ただしい旅程であつたが、改めて山口県の歴史や風土、初代の内閣総理大臣となつた伊藤博文を始め8人も総理大臣（国内最多）を輩出し、近代日本を築き上げた数々の人材を生み出した郷土の誇りを身近に感じた2日間であつた。

## 京都霊山護国神社慰霊祭 に参列して

評議員 石井 光政

平成27年5月24日(日)、新緑の眩しさと暑さの加わる季節、清水寺近くの京都霊山護国神社において、海軍飛行専修予備学生第13期生の御遺族他関係者が中心となって結成された「関西白鷗遺族会」主催による慰霊祭に、当

顕彰会を代表して参列しましたので、次のとおり報告いたします。

京都霊山護国神社の境内には、11休



目となる「あ、特攻」勇士之像が、平成24年4月28日に建立奉納され、以来関西白鷗遺族会が同会の慰霊祭に合わせて、特攻勇士之像の前で、特攻隊員の慰霊祭も執り行ってきたさるようになり、毎年、当顕彰会からも代表が参列しているものである。

海軍飛行専修予備学生第13期の方々、既に90歳を超えておられるが、7名ほどが参列しておられ、その他小中学生を含む御遺族や関係者の方々約50名が参集して、厳かに慰霊祭が執り行われた。

慰霊祭は、11時の開式であったが、それに先立ち、10時30分に海軍旗が掲揚された。白鷗遺族会主催の慰霊祭ならではのことであろう。

式典は、国歌斉唱に始まり、厳粛に進められ、最後に予備学生13期の方々が前に出て、そのリードの下、参列者全員で、献歌「同期の桜」を斉唱した。



予備学生13期の方々の歌声は澁刺としていたが、戦没同期生を偲ぶお気持ちで全面に籠められていた。

その後、参列者全員で記念撮影を行い、引き続き、境内にある特攻勇士之像に玉串を奉奠した。今年から特攻勇士之像の慰霊祭という形式ではなく、自主的な拝礼の形であったが、参列者全員が玉串を奉奠して参拝してください、御英霊もさぞお喜びになられたことと拝察する。

その後更に、山を少し登ったところにある「白鷗顕彰之碑」に各自慰霊参拝を行ったが、足の不自由なお年寄り

も時間を掛けてゆっくりと山道を登って行かれる姿に感銘を覚えた。

海軍飛行専修予備学生・生徒の入隊者約1万1000名の内、約2500名が戦没されたが、その内、13期生は最も多く、約5000名が入隊し、約1600名が戦死されたという。白鷗顕彰之碑にも戦没された予備士官のことが記述されているが、その中に特攻隊員に関する記述には、「短期間の猛訓練に耐え、航空隊指揮官として英知と勇氣を持つて戦い、2485名が雲ながるる果てに散華されました。そのなかで神風特別攻撃隊士官搭乗員の85%実に658名が学徒出身海軍飛行科予備士官でありました。」とある。

本慰霊祭は、関西白鷗遺族会の主催であるので、陸軍に関する話が出てこないが、特攻勇士之像には皆さんが玉串を奉奠してください、京都府から特攻隊員として散華された英霊95名(陸軍41名、海軍54名)も、さぞお喜びになられたものと考えます。

最後の懇親会において、予備学生第13期の加藤昇様が、戦時中の体験をお話しになり、また、「昭和維新の歌」「艦隊勤務」「ラバウル航空隊」等の歌を全員で斉唱し、和氣藹々のうちに13時30分、散会となった。加藤様は、今年



3月に、航空自衛隊岐阜基地に所在する飛行開発実験団に招かれ、隊員340名に対して講話をされ、隊員に大きな感銘を与えられたとのことである。戦時中の体験談を聴く機会が少なくなる中、有意義なことであったと思う。遺族会会長の山田正克氏（叔父様を特攻で亡くされている）は、47歳という若さであるが、我が顕彰会と同じく、先の大戦で亡くなられた方々の事実の伝承と、それに対する慰霊・顕彰をいかに若い世代に伝えていくかの難しさについて語られていたのが印象的であった。

これら全国の遺族会等と連携しながら、英霊の慰霊と顕彰を行っていく必要性を痛感した慰霊祭参列であった。

**第45回指宿海軍航空基地「哀惜の碑」慰霊追悼式に参列して**

専務理事 衣笠 陽雄

平成27年5月27日（水）、鹿児島県指宿市東方の旧海軍航空基地跡にある「哀惜の碑」慰霊追悼式に、当顕彰会として初めて参列しましたので、以下に報告いたします。

なお、水上機（機体に「下駄ばき」

と呼ばれたフロートをつけ、水上で離発着する航空機）特攻、及びその慰霊祭に関する本誌記事は少ないので、参列記事の前に、水上機特攻及び戦後の慰霊祭について若干記述することにします。

**一 水上機特攻及び慰霊祭概観**

**1 水上機による特攻攻撃の経緯等**

指宿海軍航空基地は、昭和18年12月に完成したが、水上機みの運用であるため、通常機の離発着のための地上滑走路はなく、水上機を揚陸する施設（スベリ・エプロン等）が海岸沿いに設置された。昭和19年1月1日、高知県宿毛にあった水上機・水上偵察機要因要請を担当する「宿毛海軍航空隊」が、「第四五三海軍航空隊」に改称され、実戦部隊に転換されて指宿基地に移駐し、九州南方・西方海上の対潜哨戒に従事することになった。2月には海上護衛総司令部隷下となり、水上戦闘機隊を廃止して、水上偵察機14機からなる水上偵察機隊に改編された。

更に、12月15日には、第九五一海軍航空隊に編入されたが、旧四五三空水上偵察機は、対潜哨戒に欠かせない電探を最優先に搭載していたので、沖縄戦開始まで、九州へ沖縄航路の哨戒任務に投入された。その後偵察機の消耗

により縮小されたが、終戦まで対潜哨戒任務を継続した。

昭和20年2月、米軍が硫黄島攻略に転じた頃、海軍では戦況の逼迫と燃料不足から練習航空隊の飛行訓練を中止し、予想される沖縄戦に備え、3月からは各隊保有の練習機をもって特攻隊を編成し、特攻訓練を開始した。水上機では、北浦航空隊・詫間航空隊の零式水上偵察機（三座）、九四式水上偵察機（三座）、零式観測機（二座）の実用練習機を特攻機に転用した。特攻隊員は、隊付き中の予備学生第13期生出身者と、実用機の訓練を中止した予備学生第14期生・予備生徒・予科練出身者、これらと出身が同じ偵察員と3月半ばに偵察の訓練教程を卒業した偵察員が来隊してペアが組まれ、特攻隊が編成された。

水上機特攻の最大の狙いは、指宿を最後の中継基地とし、月明の夜間に乗じて出撃し、沖縄周辺海域に増集する米軍艦船、特に輸送船を撃滅して機動部隊の補給を断つことであった。

特攻機は、零式水偵は800kg、九四式水偵は500kg、零式観測機250kgの爆弾を1発搭載した。飛行の可能性については、350マイル（約564km）の実飛行実験の結果、重量超過のため往復は不可能であるが、片

水上機の神風特攻出撃の記録(指宿発進)					付表
出撃時(昭和20年)	隊名	特攻機種 × 機数	人数	所属	攻撃目標
4月29日	琴平水心隊	零水偵 × 2	5名	詫間航空隊	沖縄周辺艦船
5月4日		94水偵 × 13	22名	詫間航空隊	
5月4日	第一魁隊	零水偵 × 2, 94水偵 × 13	6名	北浦航空隊	沖水良部周辺艦船
		94水偵 × 6	12名	北浦航空隊	
5月11日	第二魁隊	零水偵 × 1, 94水偵 × 1	5名	鹿児島航空隊	沖縄周辺艦船
5月24日	第12航空戦隊 二座水偵隊	零観 × 2	3名	天草航空隊	
5月28日	琴平水心隊	94水偵 × 3	7名	詫間航空隊	
6月25, 27, 28日	琴平水偵隊	零観 × 7	9名	福山航空隊	
6月21, 25, 7月3日	第12航空戦隊 二座水偵隊	零観 × 7	13名	天草航空隊	
備考		計 44機	計82名		

道燃料なら出撃可能と断定された。出撃では一番機以外は電信員・電信機・機銃も外しての出撃であった。指宿基地からの特攻出撃は、4月29



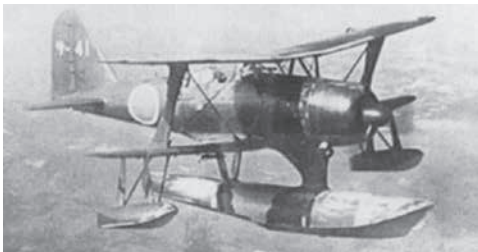
指宿海軍航空基地「哀惜の碑」慰霊追悼式場

日の菊水4号作戦から7月3日の菊水10号作戦まで9回、延べ44機により沖縄周辺の艦船に対して行われ、特攻隊員82名が散華された。

その出撃記録は、前頁の付表のとおりであるが、指宿航空隊所属の特攻機が含まれていないのは、指宿航空隊の索敵、対潜警戒、船団護衛の本来任務の重要性とその必要性から外されたものと推測される。また、戦果確認、直掩機の随伴についても、資料がなく、戦果等は不明である。



零式水上偵察機



零式水上観測機



94式水上偵察機

指宿基地は、滑走路がなく、小規模であったためか、米軍の大規模攻撃はなかったが、昭和20年5月5日、最初で最後のB29爆撃機11機による報復爆撃を受けて壊滅的打撃を蒙り、八〇一空指宿派遣隊、九五一空指宿派遣隊、偵三〇二飛行隊、佐伯空指宿派遣隊、民間女性を含め、100名以上の戦死者と多くの負傷者を出したという。碑銘の中には、確かに女性の名前も刻まれている。ただ、航空機については、魚見岳山脚に長さ20〜50mの防空格納壕が何本かあったので、格納中の航空機には、損害はなかったものと思われる。5月以降も指宿基地から特攻隊が出撃しており、終戦まで他の基地からの特別攻撃の最終出撃基地としての機能

を保持していたと推測される。なお、佐伯航空基地等の水上機は基地には駐機せず、隣村等に秘匿していたという(海兵74期の渡辺氏談)。滑走路がなくとも海からの揚陸が可能であればどこにでも隠せるという水上機の特性が空襲等からの被害を回避して終戦まで作戦を可能にしていたという事実は興味深いものである。

2 戦後の慰霊・顕彰について

終戦後25年を経た昭和45年、指宿航空隊生き残りの有志により、第1回の慰霊祭が執り行われた。翌昭和46年6月、生き残った戦友達と市民有志により、基地跡に「哀惜の碑」が建立された。碑文は戦没者の鎮魂と顕彰について、短切ではあるが、感銘深い以下の

文が刻されている。  
(碑文)

「君は信じてくれるだろうか この明るい穏やかな多良浜が かつて太平洋戦争の末期本土最南端の航空基地として 琉球弧の米艦隊に対決した日々のことを 拙劣の下駄ばき水上機に爆弾と片道燃料を積み 見送る人とならないこの海から 萬感をこめて飛び立ち遂に還らなかつた若き特別攻撃隊員が 八十二人にも達した事を 併せて敵機迎撃によって果てた 百余人の基地隊員との鎮魂を祈って ここに碑を捧ぐ」

その後は、指宿市在住の旧海軍出身者の「指宿かもめ会」が、毎年5月、「哀惜の碑」前での慰霊祭を執り行ってきた。昭和60年5月には、一人の生存隊員により銘碑が建立寄贈され、碑周辺の環境も逐次整備されてきた。この銘碑には碑に祀られている、当基地から出撃した82名の特攻隊員と空襲等の一般戦死者100余名を合わせた192名が刻まれている。

平成2年4月、高齢化した「指宿かもめ会」による慰霊祭の執行が困難になりつつある中、同会の長年にわたる粘り強い嘆願運動が漸く実り、市長を会長とする「指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会」が設立された。以後、慰霊追悼式等碑関連業務は、同顕彰会事務

局が担当してきた。碑周辺は現在、慰霊碑公園として、灯籠設置、参道整備、説明・案内板設置、樹木の整備等毎年計画的に整備されている。

なお、追悼慰霊祭の時期は、毎年5月27日(旧海軍記念日)15時からと固定されている。

## 二 第45回慰霊追悼式

哀惜の碑は、すぐ後ろに魚見岳の絶壁を控え、指宿海岸多良浜の波打ち際から数十mの旧通信室(防空壕)の上にある。

戦後70年、45回目という節目の年の慰霊追悼式は、遺族関係者15名、生存隊員等22名、来賓、顕彰会関係者等約100名の参列を得て執り行われた。狭い台上一杯の人であった。特に指宿市関係者が多く見受けられた。

式典は、15時から始まり、一同拝礼の後、海軍方式で、国旗・軍艦旗の掲揚、海上自衛隊P3C機の慰霊飛行、黙祷と順調に進んだ。慰霊飛行は、台上の樹木とテントに遮られて一瞬しか見えなかったが、南九州での殆どの旧海軍基地慰霊祭等に参加してくれる海上自衛隊に感謝した。

追悼の言葉では、哀惜の碑顕彰会会長指宿市長の代理で、新宮領市議会議長が挨拶をされた。

次いで、元海軍飛行予科練習生出身の特攻隊員で、旧指宿かめも会代表であった吉田安宏氏が「・・・思えば特攻攻撃に際し、死を決定付けられる命令により出発地と覚しき指宿基地での

待機生活は、表面上の平静さとは裏腹に、それは修羅の姿そのものであり、生と死の葛藤は必然的に、焦り、苛立ち、煩悶を招き、思考の及ばぬ果てに諦めの境地に達するという特異な日々であったと思われまます。そのようなある日、突然下された出撃命令に、黎明の暁闇をついて素早く身仕度を整え、愛機に飛び乗りながら『よし行くぞ』とひたすら祖国・故郷の安泰を願い、命を捧げてきたのも今日のため、思い残すことは更けない、と。また、同じ命令で申良から出撃した陸上攻撃機が鹿兒島湾を突っ切って佐多岬を左手に見る頃、ふと眼下に目を遣ると、黎明の水面を這うように、水偵特攻機が3機、出撃する様子を目にしました。我々に迫り来る困難を思う時、一種の感動さえ覚えて、思わず心からなる敬礼を送った。残念ながら私は、エンジンの不調のため止むなく屋久島付近から引き返したのである。3ヵ月後、壮烈なる戦いの日々は終わり、平和が蘇りました。敗れたとは言え、その後のわが

国の目覚ましい発展は、偏に戦没諸兄

の尊い犠牲にあることを忘れず、後世に伝えていきたいと思う・・・と自らの体験を踏まえた感銘深い追悼の言葉を述べられた。

次いで、参列者全員による献花が行われ、富田事務局長による遺書の朗読、慰霊電報の披露、献詠、国旗・軍艦旗降納、一同拝礼、閉式の言葉で、約1時間の式典は終了した。

式典は、富田事務局長の司会で大変手際よく、スムーズに進行し、45回の歴史を感じさせる追悼式であった。

また、例年どおり、マスコミ関係も7社程来ており、式の様子や遺族・生存隊員への取材を行っており、関心の高さを示していた。小規模ながらも心の籠った慰霊追悼式であった。

## 三 所見

### 1 水上機による特攻について

今回、参列前の私の最大の疑問は、「何で大きなフロートが付けた。下駄ばき」とも呼ばれた布製複葉機で特攻なのかであった。それだけ切羽詰まった状況にあったのだ、一億玉砕という雰囲気の中では、成功の確率など問題外であったのだ、など確かに頷ける面もある。しかし、現実問題として水上機の性能を見ると、ベースは零戦で、空母発着装置はすべて外してあるもの

の、大きなフロートと乗員が2〜3名搭乗し、動きはそれほど軽快ではない。グラマンを撃墜したという記録(二式水戦)もあるが、所詮偵察機、米軍の戦闘機には敵う筈はない。

片道燃料であれば出撃可能と判定されたようだが、それは単に沖縄まで飛行可能だっただけである。夜間隠密裏にいつても日米の電探(レーダー)の性能は決定的な差があった(海兵74期、電探専門の渡辺浩氏の説明では、1機で飛行しても電探では2機写っていたとか)。今、戦力格差を分析すれば、成功の確率はゼロに等しいかもしれない。しかし、当時の状況を冷静に判断できる現在の感覚で、当時の行動を批判してはならない。国の危急に際して万に一つの可能性があると信ずれば、やらざるを得なかったという当時の厳しい現実を踏まえての意見を言わねばならないのではないか。特攻に対して無駄死に、強要された等の批判が罷り通っているが、そういう無謀・無駄とも言える行動を非難することよりも、状況を知りつつも敢然と笑って死地向かったという特攻隊員の精神を学び、後世に伝える方が遥かに大事なことである。

日本民族が存続するか、滅びるかの瀬戸際において、身を賭して祖国を

守ろうとした特攻隊の精神は、世界の人々に日本民族の真の心を知らしめ、植え付けた事実を忘れてはならないと思うのである。

## 2 慰霊祭の齎行について

全国の旧軍関連慰霊祭に参列する度に聞かれるのは、旧軍出身者の高齢化に伴う規模の縮小、主催団体としての活動力の低下等の問題である。旧軍関係団体で先見の明のある慰霊団体は、後継者を早々と決め、段階的に委譲し、スムーズな交代を行っている。

本指宿の慰霊祭も、平成2年、旧海軍出身者の「指宿かもめ会」から指宿市長を会長とする「指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会」が設立され、それ以後、同会の事務局が慰霊祭業務を実施している。指宿以外にも、長崎県川棚新谷郷、南九州市知覧、南さつま市万世、鹿屋市串良、宮崎県都城市等の慰霊祭は、旧軍関係者から実質的に市等が受け継いで、慰霊祭を取り仕切り、市長が主催している。

将来への継続の可能性、国民全般への慰霊・顕彰の普及の容易性等を考慮すると、公的機関にお願いできれば最良である。本来は国や県がバックアップすべきであるが、戦後の国の施策や偏向教育からどうしても旧軍関係者が主体となって継続されてきた。最近漸

く慰霊という問題が見直され、市町村が後継者になるという良い方向に向かっていくようにと思われる。また、期待される自衛隊については、現在、主催者となるには法的問題もあるようであるが、可能な範囲で、積極的に協力をしてもらっているのは有り難いことである。

未だ後継問題が解決していない慰霊団体は、数多くあると思われる。旧軍関係者が存命中に、早急に適切な後継者を決定して、慰霊・顕彰の活動が永遠に続く態勢を確立して欲しいと願うものである。また、我が特攻顕彰会では、以前から全国の特攻隊戦没者の慰霊祭を紹介し、協賛してきたが、大規模な慰霊祭のみならず、指宿のような小規模ながらも45年もの間宮々と、英霊の慰霊・顕彰を続けてこられたような慰霊団体の情報入手に努め、全国に広く紹介することは、今の時期特に、必要なことと考える。

## 第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

会員 河島 慶明

平成27年5月3日(日)、鹿児島県南九州市の知覧特攻平和観音堂前にお

いて執り行われた「第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭」に初めて参列させていただきました。この戦後70周年の節目の年に参列させていただき、真に光栄なことと感謝しています。

式典には、1000名を超える方々が参列し、その中に遺族の方が260名もおられるとのことでした。1000名以上の方が入れる大テントは驚きでした。

特に、式典での特攻隊員の御遺族代表の慰霊の言葉や3名の特攻隊員が残したの遺詠の献詠を拝聴し、涙が止まりませんでした。参列者全員の献花が終わる頃には、雨が本降りとなって、雨中の慰霊祭となり、感慨無量なるものがありました。

式典に参列して思ったことは、この慰霊祭には、地元南九州市の人達だけではなく、日本中から関係者が多数参列しておられ、全国的な広がりを持った慰霊祭であるということで、大変感動しました。

式典終了後、知覧特攻平和会館とミュージアム知覧を拝観しました。沖繩特攻の激しさ、悲惨さが胸に迫り、70年前の当時の人々の胸中は如何ばかりであったろうかと、思い遣られました。今の平和日本は特攻隊の方々のお陰であるのだと改めて痛切に感じ

ました。

入館者に若い人や若い家族連れが多いのが特に目に付きました。非常に熱心に見学しており、子供の頃から特攻の話をよく聞いて育った人達ではないかと思いました。また、年配の男の方は、同期生が特攻で散華され、毎年知覧にお参りに来ているとのこと、本当に惜しい戦友を失った、としみじみ話してくれました。

特攻平和会館で働いている方にもお会いできました。その方の母親は、昭和20年に知覧飛行場で働いていて、特攻隊員が発進するのを、日の丸の旗を振って見送ったという話を話してくれました。

特に驚いたのは、慰霊祭会場を出た道路の両側には、献納された石燈籠が延々と続いており、その数は、昭和20年の沖繩戦における陸軍特別攻撃隊散華者数1036柱を超えて1290基となり、まだまだ増え続けているとのこと、本当に感動しました。

南九州市を中心とした関係者の熱意の輪が全国的に広がって5月3日の知覧特攻基地戦没者慰霊祭が、今後益々盛大となり、その志を後に続く若い人達が立派に後世に引き継いでくれることを念じつつ、献納された1290基の石燈籠に合掌して会場を後にしました。

# 日本海海戦百十周年記念式典に参列して

評議員 飯田 正能

5月27日は、旧海軍記念日である。即ち、今から110年前の明治38年5月27日から29日にかけての日本海海戦において、東郷平八郎大將率いる我が聯合艦隊が、ロジェストウエンスキー中將率いるロシア・バルチック艦隊を撃滅し、世界海戦史上例を見ない大勝利を取めた記念すべき日である。

毎年この日には、横須賀市の三笠公園にある記念艦「三笠」の艦上におい



式典当日の三笠記念艦

て、公益財団法人三笠保存会主催による記念式典等の行事が催されている。今年には、日本海海戦百十年の節目の年に当たり、例年にも増して盛大な記念式典と祝宴等が挙行された。筆者は、この5月発行の会報『特攻』第105号に「ネルソン・タッチとカミカゼ」と題する一文を掲げ、その中で、ネルソン、東郷両提督に共通する「見敵必殺」の信念と日本海海戦における東郷ターンを始め、大勝利を取めた海戦の経過について記載したが、その時の旗艦「三笠」は今も健在であり、両提督の精神は、今も日米英三国の海兵たちの精神によって受け継がれていることを実感した。前号にも記載したが、記念艦「三笠」が今日あるのは、先の大戦におけるアメリカ太平洋艦隊司令長官ニミッツ提督の功績によるところ大である。東郷提督の精神は、ニミッツ提督によって受け継がれていたのである。

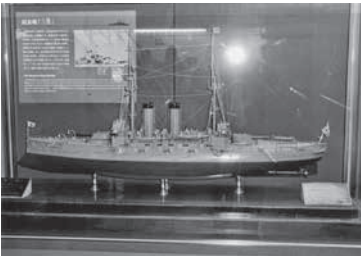
式典は、三笠艦内の講堂で挙行されたが、式場は、来賓、保存会員等数百名の参列者で溢れ返っていた。13時30分からの式典では、国歌斉唱、黙祷の後、三笠保存会会長増田信行氏の式辞(全文別掲)があり、その中で、昭和33年11月の三笠保存会設立総会における小泉信三先生の言葉を引用しつつ、「・・・我が国の現状は、戦後70年の

今なお、政治を始め、教育、マスコミなど、日本人としての誇りも矜持も持たない人が多く見受けられることは、極めて残念である。大東亜戦争に敗れたとはいえ、この日露戦争・日本海海戦の勝利は、日本民族の誇りであり、世界史における金字塔であることに、何ら変わりはありません。英国では、日本海海戦の丁度百年前のトラファルガー沖海戦の勝利を、未だに国民挙げて祝い、語り継ぎ、英国民の矜持の核の一つを成しています。我が国もこの日本海海戦の百十周年の記念の年に、この勝利を国民こぞって、誇りを持って祝うとともに、明治の先達が示した、国を守る気概と勇氣に学ぼうではありませんか」と力強く訴えられた。次いで、来賓の米海軍第七艦隊司令官トーマス中將は、祝辞(概訳別掲)の中で、東郷・ニミッツ両提督の関係を強調し、ニミッツ元帥の意向を受けて、米国海軍と第七艦隊は、三笠保存維持のため一役を果たしていること、日本海海戦における東郷大將の発した「各員一層奮励努力せよ」との命令は、不確かな世界に生きる我々にも大きな示唆を与えてくれていること、東日本大地震において示された「トモダチ作戦」を始め、米国第七艦隊は、海上自衛隊との緊密な連携を誇りに思う、と力強く述べられた。そのほか来賓として海上自衛隊横須賀地方総監井上力海將、吉田横須賀市長、英国大使館駐在武官もそれぞれ有意義な祝辞を述べられた。その他の来賓紹介、中谷防衛大臣の祝電披露があつて閉式となつたが、その後、引き続き講談師・五代目一龍齋貞花師匠の講談「日本海海戦」の熱演を拝聴し、甲板上で海上自衛隊横須賀音楽隊による勇壮な軍艦マーチ等の演奏を楽しんだ後、15時30分から後部甲板において、祝宴が催されたが、日米合同の和やかな祝宴は大いに盛り上がった。この三笠記念艦の入館者数は、このところ年々増加し、平成26年は23万3千人以上に達したとのことである。この三笠記念艦を訪れる人々、特に日本の将来を担う青少年が日本海海戦の勝利と本艦の栄光を胸に刻み、日本人の誇りと勇氣を持つて困難な時代を切り抜けてもらいたい、と願つて止まないところである。

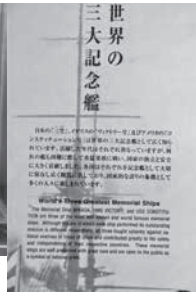


筆者の第三の郷里(小学校5、6年と旧制中学校1、2年、及び復員後の学生時代を送った)、福岡県宗像郡には、日本海海戦と東郷元帥に由縁の深い、二つの神社があり、今でも日本海海戦を記念する神事や行事が行われ、記念品の数々が宝物として大切に保存さ

れている。その二社とは、宗像大社と宮地嶽神社であるが、この機会にご参考までに、その概要を後ろに紹介したい。



戦艦「三笠」の模型



祝辞・米第7艦隊司令官トーマス中将



英国「ヴィクトリー号」の模型



講談師一龍斎貞花師匠の熱演



祝辞・英国大使館駐在武官



米国「コンスティテューション号」の模型



後部甲板での祝宴



海上自衛隊横須賀音楽隊の演奏

### 日本海海戦百十周年記念式典式辞

本日ここに、武居海上幕僚長、井上横須賀地方総監、鮎田自衛艦隊司令官、トーマス米海軍第七艦隊司令官、吉田横須賀市長はじめ、多数のご来賓のご臨席を賜り、日本海海戦百十周年記念式典を挙げてまいりますことは、誠に慶ばしく厚く御礼を申し上げます。

皆様ご承知のとおり、十八世紀の産業革命以来、列強は、強大な軍事力を背景に、植民地を求めて版図を広げ、その流れはアジア諸国にも及んで、十九世紀になりますと、列強が支配した植民地は、実に世界の約八割強であり、正にこの弱肉強食の時代に、日本という「まことに小さな国が、明治という開化期を迎えた」こととなります。

ロシアは、幕末には、既に清国から沿海州を獲得し、南下の機会をうかがっており、朝鮮半島にも露骨な触手を伸ばしてきました。

このままでは、ロシアに朝鮮半島を支配され、日本も清国と同じ運命を辿ると、危機感を抱いた日本は、我が国の主権を守るため、海洋国家英国と同盟を結び、大ロシアと戦う決断をしたのであります。正に自存自衛の防衛戦争でありました。

軍事的にも財政的にも余裕が全くなく、苦難に耐えたりぎりぎりの戦いでありましたが、国民一人一人がそれぞれの分野で死力を尽くし、大きな負担にも耐え、文字どおり挙国一致で日露戦争を戦い抜きました。

明治38年（1905年）5月27日、東郷司令長官率いる日本の聯合艦隊は、周到な兵力整備、情報の優越、練りに練られた巧みな作戦・用兵、そして将兵の極めて高い士気と練度で、バルチック艦隊を撃滅し、世界海戦史上例を見ない大勝利を取めたのであります。

このため、ロシアにおいても、講和止む無しの機運が高まり、ルーズベルトアメリカ大統領の仲介で、ポーツマス講和条約が締結され、日露戦争は勝利のうちを終結いたしました。

この戦争により我が国は独立を守るとともに、国際的地位を高めました。日本が大国ロシアに勝利したことにより、今まで抑圧されていたアジア諸国などの多くの人々に、希望と勇気を与え、独立国家建設の気運をもたらし、その



後、それらの国々が独立を勝ち取ったことは、歴史の示すとおりであります。日露戦争は、正に自衛のために戦った防衛戦争であり、「三笠」の勇姿を眺める度に、明治の人々の国を守る気概と勇氣、戦略性と合理性、そして国家に対する熱い思いを感じざるを得ません。

他方、我が国固有の領土である尖閣諸島への中国の無法な侵犯に耐え、北朝鮮による同胞の拉致を許し、竹島及び北方領土を未だに解決できない現状に憂慮せざるを得ません。

戦後、我が国は、平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、安全と生存を保持しようと決意し、防衛を他国に委ね、急速な経済復興を成し遂げ、経済大国になりました。

しかし、それを可能とした環境も大きく揺らぎ始め、日本は今やかつてない至難の時代を迎え、真の国民の力量が問われようとしております。

昭和33年(1958年)11月、三笠保存会設立総会において、小泉信三先生は、次のような講話をされております。

「自尊自重の精神のない国民が、他国の人々の侮りを受けるのは当然であり、自らを重んずる精神のないものは、弱小のものに対しては不遜となり、強大なものに対して卑屈になることは避けがたいことであります。他国の武力に屈するのやむなきに至った日本人は、国民としての誇りを失い、心の支えを失って、退廃に陥りました。道徳的努力を無意味なものとして嘲る思想、さらに、何者かに媚びる気持ちから、しきりに日本及び日本人を侮り嘲る風潮が生じております」と。今から50年以上も前の話ですが、今、我が国の現状を翻ってみますと、政治を始め、教育、マスコミなど、小泉先生が懸念された状態が未だに続いており、日本人としての誇りも矜持も持たない人が多く見受けられることは、極めて残念であります。

大東亜戦争に敗れたとはいえ、この日露戦争・日本海海戦の勝利は、日本民族の誇りであり、世界史における金字塔であることに、何ら変わりはありません。

英国では、日本海海戦の丁度百年前のトラファルガー沖海戦の勝利を、未だに国民挙げて祝い、語り継ぎ、英国国民の矜持の中核の一つを成しています。

我が国も、この日本海海戦の百十周年の記念の年に、この勝利を、国民こぞつ

て、誇りを持って祝うとともに、明治の先達が示した、国を守る気概と勇氣に学ぼうではありませんか。

昨年度三笠記念艦への来観者が20万人を超えました。この記念艦「三笠」が、今後とも国民に広く親しまれ、多くの方々、特に日本の将来を担う青少年にとつて、その発奮の一助になることを願って止みません。

最後になりましたが、平素から大変お世話になっております、地元横須賀の皆様、ご指導・ご協力を賜っております官公庁、三笠保存会会員各位、また、本日の式典に多大のご尽力を頂きました横須賀地方総監部及び横須賀水交会の皆様に対して、衷心より厚く御礼を申し上げ、式辞といたします。

平成27年5月27日

三笠保存会会長 増田 信行

#### 2015年5月27日 日本海海戦百十周年記念式典における 米国海軍第7艦隊司令官トーマス中将祝辞(概訳・三笠保存会)

吉田横須賀市長、増田三笠保存会会長、武居海上幕僚長他海上自衛隊上級指揮官各位(鮎田自衛艦隊司令官、井上横須賀地方総監、鍛冶潜水艦隊司令官)及び御来賓の皆様、本日この席に出席させて頂きましたことに感謝致します。日本海海戦における軍艦三笠の活躍を記念するこの式典に参加できましたことは、私にとり非常に光栄なことであります。

本日、皆様と共に参集しておりますこの艦は、我々に歴史を伝えております。(新旧の)三笠保存会の皆様は、約90年間にわたり、戦艦「三笠」が国家のために尽くした偉業の語り部として、記念艦の保存と共に努力してこられました。三笠保存会の素晴らしい業績によってこそ、本艦の栄光を記憶に留めることができるのであります。

米国海軍と第7艦隊は、記念艦「三笠」の保存維持のため一役を果たしております。米海軍のチェスター・ニミッツ元帥は、米海軍作戦部長の職を退いた後、1955年から1961年にかけて、三笠保存のためのキャンペーンに携わられました。2009年の夏には、米海軍の空母「ニミッツ」が横須賀に寄港中、東郷・ニミッツ両提督の関係を強調する幾つかの行事に参与しました。空

母「ニミッツ」の乗員はこの有名な戦艦の外舷塗装を行い、その艦上で三笠保存会、空母「ニミッツ」及び海上自衛隊共催による艦上レセプションが行われました。

我々が、家族や友人とこの記念艦「三笠」を見学する時、自由を守るために東郷大将が発せられた「各員一層奮励努力セヨ」という命令を思い起こします。

この東郷大将の命令は、不確かな世界に生きる我々にも示唆を与えてくれます。米國第7艦隊は、海上自衛隊との密接な連携を誇りに思っております。我々は、この70年間、相互に連携し、活動、訓練そして作戦を実施し、インドからアジアそして太平洋に亘る海域における平和と安定維持を支援してきました。我々はこの海域を我々のホーム（根拠地）と呼べることは幸運であり、この周辺隣国に対する長期にわたる責務の遂行を誇りに思うものであります。

最後に重ねて、このような機会に祝辞を述べさせて頂くことができましたことを感謝申し上げます。



## 【参考】

### ○聯合艦隊解散の辞（東郷司令長官訓示・原文）

二十閱月ノ征戰已ニ往時ト過ギ我ガ聯合艦隊ハ今ヤ其ノ隊務ヲ結了シテ茲ニ解散スルコトナレリ。然レドモ我等海軍軍人ノ責務ハ決シテ之ガ為メニ輕減セルモノニアラズ。此ノ戰役ノ因果ヲ永遠ニ全クシ、尚益々國運ノ隆昌ヲ扶持センニハ、時ノ平戰ヲ問ハズ、先ヅ外衝ニ立ツベキ海軍ガ常ニ其ノ武力ヲ海洋ニ保全シ、一朝緩急ニ応ズルノ覚悟アルヲ要ス。而シテ武力ナルモノハ艦船兵器等ノミニアラズシテ之ヲ活用スル無形ノ実力ニ在リ。百発百中ノ一砲能ク百發一中ノ敵砲百門ニ對抗シ得ルヲ覺ラバ、我等軍人ハ主トシテ武力ヲ形而上ニ求メザルベカラズ。近ク我ガ海軍ノ勝利ヲ得タル所以モ、至尊ノ靈德ニ頼ル所多シト雖モ、抑亦平素ノ練磨其ノ因ヲ成シ、果ヲ戰役ニ結ビタルモノニシテ、若シ既往ヲ以テ将来ヲ推ストキハ、征戰息ムト雖モ安ンジテ休憩ス可ラザルモノアルヲ覺ユ。惟フニ武人ノ一生ハ連綿不斷ノ戰爭ニシテ、時ノ平戰ニ由リ其ノ責務ニ輕重アルノ理無シ、事有レバ武力ヲ發揮シ、事無ケレバ之ヲ修養シ、終始一貫其本分ヲ尽サンノミ。過去一年有半、彼ノ風濤ト戰ヒ、寒暑ニ抗シ、

頑敵ト對シテ生死ノ間ニ出入セシコト、固ヨリ容易ノ業ナラザリシモ、觀ズレバ是レ亦長期ノ一大演習ニシテ、之ニ參加シ幾多啓発スルヲ得タル武人ノ幸福比スルニ物無シ。豈之ヲ征戰ノ勞苦トスルニ足ランヤ。苟モ武人ニシテ治平ニ儉安センカ、兵備ノ外觀巍然タルモ、宛モ沙上ノ樓閣ノ如ク暴風一過忽崩倒スルニ至ラン、苟ニ戒ムベキナリ。

昔者神功皇后三韓ヲ征服シ給ヒシ以來、韓國ハ四百年間我ガ統理ノ下ニアリシモ、一タビ海軍ノ廢頽スルヤ忽チ之ヲ失ヒ、又近世ニ入り徳川幕府治平ニ狃レテ兵備ヲ懈レバ拳國米艦數隻ノ應對ニ苦ミ、露艦亦千島樺太ヲ覬覦スルモノト抗争スルコト能ハザルニ至レリ。飜テ之ヲ西史ニ見ルニ、十九世紀ノ初メニ當リ、ナイル及ビトラファールガ一等ニ勝チタル英國海軍ハ、祖國ヲ泰山ノ安キニ置キタルノミナラズ、爾來後進相襲テ能ク其ノ武力ヲ保有シ世運ノ進歩ニ後レザリシカバ、今ニ至ル迄永ク其ノ國利ヲ擁護シ國權ヲ伸張スルヲ得タリ。蓋シ此ノ如キ古今東西ノ殷鑑ハ為政ノ然ラシムルモノアリシト雖モ、主トシテ武人ガ治ニ居テ乱ヲ忘レザルト否トニ基ケル自然ノ結果タラザルハ無シ。我等戰後ノ軍人ハ、深ク此等ノ實例ニ鑑ミ、既有ノ練磨ニ加フルニ戰役ノ実験ヲ以テシ、更ニ將來ノ進歩ヲ図リテ時勢ノ發展ニ後レザルヲ期セザル可ラズ。若シ夫レ常ニ聖諭ヲ奉體シテ孜々奮勵シ、実力ノ満ヲ持シテ放ツベキ時節ヲ待タバ、庶幾クバ以テ永遠ニ護國ノ大任ヲ全ウスルコトヲ得ン。神明ハ唯平素ノ鍛鍊ニ力メ、戰ハズシテ既ニ勝テル者ニ勝利ノ榮冠ヲ授クルト同時ニ、一勝ニ満足シテ治平ニ安ズル者ヨリ直ニ之ヲ褫フ、古人曰ク勝テ兜ノ緒ヲ締メヨト。

明治三十八年十二月二十一日

聯合艦隊司令長官 東郷 平八郎

### ○宗像大社と日本海海戦



宗像大社の御祭神は宗像三女神（田心姫神・湍津姫神・市杵島姫神）と言われる三柱の女神である。「古事記」及び『日本書紀』によれば、この三女神は天照大御神と素盞鳴尊が高天原の天安河を挟んで身の潔白を証明するために誓約をされた時に、まず天照大御神が素盞鳴尊の「十握剣」を受け取って噛み砕き、息を吹き掛けたところ、三柱の女神が生まれたが、その三柱の女神が宗像三女神なのである。次に、

素盞鳴尊が天照大御神の「八尺瓊勾玉」を噛み砕いて息を吹き掛けると、五柱の男神が生まれた。その五柱の男神は、天忍穗耳尊、天穗日命、天津彦根命、活津彦根命、熊野櫛日命であり、この中の第一神「天忍穗耳尊」は、後に、高千穂峰に降臨された天孫「瓊々杵尊」の御父で、神武天皇の御高祖であられる。我が国の創成神話の最も重要な部分の一つに当たる天孫降臨とは、天照大御神が御孫に当たる瓊々杵尊を地上に降臨させ、地上の統治をお命じになったことを指す。天照大御神は天照屋命や天宇受売命ら五柱の神を従わせ、

八尺瓊勾玉、八咫鏡、草薙剣の三種の神器（皇位の象徴）と神勅（天孫無窮の神勅）「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国は是吾が子孫の王たるべき地なり宜しく爾皇孫就きて治せ さきくませ 宝祚の隆えまさむこと まさに天壤と窮無かるべし」を授けられた。この時、宗像三女神にも神勅が下されたが、天照大御神から神勅が下された神社は全国で唯一宗像大社のみである。その神勅は「汝三神宜しく道中に降りまして天孫を助け奉り天孫に祭かれよ」というもので、この神勅が宗像大社鎮座の根幹とされている（宗像大社三宮の各

（宗像から朝鮮半島・大陸へ至る島々を連ねる海道）に下り、九州の土蜘蛛族、熊襲族、蝦夷族等の土民を征服して、天孫降臨を助けられたと日本書紀に記されている。なお、宗像大社は、平安時代に大宮司職が認められ、以後戦国時代にかけて社勢を伸ばしたが、戦国時代の混乱の中、大宮司家の断絶の寄進を受けて祭祀は継承されてきた。明治維新後、同4年に国幣中社に列格、同18年に官幣中社、同34年に官幣大社に昇格した。

明治38年5月27日、沖ノ島至近の海上において、我が聯合艦隊がロシアのバルチック艦隊に大勝した日本海海戦の後、聯合艦隊司令長官東郷平八郎大将（後元帥）は、宗像三女神の神恩に感謝し、自筆の「神光照海」の扁額と旗艦三笠の羅針盤を宗像大社に奉納されたが、それらの奉納品は境内の「神宝館」に展示されている。



宗像大社辺津宮本殿



神勅額

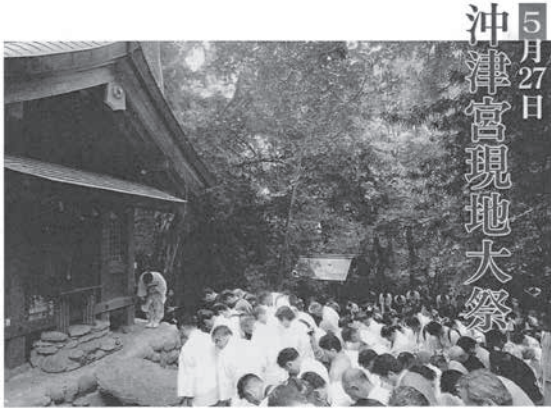


※通常、沖ノ島への渡島はできません



拝殿には、伏見宮貞愛親王の筆になる神勅額が掲げられ、その下で1日も欠かすことのない篤い祈りが捧げられている。三女神（別称を「道主貴」という。「貴」とは神に対する最も尊い呼び名で、他には天照大御神の「大日靈貴」と大國主命の「大己貴」のみであり、「最高の道の神」との意である。）は、筑紫の北海道中

昭和29年からの三次にわたる沖ノ島學術調査では、23箇所祭祀跡から8万点もの祭祀神宝が発見され、すべて国宝に指定された。その中には朝鮮半島を始め中国、遠くペルシヤなどの豪華な工芸品も見られるところから、沖ノ島は「海の正倉院」とも呼ばれて

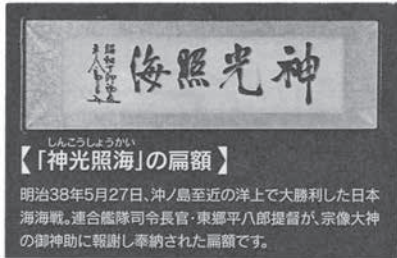


5月27日  
沖津宮現地大祭

我が国の命運を賭けた日露戦争、その勝利を決定づけた日本海海戦は沖ノ島北方洋上の対馬海峡で行われました。  
勝利に導いた明治の先人たちを称えつつ、命を落とした日露4200名に慰霊を込め、日本海海戦記念日(旧海軍記念日)に沖津宮現地大祭を斎行しています。  
平素は渡島が厳しく制限されている沖ノ島一般参拝者を受け入れるのは一年に一度の日だけです。全国から選ばれた約200人が島に渡り、現地大祭が斎行されます。



上■現地大祭当日朝、大島を出港する参拝者女性たちはここで見送ります  
下■沖ノ島上陸後、一斉に海中で(みそぎ)を行う参拝者



【「神光照海」の扁額】

しんこうしょうがい  
明治38年5月27日、沖ノ島至近の洋上で大勝利した日本海海戦。連合艦隊司令長官・東郷平八郎提督が、宗像大神の御神助に報謝し奉納された扁額です。



【旗艦「三笠」の羅針儀】

東郷元帥が自ら乗船し、羅針儀を揮つた旗艦「三笠」は現在、横須賀にあり、当時のまま現存している唯一のものです。

いる。それらの出土品の多くは神宝として境内の「神宝館」と九州国立博物館によって4〜10世紀にわたる祭祀の全貌が明らかになり、我が国において、その場所が現在の宗像大社(三社)であるとしており、その第一の宮は

る仏教伝来以前からの祭祀の形態が学術的に明らかになった。  
前述のように、天孫降臨に際し、天照大御神の御神勅により、宗像三女神を筑紫の北海道中に下されたのである

宗像郡の神湊港(こうのみぞ)から約60km、対馬の上島・厳原港から約75km、対馬海峡と玄界灘のほぼ中央に位置し、更にその北の朝鮮海峡を含めると、半島の釜山港から直線で約145kmの地点にある沖ノ島の沖津宮であり、田心(たごりひめ)姫神を祀る。  
第二の宮は神湊港から約11km、沖ノ島まで約49kmの地点にある大島の中津宮であり、湊津(みなつ)姫神を祀る。第三の宮は神湊港から内陸へ約2kmほど入った宗像市田島にある辺津宮であり、市杵(いちき)姫神を祀る。

なお、辺津宮は総社として、境内には伊勢神宮の御下賜材で造られた第二宮と第三宮があり、第二宮に沖津宮を、第三宮に中津宮を祀る。その他境内には高宮祭場、儀式殿、清明殿、祈願殿、神宝館、宗像護国神社等多くの社殿等があるが、中でも「高宮祭場」は宗像三女神降臨の地と言われており、沖ノ島と並び最も神聖な場所とされ、古代祭祀の姿を今に伝える全国でも稀な露天祭場である。

沖ノ島は御神体島として島全体が宗像大社の境内地であり、無人、女人禁制、上陸時の海中での褻ぎ、一木一草一石たりとも持ち出すことを禁ずるなどの掟が、今でも厳重に守られている。中腹に鎮座する沖津宮の祭祀のため、辺津宮より一人の神職が10日交代で奉

仕している。平素は渡島が厳しく制限されている沖ノ島に一般参拝者を受け入れるのは、1年に1回、5月27日の日本海海戦記念日(海軍記念日)に沖ノ島で斎行される「沖津宮現地大祭」の時のみで、全国から選ばれた約200名が島に渡って参列することができる。

中津宮の鎮座する大島は、東西3.2km、南北1.7km、周囲15kmあり、福岡県最大の島である。中津宮は島の南西岸に、海を隔てて辺津宮と向かい合う形で鎮座し、島の北側には沖津宮遥拝所がある。中津宮七夕祭は有名で七夕伝説発祥の地と言われている。

宗像大社三宮を挙げての大祭は、10月1日〜3日の秋季例大祭(たしまほしゅうごえ)で、それに先立ち9月中旬に宮司以下神職と大島の氏子達が御座船に乗って沖ノ島へ渡島し、神事後、沖津宮の御神璽を奉持して大島に渡り、中津宮本殿に仮奉安し、10月1日に大島ノ神湊港間(約11km)を、沖津宮の御神璽と中津宮の御神輿を載せた2隻の御座船に、宗像七浦の漁船団数百隻が供奉して海上を祓い清めながら渡る海上神幸「みあれ祭」は圧巻で、壮麗な一大海上絵巻を繰り広げる。

### ○宮地嶽神社と宮地嶽古墳

宮地嶽神社の創建は約1600年前とされる。主祭神は「息長足比売命」(神功皇后)で、第14代仲哀天皇の皇后であり、第15代応神天皇の母君であられる。『古事記』及び『日本書紀』には渡韓(新羅征討)の折、この地に滞在され、宮地嶽山頂に祭壇を設けて天神地祇を祀り、玄界灘の彼方に半島を望みし「天命を奉じて彼の地に渡らん。希わくば開運を垂れ給え」と祈願をして船出され、無事に新羅を服属させた、とある。宮地嶽山頂にはその史跡が残されている。その後、神功皇后の御功績を讃え、主祭神として奉斎し、随臣の勝村・勝頼の二大神を併せ「宮地嶽三柱大神」として祀られている。なお、古代、北九州から半島に渡る港

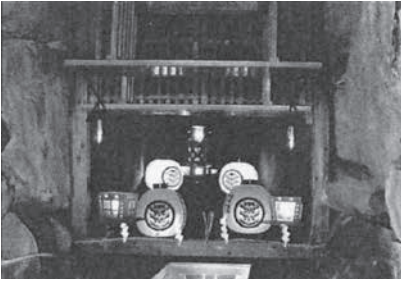
は、主として宗像の神湊、勝浦、津屋崎回りであったようである。宮地嶽神社の御本殿の屋根は、全国でも珍しい金色の銅板葺きであり、また、いづれも日本一と言われる三大奉納品がある。その一は拝殿の「大注連縄」で、長さ13・5m、直径2・5m、重さは5トンもあり、3年に1度氏子・崇敬者らによって掛け替えられる。その二は「大太鼓」で、直径2・2m、重さ1トン、牛の一枚皮で作られている。その三は「大鈴」で、直径1・8m、重さ450kgもある。境内は広く、宮地岳(182m)の山全体が社域で奥の宮、禊池にかけて四季の花園、合掌造りの「民家村自然広苑」、奥の宮八社など見どころが多い。秋季大祭(9月21〜23

日)の御神幸行列は平安時代の王朝絵巻さながらであり、御遷座記念祭(10月22日)には、約1200年の時を経て受け継がれてきた幻の宮廷舞「筑紫神舞」が奉納される。また、宗像三女神の祭祀を司った宗像君一族の首長の墓と見られる5〜7世紀の古墳群が、宗像大社の南、玄界灘に面した丘陵地帯の南北7km、東西2kmの範囲に集中して築かれており、津屋崎古墳群と総称されているが、現存する古墳は56基で、前方後円墳16基、円墳39基、方墳1基で構成されている。その中で一族の繁栄を最も良く示しているのが、宮地嶽古墳で、津屋崎古墳群の南端付近にある宮地嶽神社境内の奥の宮にある直径34mの円墳である(現在は不動神社として不動明王を祀る)。墳丘内部にある横穴式石室は全長23m、最大幅2・8m、天井までの高さ最大3・1mの巨大なもので、全国的に見ても最大規模の石室(奈良・明日香の石舞台よりも大きい)であり、石材もまた巨大で、3×4m以上もある岩石を多く使用している。昭和9年(1934年)と昭和26年(1951年)の発掘調査で、古墳の内外周辺から豪華な副葬遺物が多数発見された。金銅装頭椎大刀、金銅鞍金具、金銅壺鐙等の馬具類、金銅透彫冠、蓋付銅鏡、銅盤、瑠璃板、

瑠璃丸玉など30数点あり、すべて国宝に指定された。また、昭和13年(1938年)には古墳の近くで火葬墓が発見され、銅壺と瑠璃壺が出土し同じく国宝に指定されている。7世紀前半に造られたとされるこの古墳は、豪華な副葬品の存在などから天武天皇の第一皇子高市皇子を生んだ尼子娘の父、胸形君徳善の墓であるとされており、また、火葬墓から出土した瑠璃壺・銅壺は8世紀前半の骨臓器であり、尼子娘のものと考えられている。なお、宮地嶽神社も東郷元帥の篤い崇敬を受け、日本海海戦大勝の後、三笠艦上で身につけていた双眼鏡、軍服、剣その他の品々を同神社に奉納された。元帥の没後、宮地嶽神社のある津屋崎の港の渡半島の丘の上に東郷神社が創建され、その境内に東郷記念館が設けられて、それらの遺品を含む日本海海戦の記念品が展示されている。また、同海戦で捕獲されたバルチック艦隊の大型海防艦ゼネラル・アドミゲル・アブラクシン(日本名・沖之島号)もその半島の先端に係留されていたが、昭和13年頃解体して屑鉄とされ、東郷神社境内に展示してあった主砲も、戦後し連が持ち去った。



宮地嶽神社拝殿



宮地嶽古墳入口(拝殿)



国宝 金銅透彫龍文冠



国宝 金銅壺鐙

透彫冠、蓋付銅鏡、銅盤、瑠璃板、

瑠璃丸玉など30数点あり、すべて国宝に指定された。また、昭和13年(1938年)には古墳の近くで火葬墓が発見され、銅壺と瑠璃壺が出土し同じく国宝に指定されている。7世紀前半に造られたとされるこの古墳は、豪華な副葬品の存在などから天武天皇の第一皇子高市皇子を生んだ尼子娘の父、胸形君徳善の墓であるとされており、また、火葬墓から出土した瑠璃壺・銅壺は8世紀前半の骨臓器であり、尼子娘のものと考えられている。なお、宮地嶽神社も東郷元帥の篤い崇敬を受け、日本海海戦大勝の後、三笠艦上で身につけていた双眼鏡、軍服、剣その他の品々を同神社に奉納された。元帥の没後、宮地嶽神社のある津屋崎の港の渡半島の丘の上に東郷神社が創建され、その境内に東郷記念館が設けられて、それらの遺品を含む日本海海戦の記念品が展示されている。また、同海戦で捕獲されたバルチック艦隊の大型海防艦ゼネラル・アドミゲル・アブラクシン(日本名・沖之島号)もその半島の先端に係留されていたが、昭和13年頃解体して屑鉄とされ、東郷神社境内に展示してあった主砲も、戦後し連が持ち去った。



6月23日は、沖繩「慰霊の日」である。沖繩戦最後の激戦地となった本島南部糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園内にある「国立沖繩戦没者墓苑」では、沖繩県の主催による「沖繩全戦没者追悼式」が、安倍首相、翁長雄志知事や遺族ら約4600人が参列し、犠牲者の冥福を祈って黙祷を捧げた。安倍首相は挨拶の中で、「この70年間戦争を憎み、ひたすら平和の道を行ってきた私たちの道に誇りを持ち、これからも、世界平和の確立に向け、不断の努力をしていかななくてはならない」と強調し、沖繩の基地負担の軽減に全力で取り組む決意を揃って表明したが、一方、翁長知事は、政府が進める米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古への移設に反対する異例の「平和宣言」を読み上げ、選挙で反対の民意が示されており、移設は困難だと述べ、中止を求めた。

参謀長長勇中将のお二人は、南面して座し、古武士の型にならない、それぞれの愛刀をもって、従容として割腹自決された。介錯は、剣道5段の坂口勝大尉が見事に務め果たし、予て用意の墓場に遺体を埋め、そこに小さな墓標を立てた。時に午前4時30分であったという。戦後、昭和27年6月、土建業の異組と沖繩県遺族会連合会等の手によって摩文仁の丘の頂上に慰霊碑「黎明之塔」が建立された。牛島大将の辞世の歌「矢弾尽キ天地染メテ散ルトテモ 魂還リ魂還リ皇国護ラン」が、県によると、沖繩戦の戦没者は日米合衆軍・軍属は、日本軍9万4136人、米軍1万2520人で、残りの約9万4000人が軍人・軍属以外の沖繩県民であったという。

新聞・テレビ等マスコミは、終戦70周年ともあって、各種の特集を組み、住民を巻き込んで必死の抵抗を続けた沖繩戦の悲惨さを強調し、報道するのは、戦争の犠牲となった一般住民の事例が殆どであって、軍に協力し、祖国を守らんがために命を捧げた多くの県民を慰霊・顕彰するものは殆どない。戦後70年を経た今日なお、現地沖繩の人々の心には強烈な思いが染み込んでおり、戦争反対、基地反対の表向き

の声は強いが、真の平和を求め、国土の安全を希求するサイレント・マジョリティー（物言わぬ多数派）が存在するに違いない。

この日現地の慰霊追悼行事は、摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、中ても各戦没従軍学徒の碑（沖繩師範健児之塔、一中健児之塔、二中健児之塔、三中学徒之碑、和魂の塔、農林健児之塔、翔洋碑、沖繩工業健児之塔、開南健児之塔、ひめゆりの塔、白梅之塔、南燈慰霊之塔、梯梧之塔、ずいせん之塔、積徳高等女学校慰霊之碑等）でも行われているが、中央における沖繩戦戦没者慰霊行事が、唯一、靖國神社における本顯彰祭であるのは、些か寂しい思いがする。ましてや、マスコミがこれを報道することもない。

沖繩戦は、正に軍官民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して「鉄血勳皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勳皇隊員となって軍事訓練につき、20年3月には沖繩師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学校、同工業・農林・水産、市立商業学校、私立開南中学校の9校から1880余名が「鉄血勳皇隊」及び通信隊に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬首里城の急を救おうとして「学徒斬込隊」が志願編成され、50余名が一体となって敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。

女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖繩師範学校女子部と県立第一高等女学校を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その他、県立第二高等女学校の「白梅学徒隊」、同第三高等女学校の「名護蘭学徒隊」、同首里高等女学校の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高等女学校の「梯梧学徒隊」、私立積徳高等女学校の「積徳学徒隊」の7校から動員された従軍看護婦は総数約540余名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴ったが、中でも6月18日には、陸軍病院は解散となり、女学生の動員

も解除されたので、伊原の洞窟にあった第三外科病院では、女学生が従軍服を脱いで学生服に着替え、解散式を済ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙にうら若き女学生27名の命が奪われた悲劇もあった。その他戦死した女学生数は動員数の45%240数名に及び、男子部の44%830余名と共に動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

沖繩本島南部摩文仁地区に近い米須地区も最大の激戦地であったが、その糸満市米須に「魂魄之塔」という沖繩戦没者の遺骨を納めた慰霊の塔がある。合祀者数3万5千余柱、建立は昭和21年2月で、慰霊碑としては最も早い。碑文によると、その地は、戦後、真和志村（現在は那覇市の一部）村民が、米軍によって収容・移住を許された所で、村民及び地域住民の協力により、当時まだ道路や畑の中など周辺至る所に散乱していた遺骨を集めて祀った墓所で、3万5千余柱という、沖繩で一番多くの戦没者の遺骨を納めた無名戦士の墓であったが、昭和54年2月に摩文仁の丘に国立戦没者墓苑が完成し、遺骨は同墓苑納骨堂に分骨して安置されているとのことである。この塔の建立に当たっては、当時真和志村村

長であった金城和信氏が中心となって米軍と交渉し、夫人や村民の協力を得て、遺骨の収容、慰霊碑の建立に当たられた。氏は戦前、小学校の校長をしておられ、沖繩戦では沢山の教え子が戦死し、自身の二人の娘さんも、ひめゆり学徒隊として戦死されており、こうした戦没者を供養したいという強い思いから、その後も戦没者慰霊のリーダーとして、「ひめゆりの塔」「健児之塔」などを次々に建立され、沖繩県遺族連合会の会長も務められた。昭和53年に金城和信氏が亡くなられてからは、その功績を讃え、「魂魄之塔」と向かい合うように銅像が立てられた。その父親の御意志を受け継ぎ、「殉國沖繩學徒顯彰祭」を取り仕切り、靖國神社で毎年齋行して来られたのが元国士館大学教授金城和彦先生であるが、その先生も昨年2月19日、惜しくも逝去された。

既に平成22年、金城先生御夫妻が共に体調を崩され、事務を継続することができなくなったため、その齋行が危ぶまれていたが、先生の御意志を受け継ぐ若い学生達の熱意と努力によって同年6月23日、ようやく齋行に漕ぎ着けることができ、翌23年からは全日本学生文化会議の支援を得て、学生実行委員会（委員長上野竜太郎君）が主催

して齋行することとなった。

今年は取り分け、安倍内閣による昨年7月1日の集团的自衛権の限定容認の閣議決定を受けて、安全保障関連法案が国会に提出され、衆議院平和安全法制特別委員会での審議で、与野党の激しい論戦が展開されている最中であり、尖閣諸島の領有権を始め、海洋進出・支配権拡大の野望を図る中国への対応、沖繩防衛のための日米安保新体制の確立等、緊急に対応すべき難問が山積し、日本は外交・防衛態勢強化の正念場に立たされている。

このような内外情勢多難の中の顯彰祭齋行であったが、平成24年から第一部と第二部に分けて実施されることとなり、今年も第一部は「殉國沖繩學徒をお偲びする集い」として、14時15分から、靖國神社参集殿2階で実施され、従前の祭典は第二部として、15時30分から、靖國神社拜殿において齋行された。第一部、第二部とも、昨年とほぼ同じ約70名の参加者があった。

そして、その企画・運営もほとんど全部、若い学生諸君によって実施されており、大変頼もしく感じられた。今日、沖繩戦は多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下において、将兵

はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、身を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顯彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

本顯彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖繩殉國学徒の慰霊顯彰祭を齋行して今年第59回目を迎えた。御遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しており、特に平成22年以来、前記のような事情によって参列者が減少した。それが一昨年来、倍増するようになったことは、誠に喜ばしい。しかも、その内の約半数以上は、学生や若者など金城先生の志を継ぐ者であることは頼もしい限りである。

第一部の「殉國沖繩學徒をお偲びする集い」では、上野竜太郎実行委員長の熱誠溢れる挨拶に続いて、御来賓の板垣正元参議院議員が挨拶をされたが、その中で、沖繩戦が本土防衛と終戦処理に果たした意義等を強調され、金城和信先生が、沖繩の本土復帰前から、沖繩遺族会の設立や戦没学徒の慰霊顯彰に尽された功績を讃えられ、金城和信先生や和彦先生の御遺志を引き継ぐ若い学生諸君に将来を期待したい、と述べられた。また、今回初めて



板垣正元参議院議員



実行委員長上野竜太郎君



べられた。  
 次いで、靖國神社・遊就館の松本聖  
 吾展示課長から、遊就館における「沖  
 繩戦」関係展示の解説があり、第一部

と訴えられた。更に同じく御来賓の長  
 谷川博氏は、金城和彦先生の教え子で、  
 高校時代柔道部顧問をしておられた先  
 生から親しく指導を受けた思い出と、  
 和彦先生の御著『嗚呼沖繩戦の學徒隊』  
 を披露され、沖繩戦に散った若者たち  
 は、戦争犠牲者ではなく、祖国を守つ  
 た英雄である。我々は、その英霊に対  
 して感謝の気持ちを表すべきである。  
 そして、先生の御遺志は、教え子とし  
 て生ある限り継承して行きたい、と述

御来賓として参列して頂いた水交会会  
 長藤田幸生元海上自衛隊幕僚長は、沖  
 繩勤務当時の実感や各地の戦跡慰霊巡  
 拝の経験から、沖繩県民の本当の気持  
 ちは、表向きのものとは違っているよ  
 うに思う。終戦70年の節目の年に当た  
 り、各種の報道やイベント等が盛んに  
 行われているが、戦争の惨禍、悲惨さ  
 や哀しみのみが聞かれるような気がす  
 る。我々はむしろ、英霊の志を継いで、  
 未来に向けて何をなすべきかを考え、  
 本当の意味の平和を築くよう努力しな  
 ければならない。そして、英霊に対し  
 て、その志を決して忘れず、心から感  
 謝の気持ちを表しなければならぬ、

の集いは、深い感銘のうちに、15時、  
 滞りなく終了した。  
 第二部の式典は、靖國神社拜殿にお  
 いて斎行され、国歌斉唱、修祓の儀、  
 献饌の儀、祝詞奏上等の神儀、御遺文  
 奉読、御遺詠奉誦と進み、学生代表に  
 より感銘深い祭文が奏上された。  
 次いで、参列者から奉呈された献歌

【御遺文・御遺詠】  
 ○安谷屋盛治命 沖繩県立第一中学校  
 三年生・鉄血勤皇隊  
 球九七〇〇部隊野戦  
 重砲隊、真壁にて戦  
 死、当時数え十八歳  
 謹んで父母様に呈す。  
 戦局苛烈になった沖繩は、空襲、艦砲  
 射撃、砲弾で一杯です。  
 祖母様始め、父母様、弟、妹、お元氣  
 のことと思ひます。とにかく米英を  
 撃って撃って撃ちまくって、一日も早  
 く大東亜共栄圏確立に邁進しやうと  
 思つて居ります。今度こそ敵さんの顔  
 をみることが出来ます。自分は一人で

奏上があり、「国の鎮め」の奏楽のう  
 ちに、参列者全員、御本殿に昇殿し、  
 玉串を捧げて拝礼し、式典は滞りなく  
 終了した。その後、遊就館旧正面玄関  
 前で、全員の記念撮影を行い、再会を  
 誓つて解散した。(飯田正能記)

も多く敵をやっつけてから、死のうと  
 思っています。  
 大君の御為に命をささげて戦ひます。  
 自分が死んだ後も、永久に日本の國は  
 榮えることとせう。  
 十八歳で二等兵になり、入隊しました。  
 人生十八年、自分は喜んで死んで行き  
 ます。安心して死にます。  
 お父さんにお願ひします、自分の弟盛  
 夫は立派な軍人にして下さい。  
 お母さんにお願ひします、妹幸子は立  
 派な日本の女性にして下さい。

大君の御旗の下に死してこそ  
 人と生まれしかひはありけり  
 君のため何かをしまむ若櫻  
 散つて甲斐ある命なりせば

大君の御旗の下に死してこそ  
 人と生まれしかひはありけり  
 君のため何かをしまむ若櫻  
 散つて甲斐ある命なりせば



### 第58回旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式に参列して

評議員 石井 千春

早朝からちらついた小雨が止み、花曇りの空に、特攻隊戦没者慰霊塔の白さが際立って見えた。

平成27年4月4日(土) 10時30分より、表記の追悼式が、鹿屋市今坂町小塚公園の「特攻隊戦没者慰霊塔」前広場で執り行われた。

式典ではまず、参列者一同、国歌を斉唱し、高らかな喇叭の「君が代」が響く中、国旗が掲揚され、大東亜戦争末期、ここ鹿屋基地から出撃した特攻隊の英霊に対し、黙祷を捧げた。

海上自衛隊鹿屋基地儀仗隊が弔銃発射の礼を行い、P-3C対潜哨戒機が上空を追悼飛行した。御遺族126名を始め参列者約400名に及ぶ、鹿屋



小塚公園・特攻隊戦没者慰霊塔

市と海上自衛隊鹿屋基地共催の盛大な追悼式である。

旧海軍鹿屋基地は、支那事変勃発前年の昭和11年4月に開隊し、翌12年8月には、陸攻隊による初の渡洋爆撃が実施された。大東亜戦争末期の昭和20年2月には、第五航空艦隊司令部が置かれ、3月から6月までに67隊の特攻隊が出撃した。

鹿屋を飛び立った最初の特攻隊は、3月11日、西カロリン諸島ウルシー泊地へ突撃した菊水部隊特別攻撃隊である。乗員3名の陸上爆撃機銀河24機は、朝9時に鹿屋を出撃。ウルシー泊地までは直路約2500kmの大遠距離飛行であったため、二式飛行艇2機が誘導した。約10時間後の夜7時、「突入」の打電を、暗い防空壕の中で、第五航空艦隊司令長官宇垣纏中将は受信した。先頭機の突入で、泊地の常夜灯は

一斉に消えた。闇に沈んだ敵艦船に列機は突撃した。正規空母ランドルフ炎上大破。機の故障で不時着した11機を除く13機が突入し、二式飛行艇は1機も還らなかつた。銀河の42名、二式飛行艇の12名が戦死した。

「清風光月」  
梓隊第二小隊長宮沢宏男中尉(法政大学・海軍予備学生13期)の絶筆である。出撃前日の3月10日、帝都東京は焼

き尽くされ、比島マニラは既に陥落していた。硫黄島の玉砕は間近であった。

桜花特別攻撃隊神雷部隊の初陣も鹿屋基地からである。3月21日早朝、都井岬の145度、320哩付近に空母2群の米機動部隊を索敵機が発見、桜花攻撃を今やらなければ、梓隊のようにウルシーへの遠征を余儀なくされ、しかも成算は大きくない、と宇垣中将は考え、桜花隊に決行を命じた。

桜花隊隊長三橋謙太郎大尉(海兵71期)は、堂々たる体躯、美貌、豪気のケップガン(一次室長・中尉少尉の居室ガングラムの長)で部下の信望が篤かつた。目の不自由な姉があつたが、面倒は自分が見るから心配はいらないと母に常々言つていた。首から下げる白布には桜花投下訓練で殉職した刈屋大尉の遺骨が包まれていた。

滑走路にエンジンの爆音が響く。隊長機と戦果観測機2機以外の15機の一式陸攻は腹の下に桜花を抱えている。100機以上必要とされた掩護戦闘機は僅か30機。一式陸攻は双発の大型機(乗員7名)で速力が出ない。更に、2・2トンある桜花を積むと、高度3千mで120ノット(約220km)しか出

ず、300ノットも出る敵戦闘機の格好の餌食になることは目に見えている。「湊川だよ」陸攻隊長野中五郎

少佐は兵学校の同期生に漏らしていた。神雷部隊司令岡村基春大佐の見送る顔は曇っていた。

基地の空が夕焼けに染まる頃、掩護の零戦が1機、また1機と還ってきた。桜花隊員が桜花に搭乗し始めた午後2時過ぎ、陸攻隊は敵戦闘機群に襲われ、目標地点の前約100km付近で全滅した。炎上する攻撃機の中から、隊長機に向かつて敬礼して別れを告げる隊員の姿が見えたという。

名もいらぬ命もいらぬただ誠  
われ立つべきに敢然と立つ  
ある陸攻隊中隊長が遺した歌である。桜花隊15名、攻撃隊135名、戦闘隊10名、計166名の戦死であった。70年の歳月が流れた。当時を知る人も数少なくなつていく。しかし、祖国に殉じた純粋な若者たちの御霊に恥じることのないよう、私たちは日本の社会に貢献しなくてはならない。攻撃隊第二中隊長西原雅四郎大尉(海兵71期)の甥、弓立周治氏は、こう語り始め、追悼の詞を以下のように続けられた。

「特別攻撃隊に志願したその多くは、20代前半までの若者達と聞いております。最も楽しく、そして輝いている年代に、死を覚悟しながら、出撃する日

を待っていた彼らの葛藤や家族に対する思いは、想像に堪えません。また、



旧鹿屋基地司令部 (近く解体予定)



掩体壕

それを見送る家族の心境を思うと、遠い過去のこととはいえ、胸が張り裂けんばかりの思いがいたします。

私の母(大尉の姉)から特攻隊員としての任務を果たした叔父の言動を聞かされ、また、当時の写真を見せられ、その中に秘められた親への孝行、国への忠義、社会理念を論されて成長して

きました。70歳になった今でも、当時の若者の人間像を思い浮かべた時、今更ながら感銘し、また、自分自身を恥じらうことさえある今日この頃です。母も11年前に他界しました。

今ここに参列されている遺族の方々にも秘められた思いがおりでありでしょう。南方に散っていった御霊に報いるためにも、この思いを後世に伝えてい

かなければならないと思っています。(後略)

歴戦の優秀なパイロットを失ったことは、日本の大きな過ちであったと、鹿児島県雄飛会会長船川陸夫氏は、元飛行機乗りの気迫で、追悼の言葉を以下のように続けられた。

「・・・日本海軍の指揮命令系統は乱れ、暗号は解読され、電波探知機による待ち受け作戦を、海軍中枢部並びに指揮官は知らずや、あくまで巨艦巨砲主義、アウトレンジ(着弾距離において敵艦より勝る)戦法に固執し、マレー沖海戦において御霊たちが樹立した航空機決戦の戦訓を世界に示しながら、何ら変えることをしなかった。これに反し、素早く空母を主体とし、戦艦その他の

艦艇群を空母護衛の任務に編成替えしたのは、アメリカ海軍の方でありました。

更に戦闘勲章序列は、戦艦、大型艦艇撃沈・撃破を第一級とし、輸送船の撃沈・撃破は戦闘勲章の列外とするに至っては、補給・輸送の重大さの認識不足はドシロウトにも劣るシステムであり、兵員食料、医療品、弾薬、火器・銃砲などの輸送の重大さがなぜ解らぬのか。

指揮官先頭の伝統は崩れ、己の保身と功名を求め、威張ることは知っていても、頭を切り替えて研究することせず、旧態依然としての作戦指導、防空壕の中で出撃名簿を作成し、多くの部下を送り出し、生き残った指揮官達。

このような状態においても己の任務と責任を果たすべく、青春の全てを捧げた崇高な精神の御霊たちと、指揮官先頭の伝統を守り抜いた指揮官のいたことを忘れることはできません。」

そして、終戦の2週間前、大阪上空へ索敵に飛び立ち未帰還となった林伊夫中尉(京大・予備学生14期)の遺した詩を船川氏は引用された。

南九州の制空権

すでに敵の手中にあり

我らが祖国

まさに崩壊せんとす

生をこの国に受けしもの

なんぞ 生命を惜しまん

愚劣なりし日本よ  
優柔不断なる日本よ

汝 いかにか愚かなりとも

我ら この国の人たる以上

その防衛に 奮起せざるをえず

神雷部隊攻撃隊小島典吾一飛曹(甲飛11期)の弟・小島周三氏が遺族代表として謝辞を述べられた後、甲飛13期の中藤光雄氏が遺書を朗読された。第五神剣隊武二夫二飛曹(甲飛12期)が両親に宛てた手紙である。5月4日早朝、第五神剣隊の零戦25番爆装機は、沖縄周辺の敵艦船を目指して鹿屋基地を飛び立った。

「父母よ二十年の永い間、色々と誠に有難う御座いました。

私も今日のこの一人前の帝国海軍の戦闘機の搭乗員と成る事の出来たのも皆んな父母の愛の結晶であります。幼き頃よく母に色々心配掛けて申し訳ありません。小学校を卒業してもよく又中学校まで出してもらって何と私は幸福者であろう。

中学の時は母よ、朝早いのも嫌はず、よく頑張って下さいました。一回の遅刻も一回の欠席もなく私を通学さして下さいました。

母の心配を今新めて御礼申し上げます。それなのに私は何一つとして孝行も出来ずに居りました。然し今度こそ

は帝国のために立派に死ぬます。此のよき死場を得た事は男子の本懐此れに過る物はありません。必ずや敵艦船を撃沈致します。安心して下さい。私は神風特別攻撃隊神剣隊の一員として今日出て行きます。私の戦死の報あらば、あつぱれ二夫やつてくれたと嬉んで下さい。

決して落胆する父母でないと私は信じます。母よ喜んで下さい。みて泣いてはなりません。(中略)

男子と生まれ何を惜しまん若桜、桜の花と同じく散って行きます。二夫より

父母上様

海自第一航空群司令園田直紀海将補が特攻隊の御霊への感謝と空の防人としての覚悟を述べられ、「平和へのメッセージ」を鹿屋東中学二年生の河崎萌子さんが読み上げた。元飛行機乗りの皆さんが「同期の桜」を、鹿屋市消防団音楽隊の伴奏で歌った。

参列者一同、特攻隊908柱の英霊に献花を捧げ、第58回鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式は終了した。念願の旧鹿屋基地追悼式に参列させていただき、厚く御礼申し上げます。

### 能代八幡神社「特攻勇士之像」・旧陸軍東雲飛行場慰霊祭に参列して

評議員 及川 昌彦

平成27年4月28日(火)、秋田県能代市の能代八幡神社で執り行われた、特攻勇士之像・旧陸軍東雲飛行場墜落事故犠牲者の慰霊祭に参列した。

能代八幡神社に「特攻勇士之像」が建立されたのは、平成20年10月26日である(建立の経緯については、会報『特攻』第77号・第78号参照)。

慰霊祭は神事の後、東雲飛行場慰霊

奉賛会会長武田安一氏(陸士60期)による横笛演奏、代表による玉串奉賛が行われた。終わって、席を移して直会が行われた。

特攻顕彰会と当地の奉賛会によって建立奉納された「特攻勇士之像」の台座正面には「あ、特攻」の銘板の左に「留魂」の二字が金文字で刻まれている。これは吉田松陰の辞世の歌である「身はたとへ武蔵の野辺に朽ちぬとも留めおかし大和魂」

に拠ったものであることである。墜落事故は、昭和20年6月13日急降下訓練中に発生、訓練機がコントロールを失って地面に激突、地上にいた者も巻き添えになり計7名が即死したとのことである。慰霊祭は、毎年6月13日に執り行っていたが、今回、特攻顕彰会から秋田県特別攻撃隊招魂祭に代表を派遣することとなったのを機に、急遽、その前日の6月28日に執り行わ

れることとなったものである。所見

初めての秋田での、能代神社の「特攻勇士之像」・旧陸軍東雲飛行場慰霊祭と秋田県特別攻撃隊招魂祭に連日の参列となったが、東雲飛行場慰霊奉賛会の武田安一会長やツバサ広業の榎谷政雄社長のような慰霊奉賛事業に情熱を注いでおられる方々に若い人々も賛同し、協力運営していく姿は、今後の慰霊祭の在り方として、非常に参考となった。この慰霊祭は、行政とは無関係で、自衛隊の駐屯地司令や音楽隊、儀仗隊の参加もなく、志ある個人を中心とした有志によって淡々と運営され



ていた。

より多くの方々の参列が、御英霊に  
とって何よりの供養になると思われる  
ので、今後の慰霊祭への参列者動員に  
協力していきたいと思う。

### 第24回秋田県特別攻撃隊 招魂祭に参列して

評議員 及川 昌彦

平成27年4月29日(水)12時から秋  
田県秋田市川尻の総社神社において執  
り行われた、「昭和天皇御誕生記念祭・  
終戦70年秋田県特別攻撃隊招魂祭」に  
参列させていただいた。当顕彰会からは  
昨年、高橋暢会員が初めて参列したが、  
今年も引き続き参列することになった  
ものである。

来賓として参列された、展転社の創  
立者で新しい歴史教科書をつくる会の  
会報『史』の編集長でもある柚原正敏  
氏、月刊『正論』の編集長でフリー  
ジャーナリストの上高嘉郎氏、予備自  
衛官で、ブルーリボンの会広報部長で  
もあり、「やおよろずの森」代表の葛  
城奈海氏を始め旧軍関係者、現役・退  
役自衛官、民間有志他70名が参列した。  
また、義烈空挺隊の副隊長長渡部利夫  
陸軍大尉(陸士55期)が、秋田出身で  
あった関係で、空挺同志会会員の方々

の参列も多く見受けられた。

式典は正午に始まり、開会の辞の後、  
全員で昭和天皇武蔵御陵を遙拝し、雅  
楽器の伴奏による国歌斉唱、「国の鎮  
め」のラッパ吹奏の下での黙祷を行い、  
その後神事が斎行された。

続いて追悼文を朗読された藤本光男  
氏は、土浦海軍航空隊に志願し、夜間  
戦闘機「月光」の搭乗員となり、本土  
に來襲する米軍爆撃機の迎撃任務に就  
き、特攻命令待機中に終戦を迎えた  
という軍歴の持ち主であった。

次いで、司会により秋田県出身の特  
攻隊戦没者56名の御芳名が神前に奉読  
された。

続いて、招魂祭実行委員長山本高敬  
氏による大西瀧治郎海軍中将の遺書朗  
読があり、秋田ハーモニカクラブの皆  
さんによるハーモニカ伴奏の下、来賓・  
関係者による玉串拝礼が行われた。

神事終了後、主催者を代表して、ツ  
バサ広業社の榎谷政雄氏による挨拶が  
あり、全員で聖寿万歳を三唱し、「海  
ゆかば」を斉唱して閉会となった。

終わって会場を「ルポールみずほ」  
に移し、先の来賓3名による「英霊た  
ちと日本」と題するシンポジウムが開  
催された。その中で、来賓の葛城奈海  
氏は、秋田県出身特攻隊御英霊の遺書  
他を朗読された。

### 《読者の声①》

#### 全体と部分

#### —正しく国家観を理解する—

会員 石田 一 (陸士57期)

全体と部分の図式は、普通人にとっ  
て概して困難な国家観乃至人生観、世  
界観の理解を容易にする試みである。

国家と国民、その中の私の場合、国  
家が全体で、国民、そして私は部分で  
ある。全体あつての部分であり、部分  
あつての全体ではない。国家あつての  
国民であり、国民を元にして国家を考  
えるのは謬りである。全体と部分の間  
の主客本末を謬つてはならない。部分  
は必ず全体の部分であるから、全体を  
失つた部分のみのもの、つまり、不羈  
独立の個体は一切ない。私は日本国民  
であり、私が国家を軽視又は放擲する  
ことはなく、常に国家を想い、国家の  
ために尽力することに何の不思議もな  
い。現在この国は未だ根強い封建性悪  
玉論の風潮の中で、国家権力を罪悪視  
し、国家などなくていい、国の将来を  
憂慮するより自分のことを、国のため  
に戦うと答える若者が世界最低という  
事実が列島を占めつつあると聞くが、  
この謬りは是非修正せねばならない。

部分個体の集合する形象は目に見え

るが、全体そのものは見えずに存在す  
る。したがって、古来から、全体を象  
徴して見える形にしたのが、王、帝で  
あり、日本では今でも天皇である。宗  
教において偶像をもって見えない神仏  
を表しているのと同じである。世界の  
各国はかつて、王、帝があり、君主制  
であったが、革命、クーデター、敗戦  
シヨックなどのため、帝、王を追放、  
抹消して失い、全体、部分という国家、  
国民の基本的構造は崩壊してしまつ  
た。もし世界に皇室や王室がなかつた  
ら、人々は今より粗暴で倫理観に乏し  
く、我が儘で治安は乱れ、文化性に乏  
しく、無味乾燥な社会になっていたで  
あらうとも言われる。君主制を廃して  
共和制になり、不安定になった国家が  
多数ある。

人間の健全な国家観、全体観は、例  
えば、日本においては幼少時より、肇  
国の歴史、天皇について、学校教育を  
もって教育し学習させなければ、知識  
としての国家や天皇も発芽せず、芽も  
育つことができない。日本では敗戦時  
にGHQによって日本建国の原点を記  
した古事記を抹消されたまま、学校に  
おいて子供たちに肇国の歴史も天皇も  
教えていない。由々しき問題と言わざ  
るを得ない。

国家と国民という関係を、理解しや

すい全体と部分の図式を活用すること  
を、切に切に願って、この論考を終わ  
りとする。

《読者の声②》

「学徒出陣に思う」の所感

会員 佐藤 穰 (熊幼48期)

私は、熊本陸軍幼年学校第48期生で  
す。短い期間でしたが陸軍将校生徒の  
教育を受けました。その時の教育は、  
戦後今日に至るまで、私の日々生きる  
道徳の支えとなっています。毎年正月  
には国旗を掲揚し、初詣には明治神  
宮に参拝します。

私は戦後、旧制中学校に復学、旧制  
高校に進学し、旧制大学に進んで卒業  
しました。つまり、出陣学徒の後塵を  
拝し、追体験したことになります。旧  
制高校では、自治と自由を謳歌し、思  
想、学問、文学などの文化活動、スポー  
ツなど、学生は自由闊達に自らの意思  
に従って行動し、時に集まって酒を酌  
み交わし、伝統の中で継承されてきた  
寮歌を歌い、興に乗じて乱舞しました。  
知覧の基地を訪れた時、特攻隊戦没  
者に出陣学徒の多いことに衝撃を受け  
ました。軍人を志した私は生き残り、  
幸福な家庭を持ち、それなりの社会的  
地位を得て暮らしている。申し訳ない。

そして私の戦後の体験から、特攻に至  
るまでの精神的葛藤を想像しました。  
職業軍人には想像できない思想、信条、  
家族や愛人などについての苦渋、葛藤  
があり、それを抱えながら出撃された  
方が多数おられたのではないかと、そ  
ういう思いが胸を締め付けました。

長野県上田市の「無言館」も訪問し  
ました。家族や愛人、故郷の絵を描き  
ながら、命令により画筆を捨てて銃を  
執り、死んだといった人たちの館です。  
多くは兵か下士官で、恐らく最前線の  
最も苦しい戦争の中で戦死されたので  
はないでしょうか、戦争の残酷さと思  
い、暗澹となりました。

このようなことで、「きけ わだつ  
みのこえ」に集まる人々の意見は私と  
して十分に理解できます。もちろん、  
国家が国家としての公安や国防の機能  
を果たすため、警察や軍備を持つこと  
は当然ですが、過去の悲惨な歴史を学  
び、反戦を叫ぶことは、多くの友達を  
失った世代の人たちにとっては当然の  
ことではないでしょうか。

ついでに、現在の国の状況よりも過  
去の日本が良かったという論をされる  
方がいますが、そうでしょうか。大震  
災の混乱に紛れ、憲兵が社会主義者を  
殺し、流言飛語で民衆が自警団を作り、  
朝鮮の人々を襲撃して殺した戦前。大

震災に誰にも命令されることなく秩序  
正しく対処し、誰にも命令されること  
なく被災地の外から救援のボランティア  
アが大挙して押し寄せる今日の日本は  
十分に美しい国と思います。

最後に、「きけ わだつみのこえ」  
の文章を多くの紙数を与えて掲載した  
この会の英断に敬意を表します。特攻  
隊戦没者の慰霊を末永く顕彰していく  
ためには多くの人々の参加できる寛容  
な組織であることを望みます。私はた  
まに、偏狭なナシヨナリズムに出会  
うと、この組織にすることが場違いでは  
ないかと思ったりします。しかし、た  
った1年半でも将校生徒であったので  
から、この組織に今後とも加入してい  
きたいと思っています。

世田谷山観音寺

特攻平和観音月例法要報告

(毎月18日14時より境内の特攻観音  
堂において執行・参加自由)

平成27年4月18日 (土)

月例法要

評議員 及川 昌彦

今月の世田谷山観音寺・特攻観音堂  
における特攻平和観音月例法要は、土

曜日ということもあつて参列者は18名  
でした。

当日は、12時過ぎから小倉理事によ  
る「特別攻撃隊員の遺書を読む」と題  
する勉強会がありました。特攻隊員の  
遺書・遺詠・書簡から特攻隊員の心情  
を考察する素晴らしい内容でした。特  
に外国人からの視点が新鮮でした。

特攻観音堂での読経終了後、顕彰会  
から太田賢照大和尚への卒寿のお祝い  
の感謝状の授与式が行われました。  
その後、代官屋敷に移動しての直会  
では、衣笠専務理事による献杯の後、  
初参加者の自己紹介と希望者による近  
況報告があり、懇談となりました。今  
回の初参加者は、たまたま参加したと  
のことでした。元事務局員の大澤清氏  
も久しぶりの参加で近況報告をしてい  
ただきました。

この直会は、会員同士の意見交換が  
できる貴重な場であり、今回は、顕彰  
会としても、知覧や鹿屋などの特攻基  
地霊魂巡拝旅行を企画してほしいとの  
要望もいただきました。

平成27年5月18日 (月)

月例法要

評議員 原島 淳子

今月の世田谷山観音寺・特攻観音堂

における月例法要は、晴天の中、太田賢照山主も、元気なお姿で御出席になり、法要・直会ともに20名という多数の方々に参加されました。今回初参加の13名の方々も、神妙な面持ちで特攻平和観音経を読経しておられました。

法要後の直会では、恒例の初参加の方々（飯田評議員の陸士同期の方及び本年5月に『回天』を主題とした舞台に出演するという関係者・出演者）の自己紹介と挨拶が行われました。それぞれの自己紹介の中で、舞台に対する意気込みや想いを、役者の方に話していただきましたが、『マザー』という鳥濱トメさんを主題とした舞台にも出演したという森田和正さんは、お祖父様が海軍におられたという方で、他の出演者とは舞台に対する思い入れが少し異なっていたように思われました。もう少し早くお祖父様から昔の話を聞いておけばよかった、と思われたそうです。その言葉に、いつも同じことを思っている私は、大きく頷いてしまいました。このように、特攻を題材とした舞台に立つ役者の方達は、その当時を生きていた方達に、心を寄せながら演じることを心掛けていくれることでしょうか。熱い想いを込めた舞台にしていただけだと思います。

一通り自己紹介が終了した後、

ミュージカルに出演されていたという女優の方に、賢照山主が歌のリクエストをされ、『アナと雪の女王』で有名になった『レット・イット・ゴーありのままに』のつまの部分を披露していただくというハプニングもありました。どんな形であれ、特攻というものに関心を持って学び、様々なことを知り、慰霊顕彰に繋げていってくださると、若い世代の方達を見て、そう願わずにはいられませんでした。

今回一度だけで終わるのではなく、次もまた来て欲しい、その時は別の友達を連れて来て欲しい、そう強く願った法要の一日でした。

### 平成27年6月18日（木） 月例法要

評議員 長瀬 彰孝

今月の法要は、梅雨空の小雨が降る中、直会を含め7名が参加しました。恵淳和尚が導師を務められ、太田賢照山主は参列者の一員として参加され、久方振りにお元気なお姿を拝見することができました。また、若い方が、記帳だけで特攻平和観音の御尊像を拝観できたので、法要には参加せずに退席されました。法要は何時ものとおおり、「特攻平和観音経」と「般若心経」を参列者全員

で読誦する等滞りなく執行されました。

導師による法話はなく、場所を移して本坊での直会に入りました。先月の法要時に、時間がないため質問ができなかった年配の歴史研究者が、三枝成彰・堀紘一共著『特攻とは何だったのか』（PHP出版）の記述をもとに、特攻隊員の人数の違いを質問されました。特攻に関わる書籍は、250〜260冊あると言われています。その中には史実に基づくものもあれば、フィクションのようなものもあります。本の巻末に、著者が参考にした文献や資料・書籍が通常は掲載されていますので、特に数字についてはこれが根拠になります。過去の会報『特攻』にも、色々な記事の中で、特攻の定義、これに基づく当会が発刊した『特別攻撃隊全史』に記載された方々が、当会においては、慰霊・顕彰の対象である、と、はっきり記載されています。したがって、質問者への回答はこれに尽きるわけですが、心情的には、その志や、作戦計画には記述されなかった戦闘が多くあったであろうことも事実です。

恵淳和尚が最後に、特攻平和観音は、その志を同じくする隊員であれば等しく観音様の御心に抱かれることができると考える。そのため、神州不滅特攻隊員等も受け入れているので、靖國神

社と世田谷観音とで祀っている特攻戦死された御霊の人数の違いがあると説明されました。

今年には終戦70周年の節目に当たり、マスメディアでは、色々特集を組み、新聞紙上やテレビ等で太平洋戦争が取り上げられています。特攻についても色々な角度から取り上げられています。機関誌『特攻』で分かりやすくこの定義を説明することが必要かもしれません。また、会員宛に特攻に関わるハンドブック等を事務局で作成し、配布すれば、こういった疑問に答えることができると思います。

◇（月例法要記事担当者より）

6月14日（日）陸上自衛隊三宿駐屯地において、東京都隊友会世田谷支部の平成27年度定期総会が開催され、初めて参加した。昨年、当顕彰会の世田谷山観音寺における秋の年次法要では、岩崎修治支部長始め支部会員の皆様に受付等の作業の支援を頂いた。

総会では、岩崎支部長から、当顕彰会及び毎月18日に執り行われている月例法要について御紹介・御案内を頂いた。地元の方々に、当顕彰会について改めて知っていただく良い機会を作って頂けたことを、感謝申し上げます。

（倉形 桃代記）

## 特攻隊に関する新聞記事の紹介

「思い切りピアノば弾いてから死にたかーソナタ奏でた特攻隊員ー」

これは、今年5月3日(日)付けの読売新聞「よみほつと日曜版」に掲載された、特攻隊員の秘話を紹介する記事の表題である。「・・・ば・・・したか」というのは、佐賀地方の方言で、「・・・したい」という意味である。

この秘話は、佐賀県鳥栖市の市立鳥栖小学校(元鳥栖国民学校)に伝わる大戦末期の実話を基に、「月光の夏」として小説や映画で描かれた、特攻隊員にまつわる感動の秘話である。

以下同新聞記事の概要を紹介する。



1945年初夏、佐賀県鳥栖市の鳥栖国民学校(現・市立鳥栖小学校)を特攻隊員が訪れた。出撃前に、是非ピアノを弾きたいとの思いからだ。学校にはドイツ・フツベル社製のグラインドピアノがあった。1000円で家が建つ時代、町の婦人会が、子供らのため5000円の寄附を集めて購入したものだ。隊員は、ベートーベンピアノソナタ第14番「月光」を弾いて、去っていった。

「月光の夏」として小説や映画で描

かれた感動の秘話は、隊員の設定が変えられたほかは、ほぼ実話に沿っている(小説は、毛利恒之著作の同名書。映画は、「ハチ公物語」や「遠き落日」の監督として知られる神山征二郎監督による同名の映画)。女優の渡辺美佐子が演じた主人公のモデルは、地元で長年音楽教師をしていた上野歌子さん。戦後40年以上経ってポロポロになったピアノが廃棄されかけていた時、上野さんは冒頭の出来事に立ち会った時の思い出をラジオや学校などで話し、それが保存運動のきっかけとなった。

映画が描くように、出撃前に「月光」の曲を弾いた隊員は生き残り、45年振りに鳥栖小を訪れ、修復された思い出のピアノを演奏した。しかし、それは一部の関係者以外には知らされなかった。「映画『月光の夏』を支援する会」の事務局長だった斉藤美代子さん(72)は、「自分が目立つのは死んだ仲間に申し訳ないという思いがあったようです」と振り返る。

神山征二郎監督は、「敵艦に突っ込んでいく青年たちが抱いた怖さを描きたいと思いました。出撃した人を貶めたいようなことはしたくない、そういう思いでした。大きな映画会社の作品でないにもかかわらず、200万人以上

が見たと聞きます。私にとっても大事な作品の一つです」と話す。

上野さんは、「支援する会」が設立された1992(平成4)年2月、講演のため訪れた宮崎県日向市で倒れ、映画の完成を見ることなく世を去った。ピアノは今、鳥栖駅近くにある文化施設サンメッセ鳥栖に展示されている。映画化を機会に、フツベル社があった独ツァイツ市との交流も続く。斉藤さんは、「映画になったことでこの話が全国に広く知られました。今年は戦後70年。今後も語り継いでいくため、NPO法人を作りたいと思っっています」と語った。

ピアノを弾いた特攻隊員のエピソードは、映画の主人公のモデル上野歌子さんの個人的体験だった。それが広く知られるようになったのは、1989(平成元)年、ラジオの深夜放送で、上野さんがこの思い出を語ってからだ。後に、「映画『月光の夏』を支援する会」の事務局長を務める斉藤美代子さんは、自宅に帰る車中で聞いて涙が止まらず、翌朝すぐ上野先生を訪ねました」と語る。

この年の12月に、上野さんが鳥栖小学校でも児童に講演したことが報道され、老朽化したピアノの保存運動につながった。1991(平成3)年には

小説ができ、映画化の話が持ち上がる。製作費のうち1億円を地元が負担することになり、支援する会が計1億2000万円を集めて映画化が実現した。

鳥栖小には今、この秘話に共鳴した画家の深川善次さんが佐賀大学退官記念に描いた油絵「秘話学徒出陣」も展示されている。サンメッセ鳥栖のピアノの横に展示されているのは、複製である。

楠修一郎校長(58)は、「保存の話が持ち上がったころ、実は私もこの学校で教員をしていました。大変いわれのあるピアノということでしたが、体育館の隅で傷だらけになっていて、音もきちんと出ない状態でした」と語る。児童たちには夏休みの全校登校日などで話したり、職員が新しく赴任してきた際には必ず伝えるという。「当時の校舎も空襲に遭いました。戦争を体験した人が少なくなっている中、忘れてはいけない話として伝えていきます」と語った。



なお、戦時中、鳥栖市の近くには、陸軍の目達原飛行場があった。特攻隊が前線の知覧や萬世特攻基地に向かうための中継基地でもあった。鹿児島県の萬世飛行場から出撃した、子犬を抱





### 終戦七十周年記念公演

### 『帰って来た蜚』

### ～未来への伝言～

平成27年6月11日(木)から17日の間、六本木の「俳優座」において、(株)カート・プロモーションの代表取締役であり、主幹プロデューサーでもある柿崎ゆうじ氏脚本・演出の表記舞台演劇が上演された。この作品は、平成20年の初演以来、2年毎に上演を重ねて今回が第5回目である。その都度副題を「～神々のたそがれ～」、「～慟哭の詩～」、「～蒼空の神々～」などとしてきたが、今回は「～未来への伝言～」



とした。その意味するところは、柿崎氏の言葉を借りれば、「再演を重ねる大きな原動力は、戦後七十年を経て先の大東亜戦争の真実が風化する事が無いよう、そして神武の御世以来、築き上げてきた日本人の誇りが、砂漠の水の様に失われていくのを見過ごす訳にいかないという思いからであります。・・・たった一つしか無い尊い命を投げ出すことで、自分の故郷の山河が、愛する人々が、爆撃される日を一日でも一時間でも遅らせる事が出来る信じ、そして未来の日本人はきっと自分たち特攻隊のことをいつまでも忘れないでいてくれるだろう、祖国が日本がいつまでも続いていくって欲しい、そん

な彼らの願いを現代に生きる人々に伝える必要があるので、その思いを込めて、特攻平和観音堂に参拝し、特攻平和記念館やホテル館(富屋食堂)を見学し、なでしこ会の皆さんとの語り合いも行っている。カート・プロモーションの代表者である柿崎裕治氏は特定非営利法人(NPO法人)知覧特攻の母鳥濱トメ顕彰会の理事長でもある。更に、出演者や関係者は、沖繩の洋上慰霊・献花や物語の中心人物宮川三郎軍曹(戦後少尉)の故郷・新潟県小千谷の実家を訪ねたり、自衛隊研修として、筆者らの学んだ埼玉県朝霞の振武台(旧陸軍豫科士官学校、現陸上自衛隊朝霞駐屯地・東部方面総監部)の「振武臺記念館」や航空自衛隊百里基地訪問なども実施している。

この舞台演劇は、既によく知られているように、日本ペンクラブ会員広井忠男著『蜚になった特攻兵―宮川三郎物語』と『宮川三郎少尉 二十歳の書簡集』(他に鳥濱トメの二女赤羽礼子さんの口述や資料等を基に書かれた音楽評論家石井宏著『ホテル帰る―特攻隊員と母トメと娘礼子』がある。)等を基に脚本が書かれ、演出されているが、その粗筋は、「大東亜戦争の末期、鹿児島県知覧陸軍特攻基地には、全国各地で編成された特攻隊員たちが集結し、沖繩の米軍艦艇撃滅のために出

な彼らの願いを現代に生きる人々に伝える必要があるので、その思いを込めて、特攻平和観音堂に参拝し、特攻平和記念館やホテル館(富屋食堂)を見学し、なでしこ会の皆さんとの語り合いも行っている。カート・プロモーションの代表者である柿崎裕治氏は特定非営利法人(NPO法人)知覧特攻の母鳥濱トメ顕彰会の理事長でもある。更に、出演者や関係者は、沖繩の洋上慰霊・献花や物語の中心人物宮川三郎軍曹(戦後少尉)の故郷・新潟県小千谷の実家を訪ねたり、自衛隊研修として、筆者らの学んだ埼玉県朝霞の振武台(旧陸軍豫科士官学校、現陸上自衛隊朝霞駐屯地・東部方面総監部)の「振武臺記念館」や航空自衛隊百里基地訪問なども実施している。

な彼らの願いを現代に生きる人々に伝える必要があるので、その思いを込めて、特攻平和観音堂に参拝し、特攻平和記念館やホテル館(富屋食堂)を見学し、なでしこ会の皆さんとの語り合いも行っている。カート・プロモーションの代表者である柿崎裕治氏は特定非営利法人(NPO法人)知覧特攻の母鳥濱トメ顕彰会の理事長でもある。更に、出演者や関係者は、沖繩の洋上慰霊・献花や物語の中心人物宮川三郎軍曹(戦後少尉)の故郷・新潟県小千谷の実家を訪ねたり、自衛隊研修として、筆者らの学んだ埼玉県朝霞の振武台(旧陸軍豫科士官学校、現陸上自衛隊朝霞駐屯地・東部方面総監部)の「振武臺記念館」や航空自衛隊百里基地訪問なども実施している。

宮川三郎軍曹 (第104振武隊)



撃して行った。その多くは、かつてこの基地が、福岡の陸軍大刀洗飛行学校知覧分校であった頃の少年飛行兵出身者であったが、その当時から、少年飛行兵達の母親代わりとして慕われ、また、特攻隊員となった彼ら10代後半から20代前半の若者たちを手厚くもてなし、彼らのために無限の愛情を傾けたのが、軍指定「富屋食堂」の女主人鳥濱トメであった。富屋食堂を訪れた大勢の若者達の中に、色白で優しげな青年がいた。彼の名は宮川三郎、新潟県小千谷市出身で、小千谷高等小学校2年卒業後、県下のエリート校・長岡工業学校3年に編入学し、抜群の成績で同校卒業後、立川飛行機製作所に入り、技術者となったが、昭和18年春、早稲田の理工学部と慶應の工学部、更に航空機乗員養成所の三つを受験し、三校とも合格して迷った末、宮川はパイロットになる道を選び、操縦科第14

期生として印旛地方航空機乗員養成所に入所した。一方、同じ小千谷の出身で、高等小学校の2年間でライバルとして級長、副級長の座を取り合った仲の松崎義勝は、別の道を歩んで陸軍少年飛行兵を志願し、第13期生となった。そして、宮川軍曹は第104振武隊員として、4月12日、九九式襲撃機に搭乗、万世飛行場から沖縄へ向けて出撃したが、エンジン不調により途中から引き返し、飛行機は再整備のため後方基地へ移動したままであった。その間、知覧に転属となり、出撃の日を待つ身となった。一度出撃し、生きて戻った汚名を着せられ、苦悶の日々の中で、しばしば富屋食堂に通ううちに、5月半ば過ぎのある日、二人は富屋食堂でばったり出会ったのである。二人は肩を叩き合って再会を喜んだが、松崎伍長は、第50振武隊所属の一式戦(隼)搭乗員で、あさって出撃だという。松崎はその5月20日に、出撃し、還らぬ人となった。宮川の飛行機も修理が終わ

り、出撃は6月6日と決まった。その出撃の前夜、6月5日は宮川の満20歳の誕生日である。トメは心尽くしの手料理で誕生日を祝うと同時に、出撃前夜のはなむけとした。富屋食堂の横に小川が流れていた。漆黒の闇の中、小川の上を蛍が飛び交っていた。宮川は、

共に出撃することとなった僚友の滝本恵之助伍長やトメと二人の娘達と5人でそれを眺めていたが、宮川が「小母ちゃん、俺、心残りは何もないけど、死んだらまた小母ちゃんのところへ帰ってきたい」と言った。出撃した6月6日の夜、宮川が言った場所(玄関)時間(9時)に1匹の源氏蛍が富屋食堂に舞い込んだ。不思議な事が起きたことに驚き、直ぐに全員が立ち上がった。肩を組み、「同期の桜」を歌った。切ない歌が終わった頃、その蛍は、再び知覧基地の闇に消えて行った」というものである。

この演劇を通して、特攻隊員達の優しい心根、愛する人々、故郷、国を守る決意が、伝わってくるが、その特攻隊員達に無限の愛情を注いだ、鳥濱トメさんこそ、真の母性愛に生きた大和撫子として語り継ぎ、顕彰すべき女性であろう。トメさんについては、その二女礼子さんの息子であり、鳥濱トメ顕彰会の特別顧問、また、当特攻顕彰会の会員で、「薩摩おごじょ」の店長でもある赤羽潤氏の次の言葉に良く表れている。「・・・そのトメが、私によくこんな事を言っておりました。『私はねえ、あの子達みんなを、私の子供にしたかったの・・・でも本当のお母さんがいるわけだから、そういう訳には

いかなかったのよ。・・・あの子達はみんな、優しい、良い子達だった』と。・・・トメは特攻隊員達の心を自分の心で優しく包み、それは実の母親を超える愛情だったのかも知れません。トメが私に語ってくれた、知覧から飛び立って行った特攻隊員達の『特攻魂』とは、『思いやりの心』です。『祖国日本を純心に愛し、その日本には故郷があり、父・母・兄弟がいて、恋焦がれた女性もいたことでしょう。その上に米軍は、雨あられの様に爆弾を落とす。その範囲を少しでも狭くする事が出来れば、その時間を少しでも遅らせる事が出来ればと、たった一つしか無い命を散らしてでも守りたいものが、あの子達にはあったの』と、私は今でも目を閉じると、トメがよく口にしていた言葉を思い出します・・・』と。そのトメさんを演じたベテラン女優の伊藤つかささんを始め、長女美阿子役のさとう珠緒さん、二女礼子役の竹島由夏さん他の皆さんもなかなかの好演であった。大変感動させられた。

このような演劇には、限られた時間や空間の中で、特攻隊員達の真実の姿や想いを語り伝えて行く事の難しさがあるであろうが、今後とも大いに研鑽を積みながら、努力していただきたいと思う。

(飯田正能記)

〔特攻顕彰会・研修会〕  
 埼玉縣護國神社・特攻勇士  
 之像慰靈祭と旧陸軍桶川  
 飛行学校（熊谷陸軍飛行学  
 校桶川分教場）跡見学

昨年度に引き続き今年度も、表記の研修会を次のとおり実施しますので、できるだけ多数の全体委員会委員並びに有志会員の参加をお願いします。

1 目的

平成27年度特攻顕彰会事業（会員の資質向上施策）の一環として、平成25年10月31日、埼玉縣護國神社に建立奉納された特攻勇士之像慰靈祭の齋行と旧陸軍桶川飛行学校（熊谷陸軍飛行学校桶川分教場）跡見学を行うことにより、特攻隊に関する資質の向上に寄与する。

2 時期

平成27年10月31日（土）11時～17時

3 日程概要

11時 埼玉縣護國神社社殿前集合  
 11時15分～45分 特攻勇士之像慰靈祭齋行  
 11時50分～12時20分 慰靈祭終了後桶川飛行学校跡へ移動

12時20分～13時

12時20分～13時

校内施設において昼食及び白田智子理事より概要説明  
 13時～14時30分 自由見学（希望者は本田飛行場跡も見学可能）

15時 桶川駅前にて解散  
 15時～17時 解散後桶川駅前にて反省会（有志のみ自由参加）実施  
 4 会費（昼食代・資料代・桶川からの交通費等）

5 申し込み  
 （公財）特攻隊戦没者慰靈顕彰会事務局まで  
 電話 03-52213-4594  
 FAX 03-5213-4596

6 その他  
 ① 担当（連絡先）  
 ・企画・実施全般 及川正彦（090-8013-3171）  
 ・会計 原島淳子（090-2216-8907）  
 ② 雨天決行。  
 ③ 緊急時の連絡は、及川又は原島まで。

【参考事項】

○旧陸軍桶川飛行学校（陸軍熊谷飛行学校桶川分教場跡）  
 木造建築で、全国唯一現存する旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の建物群。

戦時中、多くの飛行兵を養成して戦場に送り、昭和20年2月から旧陸軍特攻隊「振武隊」の訓練基地となり、多くの隊員がここから前線の鹿児島県知覧特攻基地へ移動し、沖縄方面へ出撃して散華された。

学校跡地には、本部兵舎棟や守衛所・車庫などの木造4棟と、コンクリート造りの弾薬庫が残っている。特に兵舎は、戦時中にタイムスリップしたような感覚に襲われる。

当顕彰会の白田智子理事の実父伍井芳夫大尉（戦死後中佐・陸士少尉候補生20期・54期相当、昭和15年11月20日陸軍航空士官学校卒業）は、桶川分教場の教官であったが、32歳の時、妻子4人を残して特攻を志願し、第23振武隊長となり、教え子と共に、昭和20年4月1日、九九式襲撃機の特攻隊を率いて知覧特攻基地を出撃、慶良間列島南海域の米艦船群に突入、壮絶な戦死を遂げられている。

今回、戦争、特に特攻隊の記憶を未来に繋ぐ遺産として貴重な建物群の見学会を企画したものである。参加希望者は、事務局まで連絡して下さい。

事務局からのお知らせ

一 第64回特攻平和観音年次法要の齋行について

恒例の特攻平和観音年次法要が平成27年9月23日（水曜日・秋分の日・四連休の最終日）の午後2時から世田谷山観音寺特攻観音堂において、例年のおとおり、駒繁神社との神仏習合により齋行されます。

この年次法要の詳細にしましては、同封の「年次法要のご案内」に記載しておりますので、多くの皆様方、お誘い合わせの上、ご参列賜りますようお願い申し上げます。

二 平成27年度会費納入について

平成27年度の年会費が現時点で未納となっております方には、多くは、今回事務所の「郵便払込取扱票」の会員欄に、入金済の表示がなく、「年会費納入のお願い」が封入されていますので、平成27年度の年会費の納入方よろしくお願ひ申し上げます。

なお、会費欄に、入金済とゴム印で表示されている方は、本年度の年会費は既に納入済となっております。

特攻平和観音年次法要に参列される方は、「郵便払込取扱票」の出席に○印を記入され、お布施と年会費をお払

い込みください。

### 三 税額優遇制度に関する説明

以前にもご案内しておりますが、当顕彰会は、総理大臣から「税額控除対象法人」として認可を受けており、年度の会費及び寄附金の合計（寄附額）が対象となっております。この寄附額から2千円を差し引いた金額の40%が税額控除となり、計算される所得税から控除を受けることができます。

例として、会費3千円と寄附金7千円の合計1万円を年度で納められた方は、確定申告により3千2百円が所得税から控除される計算となります。

現在は、毎回の振込時に、一万円以上の場合に限り税額控除証明書と寄附金領収書を自動的に送付しておりますが、確定申告時に領収書が必要な方は事務局に申し出て下さい。

### 四 「靖国カレンダー」の幹旋

今回初めて、「靖国カレンダー」の幹旋紹介書面を同封しましたので、必要な方は、内容を確認の上、「郵便払込取扱票」の靖国カレンダー欄に必要部数及び送料を合計した金額を記載して申し込んでください。

ただし、「英霊にこたえる会」からの直接の発送となりますので、発行時期等の都合により、お待ち頂く場合がありますので、ご了承下さい。

## 事務局からの報告等

### 寄附者御芳名(敬称略)

(平成27年4月1日～6月30日)

(単位千円)

- 一〇〇 館本 勳武
- 七 吉田 昭司 七 大坪万里子
- 三 中川 香織 二 中曾根慶蔵
- 二 小貫 達雄 二 石林 保徳
- 二 佐々木 朗 二 平田 重夫
- 二 島田 正登 一 川井美保子

御芳志誠に有り難うございました。

### 新入会員名簿(敬称略)

(平成27年4月1日～6月30日)

- 北海道 嶋田不二雄
- 山形県 富澤奈津子
- 埼玉県 野元 充昭 住吉 光幸
- 水野 章 前田 真一
- 茨沼 敏彦 上野 統弘
- 葭田 秀夫 荻野 武克
- 金古 充弘 長嶋 浩之
- 加藤 裕 長堀 守利
- 河西 伸人 田邊 亮
- 高崎ひなの
- 近藤 五朗
- 英霊にこたえる会
- 鎌形あかね 桐野 健智

- 神奈川県 田村 司 細田 順子
- 愛知県 熊野 登
- 滋賀県 杉本 央
- 奈良県 岡崎 全宏
- 熊本県 中田 晃文 谷口 信一
- 宮永 真宏

### 会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

- 埼玉県 桑原 武次(27・4・8)
- 石林 保徳
- 千葉県 吉武登志夫
- 東京都 伊集院雅英(27・5・22)
- 中條 弘道(27・4・24)
- 岐阜県 松井 栄治
- 奈良県 日下 功
- 徳島県 林 泰
- 大分県 田代 義信(27・4・4)
- 鹿児島県 芝野 節夫

### 会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動が続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

- 当顕彰会の沿革
  - 昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
  - 昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

- 初代会長 竹田 恒徳 元宮様
- 二代会長 瀬島 龍三氏
- 平成5年11月財団法人認可
- 三代会長 山本 卓眞氏
- 平成23年1月公益財団法人認定
- 現理事長 杉山蕃氏

- 当顕彰会の主な事業
  - ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
  - ・広報誌等の発行
  - ・講演会等の開催その他

- 年会費
  - ・一般会員 3000円
  - ・学生会員 1000円

訂正し、謹んでお詫び申し上げます。  
(訂正箇所)  
44頁1段 14行目  
誤 大阪府 松本 賢二  
正 兵庫県 松本 賢二

東京都千代田区九段北3-1-1  
靖国神社遊就館内 公益財団法人  
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局  
電話 03-52213-4594  
FAX 03-52213-4596

### 会報『特攻』第105号正誤表